うと目論んだ、さういふものに對しては、やァやつた、やつた、旨くやつたなといふ騒ぎを起します。けれども本當に靜かな正しい道に立つて、心を潛めて、さうして何時も餘情や幽玄に匂を漂はせるといふ趣になると、それ程の共鳴を持ち得ることが少いのであります。併し盲千人と云ひますが矢張り目明も居ります。存外歌を作る人達でなくて、知識階級の中には、歌を作らなくても、日本の古典を十分に讀んだ人達、或は西洋の詩を讀み、或は文學としての理解を正しく持つた人達には存外わかつた方があつて、多磨の歌風といふものはかうだ、幽玄とはかう、直觀といふものはかうだと見定めてくださる人達もおありぢやないかと思つて居ります。だから私も別に悲觀はいたしません。併し十人位はわかつてくださる方があるだらうと思ひます。白秋は何だ、空靈詩人ぢやないか、魂のない詩人である。あれは感覺ばかりぢやないか。あれは言葉の詩人である、言葉だけで何にもないといふことを昔から云はれました。內容のない詩人だと云つて居ります。處女詩集の『邪宗門』や抒情詩の『思ひ出』を發表した頃にはよくさう云はれました。現在の白秋そのものに對しても矢張り大してわかつてもらつてゐるとは思へません。何かは私も持つてゐる。さうして此の現在持つて居るものは矢張り昔も持つて居たのであります。思想がないと見えたところに思想が必ずあつたと信じて居ります。それを見つけることは中々難しいらしいのですが、ただ妙に表面がぴかぴかしてゐる球がある、あれは何だ、ぴかぴかして居るだけではないかと、中身は空なんだらうぐらゐで、よくも見ないで引返す。その中に飛込んで來てくれれ

ば何にもないやうなところに一杯滿ちたものがあるのだといふことが知つて貰へるのではないかと思ひます。それから最近の『白南風』の歌の中には新しい多磨の歌風、方向といふものが皆樣にお目に掛けてあると思ひますので、それをもう一度讀み直して戴きたいと思ひます。ただ漫然と見ないで一首々々を靜かに讀んで戴けば、私が今さら多磨の綱領を書く必要もなければ、また色々御注意をする必要もなく自然とおわかりになることと思つて居ります。

それから多磨の綱領であります。あれは多磨人がどういふ方向に進むべきか、どういふ精神を以て之を行ふべきかといふことを書いてある積りであります。ただあの文章が難しいとか、漢文體で美辭麗句であるとか云はれて居りますが、綱領であるからあれでよろしい。而も成可く簡略に簡略にと思つて書けばああいふ文章になるのは自然であります。俗にいふ美辭麗句とはああいふものではない。私は本格の文章を書いたつもりであります。ただ簡潔だから難しいと思ひます。ただあれは敷衍しますと相當に長い文章になると思つて居ります。併し皆さんにはあの簡潔な文章の中から本當の多磨の精神を汲んで戴けることと信じて居ります。お家へ歸られたら多磨綱領をもう一度吟味して戴きたいと思ひます。

それから、よく世間からは多磨の歌といふものはみんな同じぢやないか、白秋一人あればいい

ので皆同じやうに見えると云はれる。之に對して私は何回も辯解しましたけれど、よくわかつて居らないらしいのであります。一人々々に就いて愛情を以て見て行きますと、實に多磨は多士濟濟であり、各人が各方面に展開して居ります。新しい氣概に滿ちて居り、新しい動きを見せて居ります。私は一人々々にこの人の歌風はどうか、あの人の歌風はどうかといふことを平生に認識して居ります。美點も缺點もわかつて居ります。はつきりと私は見定めて居るつもりであります。これは愛情を以て見なければなりません。ただ世間の人はちらつと見て、あれはああだなと知つた風をして何かと申しますが、漠然と遠くの方から眺めて華やかだな、賑やかだな、多磨はやつてゐるなと霞だけを眺めて居ては駄目だと思ひます。矢張り飛込んで來て一人々々の作品を讀んで貰ひたいと思つて居ります。

それから私は統制といふことをよく申しますけれども、それは多磨の一團としての根本精神や體系の上に統制を行ふことであつて、各人の歌風に就きまして、これはかうしなければならぬといふやうに私自身でそれを律しようとは決して思つて居りません。ただ私が根幹となつて色々な枝が生じることを希望して居ります。私が行はなかつたことでも、私の今日の境涯或は表現その他を立脚點として、新しく皆さんが進んで下さることを、何時も望んで居ります。だから多磨は本質主義であり實力主義であり、また努力第一であります。何時も新しい優れた作品を見せてく

れる人を、私は何時も第一線に押し立てて居ります。これだけは我ながらいい事をして居ると思つて居ります。だから我と思はむともがらは何時もどしどし第一線へ躍進すべきであります。それは既に特選された作品を皆さんが御覽になり、毎月の位置を御覽になるとよくおわかりになると思つて居ります。だから多磨があらゆる方面に向つて觸手を伸して行くといふことは實に愉快だと見守つて居ります。ただこの中にはうつかりすると飛んでもない方向へ向つて逸れて行く者がないとは限らないのであります。今日でも既に色々の動搖が現れて居るやうであります。それが非常に好い結果となるならばよろしいが、兎角輕薄に亂れ易い。その中には又相互影響といふものが可なりあつて、誰か一人新しいことをやると、それにすぐと喰ひついて行く。これは餘程用心しなければならぬ。どうせ眞似をするならば白秋を眞似して戴きたい。それが安全です。何か新しい動きが見えると直ぐについて行くといふことは非常に危險であります。で、さういふ新傾向の試みをする人は、自分自身に相當の責任を持つて貰ひたいと思ひます。無責任はして貰ひたくない。だから動搖が始まつた時には矢張り振返つて多磨綱領を讀んで貰ひたい。多磨の歌風といふものについて、いつも根本に立ち直つて貰はなければ、將來は中々私は危いと思つて居ります。これは多磨だけではなく、日本の短歌といふものも或は危險に瀕して居るのではないかと思ひます。これは『新萬葉集』の企でよくわかつて居ります。今は實に危い秋ぢやないかと思つて居ります。だからこの場合多磨の人々もしつかりした覺悟を以て多磨の歌風といふものを反省

して戴きたいと思つて居ります。

それから多磨の綱領の中にも直觀といふことを何時も述べて居りますけれども、直觀といふものはどういふものか。直觀するに就きましては、本當に或るものに向つて自分の鋭い精神の角を以て觸れ得るかどうかといふ修業を豫めして戴きたいと思ひます。ただうつかりして居ては中々アンテナにラヂオの電波が引掛るやうに引掛つて來るものではないのであります。

それからよく新しいことをやり出す時に、何か一つやつてやらうと一捻りも二捻りもする。併し今迄の經驗に依ればその新しい試みはその時限りのものであつて、決して長續きしないやうであります。矢張りおとなしい道を進んで、附燒刄でなく自分自身の體驗からして出て來るのでなければ、本當に正しい歌は出來難いのであります。それから往々新しいことをやつてのけたと思ふと驕慢心になる。見てくれがしになる。その獨りよがりが非常に危いのであります。よく人は自分は非常に新しいことをやつたといふ自信を持つて居りますけれども、何ぞ圖らん、古い本を讀んで見ると古人が必ずやつて居る。私もちよいちよいやつて見て驚くことですが、これは見つけものだと思つても、古い日本の先人が一度は同じことをやつて居ります。決して天下に新しいものはないのであります。どうかして新しいものと見えても、大抵一度は昔の人が同じやうに觸

れて來て居るのですから、うつかりしたことは云へるものではないと思ひます。だがさうかと云つて臆病な氣持になつて、新しいものに對して何時も手を動かすことが出來ないで、尻込みばかりして居るやうな構へた氣持では、矢張り將來の短歌を作る見透しもつかなくなり、方向の舵も誤つてしまふから、この點も餘程考へなければならぬと思つて居ります。ですから私はやかましいことは云はない。自分自身に對しては潔癖でありますけれども、會員諸君の歌に對しては、あんなやかましい人がどうしてかう云ふ風に寛大になつたのかと評判されるやうになつて居ります。十年二十年前は實にやかましく、B君あたりが百首も作つて來ても一首も採用しなかつたことがある。この頃は成可く一首でも多く採つてあげるやうにして居ります。三部の作品も一文字二文字を直せば良い歌になるのは、それに對しても頭を突つ込んで、日に三首位しか直せないことがある。どうかして一首でも多く採らう……何か新しいことを進んでやつたやうな人に對しても、矢張り拍手を送つた方が勵みになると思つて居ります。だから他處から御覽になると、寧ろ私は新しいもの好きで、內容主義で、古いものは兎角厭がつて面を反けるやうに思はれて居ります。新しいものは好きです。若々しいものは好きです。だから强ひて嚴格にはしないで居ります。十分にその人が成長して行く儘に任せて居りますけれども、時々やかましく云つたらいいのぢやないかといふこともちよいちよいありますが、さうした場合には皆さんも既に成人して居りますから、自分自身で反省して行つた方がいいと思つて居ります。私は餘りやかましく云はないで、靜

かにその人の力で、自分で反省せられんことを祈つて居ります。

明治畫壇の大家橋本雅邦先生の話ですが、雅邦先生は自分の弟子を一歩も自分の畫室に入れなかつたさうであります。これには可なり偏狹だといふ人もあるやうに聞いて居りますけれども、必ずしも偏狹でなかつたかも知れません。自分と同じ程度、或は自分を理會し得る程度に、その心境・境涯といふものが進んで來ない弟子を、恣に自分の畫室に入れることは危險だといふことは私にもわかりさうな氣がします。性來才氣煥發の人達は、模倣も上手であり、小手も利いてゐる、だから自分の師の一番最近の筆法・表現法といふものにも直ぐに喰ひついて行く、苦勞なしに追ひついて行く、それだけの體驗がなくして一番新しい……師がやつとこせと上つて來たその技巧・技法に取つついてしまふのです。だからうつかりするとただ形態だけの模倣になつて、本當に生命のない透き寫しになつてしまひます。さうすると師自身が困られる。自分の大事な弟子にうつかりして本當の道を誤られては苦しいのですから畫室に一歩も入れない。餘程上達した人でなければ入れないといふ事も一理あると思つて居ります。で、今に始まつたことではありませんけれども、私の『雲母集』を御覽になればわかりますが、實に亂暴にやつてのけた。師匠なしでやつたのですから亂暴でした。併し乍らあの新傾向は自分自身で思ひきり方向轉換して行つたので、まづいのはまづい乍ら何かなまなましい生彩といふものがあつたのぢやないかと思つて居

ります。併し現在の歌壇の技巧といふものは隨分進んで來て居りますので、今日に於いて『雲母集』等の文庫版などを世間に改めて發表するといふことは恥しい次第であります。新しい明治時代の短歌といふものは大勢の優れた歌人達の體驗の上を乘越して、さうして表現技巧にも凡ゆる色と匂を限りなく取り入れて來て居りますが、その中に立ち雜つて決して負目を感じないところの技巧のよさを今日の若い人達は隨分持つて居ります。けれどもそれだけに實に私は危險ではないかと思つて居ります。私共が二三十年掛つてやつたことを、若い人達は一月も經たずに修得して了ひます。これは危險です。多磨の中にも實に飛躍的に今度は名作を出してやらう、大力作を出してやらうといふ彈みを十分に見受ける。雜誌多磨は一種の道場であり、研究室であり、習作の奬勵機關であるから皆さんが一生懸命にこの中で彈みきつて居られますけれども、一氣の飛躍といふことに就きましてもう一度よくよく反省して戴きたいと思ふのであります。どんな優れた人でもさう突拍子に飛躍をすることが出來るものではありません。或る時「貴方の歌は格別新しいと思つて居りましたけれども、古い歌とよくよく比較してみると大して飛躍はして居ないぢやないか、紙一重しか隔たつて居ないぢやないか」と詰問されたことがあります。紙一重と云つても、例へば水泳ならば水泳は紙一重は愚か、一秒の何分の一のタッチの差で世界記録を作つて居ります。大飛躍ぢやない、一秒の何分の一です。チッといふ間もない位で大記錄が作られて居ります。三段跳ならばと云つても、三段跳の新しい記錄もほんの一寸の紙一重の差で出來る。すば

ぬけた神様の爲さるやうなものではない。大飛躍ぢやありません。大飛躍は神様か幽靈に決つて居る。僅かの差の進み方をしかして居ない。それでゐて毎日々々の猛練習は見る目も痛ましいくらゐである、練習々々々である。若い人達がそれこそ氣負つて今度こそ一大飛躍をしてやらうと焦るのは無理で、さういふことよりも眼前の日々の修業に向つてこつこつと一つ宛石を積み上げるやうに、平常こつこつとやつて行くことでなければ優れた表現の持主になれないと思はれます。今日、あとで私の家の小さな展覽會を御覽になるとわかりますけれども、十七八年も掛つて小田原時代の歌の完成しないものが何百あるかわかりません。私は之を勉强の積りでやつて居ります。それから『雀の卵』の中に黑い鉛筆、赤い鉛筆、靑い鉛筆で書き入れてありますが、あれを御覽になりますとわかりますが、こんなに直し方があつたかと思つて實に白秋といふものが、永い間馬鹿なことをやつて居たなといふことです。あれは恥さらしでもあり種あかしでもあります。減多に外へ出せるものではない。皆さんだからお目にかけるのです。それから『雲母集』も赤いのや靑いインキで線を引張つたり色々して居ります。だからよく御覽になつてこんなに歌は難しいものかなと云ふことを分つて戴きたいと思ひます。要するに一時の大飛躍を願ふよりか、毎日々々こつこつと何の爲榮えのない仕事でも、克明にやつて行くより外に道はありません。

それから思ひついたことを申して行きますが、この頃多磨の歌に非常に字餘りが多くなつて來

た。それは福士幸次郎君が多磨の字餘りに就いて何ヶ月かに亙つて隨分書いて下すつた。私は感謝いたしてゐますが、その後の多磨の新人の作を讀みますと實に字餘りが多い。でその字餘りのことに就いて考へて行きたいと思ふのであります。我々が何故三十一文字以外に或は一字、或は二字の字餘りをしなければならなかつたかといふことに就いて、十分にそれらの歌に就いて見て戴きたいと思ひます。私は決して何か變つた新しい調子を作らうと云つて破格の字餘りを試みたのではない。時により破らなければならなくて破つた。本當に文學的な言葉の組合せの上に必然的な組織的な要求があつて、一音或は二音の字餘りをしたのであります。ただ物ずきから、或は漫然と好い加減に放り出した譯ではない積りで居ります。けれども字餘り論をやり出すと一日ぐらゐ要ると思ひますが、唯我々が字餘りをする時には腦細胞の中で言葉の一言々々の中の最も細かな色とか匂とか手觸りとかを考へて、さうして聲調の中の本當の聲調、さういふものに、誰も氣のつかない、嗜みのある、深みのある整律をしなければならぬと思つて居ります。聲に出せば消えてしまふやうな匂も色もあります。その思議以外の餘情を思はなければなりません。短歌の朗詠などをしますと、それこそ聲に出して歌ふ。でありますから、さうした幽趣微韻は發聲と共に喪はれてしまふ。極めて細かな組織的な音の組合せなどはうち消されてしまふ。それは大ざつぱで、粗漏なところがあります。技巧の上の一音二音のたるみや緊りは聲の調子でどうにも誤魔化しが利きます。本當の聲の良い、咽喉の良い人は自分自身に、その聲や調子にほれぼれとして

しまつて、本質的の缺點をも細かに吟味することから離れてしまふ。その自分の歌の缺點が自分にもわからなくなるらしい。亡くなつた、私の友達の若山牧水君は聲が良くて調子が良いものだから、本人は自分の歌の缺點を聲で引緊めたり緩めたりした。併し腦髓でぢかに當つてみると此處が少し伸びたな、此處が少し引付け過ぎたなといふことは分るのであります。だから我々が短歌としての言葉を調べる時には、ただ入り易い大ざつぱな音調を大ざつぱに味ふより以上にもつと聲に出しては消えてしまふ程の、もつと細かに音樂されたものをととのへることが必要であります。それ程の苦勞をして居り、その苦勞からやつと得た一音々々でありますから、それは極めて必然的であります。だから普通の音聲に上つた言葉などよりも、私共の腦髓の中で本當に調べ上げられた音といふものは、もつと仄かで微かであります。一音だつて假初めにすべきものでない。多麿の字餘りといふものは本格的の音樂的のものであります。我々は新古今あたりを讀みますと……萩原朔太郎君邊りでも實にあの調子は良い、今の歌はなつて居ないと云ふことを云ひます。……如何にもなだらかで舌ざはりがよい。しかしながら、さうしたもののみが眞に音樂的であるかと云へば、これには疑問がある。私などはああいふところのみを狙つてはゐない。短歌としての聲律といふことは、ただ調子だけなだらかにすることだけでないと思ひます。

此處に水彩畫がある、それの表面に水を浸して、さうして實に滑かな艶を出し、すべすべさしたり色を洗つたりする。さういふやうなことは本當に存外たやすいことではないかと思つて居り

ますが、一筆々々のタッチといふものを細かに考へてみますと、ただ滑かな飴チョコの包紙みたいでは不可ないと思はれます。無論、一首の姿として、如何に大局的に統一されて居るかといふことを見なければならぬとは思ひますが、命の無いただの美麗調ではありません。で多麿の字餘りは本當に純粹な音樂的の立場に立つて行きたいと思つて居りますが、存外それに就いてわかつてくれないのであります。無闇に打壞しの字餘りをやつて居る諸君がある。字餘りにも色々あつて、必然的に感動を如實に現はすための爲なくてはならぬ字餘りもあり、蕪雜な氣を負つた、不完全のものもある。此處はかう云ふ風に字餘りにしなくても、もう一度丹念に調べて行けば三十一音でぴしつと行くものがあるのではないかと思ふのがいくらもあります。さうした時には是非さうしなければならぬ。舌頭に千轉しなければならぬものであります。さうして何度も何度も推敲しなければならぬと思ひます。私共は何の爲に苦しんで來たか。この窮屈な三十一音を本當に活かして、さうして、この神の如き深いこの姿の中で本當の圖り知られざるものを知り、これを外に餘情として句はしたいと思つてやつて居るのであります。それで飽迄もこの定型に準據しなければならぬ以上は、歌の道に立つ人は字餘りのやうな場合、果して之が正しいものであるかどうかといふことを反省して、さうして一應出來るだけ三十一音で濟まされるやうな正しい苦勞をするやうにして戴きたいと思つて居ります。

それから一首の姿……この一首の姿といふものが今の多麿には亂れかけて居ります。之に就い

ては私は何度もこの多磨で諸君に警告したいと思つて居りましたけれども、うつかり雜誌で警告すると「それ見たことか、多磨の歌風は白秋も既に云つて居るぢやないか、斯ういふ缺點がある、ああ云ふ缺點がある。」と云つて方々から騷がれるから、うつかりしたことは云へないのであります。併し今諸君の面前に於いて私だけのことを云ひますから、よく聽いて戴きたいと思ひます。それでよく見るとよちよちして居て、一寸突くとがらがらと崩れるやうな歌がありますが、あれでは不可ません。一首には一首の姿といふものがあり、人間だつて身嗜みの好い人はちやんとした姿をして居ります。山高を被つた時にはネクタイはどういふものを締めるか。モーニングの場合はどうか。ノーネクタイの時はどうか。ノーネクタイをして山高を被つたら人は氣狂だと思ひます。シルク・ハットを被つてピエロの服を着て御覽なさい、見つともない。それから又家ぬち、倉ぬちと云ふかと思ふと、實に新しい近代的の言葉が入つて來る。矢張り同時代の歌は正しく整理して行かなければならぬと思ひます。それから一首の前後、左右、上下八方には相當に空白を置かねばならぬと思ひます。連作でも、此處にある杉のやうに、隙と隙がごちやごちやとなつて重なり合つて居るものがあるが、矢張り前後左右には間隔がなければならぬと思ひます。空白如何に依つて本當の姿が正しく現はされるのであります。それで斯う云ふ空間表象といふことを何時も心掛けて行くべきであると思ひます。それからこの頃素直な姿の歌が非常に少い。何故もう少し素直に云へないか、單純に云へないか……矢張り歌は初めから終まで通るやうに詠つて戴き

たい。實際通らない歌が多い、一首の大局の上から通つた歌が存外ない。是は考へて戴きたいと思ひます。それから空白といふことに就いて、省略陰約といふことも考へなければなりません。多磨の人は一體才氣煥發だけれども、餘り試作の自由を與へられて居るから、餘りに饒舌に過ぎやしないかと考へられるのであります。一つの題材に對して百首も作るといふことは、餘程大きな題材でなければならぬ。連作なるものは構成の上から云つても大事業であるから、それだけの大事業にはそれだけの實力・經驗・構成法といふことの修業をして居ない以上は無理だと思ひます。自分の力以上のものに取掛ることは可なりの無理だと思ひます。大力作を一擧にして發表しようとする氣勢は元氣でよろしいが、大力作よりも完全なものに一首々々丹念して行くといふことが最も大事だと思ひます。

一寸痛いところをやります。A君が京都の龍安寺の石庭の歌を百首も作つた。優れた歌が多かつたので特別に第一線の方に私は推薦して置きましたが、あの相阿彌の造庭がどういふ精神に根ざしを持つたかといふことを考へて戴きたい。あれは僅かな石の配置で、象徴されてあります。木も草もない、ただ砂地の上に僅かな石を竝べて、そこで本當に大きな自然の生命といふものを象徴して居る。それなのをA君はその庭を見て百首も作つた。A君の本當の根本の心構へがこれは間違つて居はしないか。相阿彌の本當の精神を知るならば、石が八つあつたならば歌も八つ、

或はそれより少くして戴きたかつた。でないと地下の相阿彌に苦笑される。省くだけ省くことは詩の美德の一つであります。

で、連作をする場合にも大切なのは澤山作るといふことではなくて、もつと考へて戴きたいことが多分にあります。多磨では非常に連作が多いので、特に反省してみねばなりません。

次に新萬葉あたりに移つて行きますが、『新萬葉集』の中には連作が多い。その爲に一首々々の獨立性が可なり缺如して居ります。一つの歌をなして居ないのが隨分とある。先月の短歌研究に五十首競詠の歌がある。その時に或る選者の選んだ歌を私は不可ないと思ひました。二三首は佳いものがあつたとしても五十首として見ると實に獨立性のないものが多かつたのであります。結局するに歌は一首のものであり、一首の中に本當の歌としての正しい姿を示さなければならぬものでありますから、連作の場合にも一首々々として本當に獨立したものを作らなければならぬと思つて居ります。それから詩を作らない歌人達の連作の歌を見ますと、この人達は歌の連作をやらないで詩人が詩を作るやうな積りで連作をやつて居ります。例へば此處に七首の短歌の連作がある場合に、第一首目から第二首目、第二首目から第三首目に移つて行く間隔といふものを、本當に同じ尺度を以て當てて居ります。さうして初めは頭、それから咽喉・胸・腹・股・膝・踝・足の先といふ風に身體ならば局部々々、歌ならば一首々々八つか九つかを集めて一つの歌の姿を表は

さうとして居ります。併しそれは詩の行き方でありまして、歌の連作の行き方はもう少し違はなければならぬと思ひます。さういふ風な構成の爲に一首々々の歌といふものが、詩の一節々々のやうな姿をして居ります。これは不可ないのであります。これは矢張り一首は一首で獨立しながら、六つか七つの歌が相聯關し、さうして連作としての構成の上から、初めて輝かしい連作の體系を爲すのぢやないかと思ひます。私共は各首の間隔を同じやうに強ひて整へようとは思つて居りません。同じやうに開く場合もあるけれども、さういふものを一首々々思つて居たのでは本當に短歌としての一首の生彩を缺くやうな場合が多いのでありまして、詩の一節に過ぎない場合が少くないのであります。それでなくして、例へば此處で刀を持つて眞劍勝負をするやうな場合には、ぽんと打込んで行つて、その打込んだ氣合で返す場合がある。その間の間隙、この一刀々々の間隙は廣くなつたり狹くなつたりする。時間的に行つてもさうです。同じやうな度合でやるのではない。さう云ふ風に連作の歌も、初めの一首とその次の一首と切つても切れない聯關がなければならぬ。氣合がなければならぬ。一首々々と移つて行く氣合が大事でありまして、この移つて行く氣合が連作の上に乘つて行かなければならぬと思ひます。だから、かう云ふ連作は中の一首を取ると氣合が拔ける場合がありますので、本當の連作といふものは一首々々獨立し乍ら、矢張り聯關して行かなければならぬと思ひます。さうなつて來ると本當に眞劍勝負の刀の作用であります。たつた二太刀三太刀の時には氣合は實に充實されて居りますけれども、それを六十、七

十、八十といふ風に打合つたのでは、目先がくらくらして氣合も乘らなくなつてしまひます。それですから大連作といふものはうつかり出來ない。一つの題材でせいぜい二首か三首、五首十首以上の連作は、餘程の人でなければ無闇にやるべきことではないと思つて居ります。無闇に竝べると、一首々々が非常に稀薄になる。又小さな題材、これつぱかりの題材、例へば杉の木ならば杉の木を一つの面から連續的に眺めて行くのは餘程考へたければならぬ。大連作には餘程大きな題材を持つて來なければならず、それも大きな構成の上から按排されなければなりません。それから一つの素材を歌にする場合に、同じ角度から何首も何首も作るといふことは不可ないので、角度もいろいろと變へて見なければならぬ。四方八方から見て作らなければならぬと思つて居ります。時間的にも距離的にもさうであります。でないと一首々々が非常に稀薄になると思ひます。省くべきは省くのが大事ぢやないかと思ひます。一首の內容からも、連作としての數からも一首の獨立性を確保すると共に、その位置を重大ならしめるのであります。空白を多くするのです。

そこでまた多作か寡作かといふ問題も起るのであります。多作は不可ない、寡作すべきものだ、さう無闇に作るものぢやないと云ふ。併し乍ら寡作したからと云つて本當に一首々々が光るべきものだとも云へない。存外多作して居る中には本當に光つた、天來の響と云ふものがその中に籠つて居るやうな歌が出來ることがある。だから多作が惡い、寡作がいいと云ふことは云へません。けれども矢張り必然的なものがそこにあつて、或る場合には多作になり、又或る場合に僅かな作

で完成することがありますから一概には云へませんが、初心者の中には……初心者でなくてもさうですが、矢張り歌の數を多く作らなければ技巧は上達しません。殊に机の上で一首々々をひねくつて居たのでは上達しません。技巧を上達せしめる爲には澤山數をこなさなければならぬ。澤山作つて澤山省くといふことも大事です。餘り頭の中で苦勞して組織ばかり考へて逡巡するよりも、縱橫無盡に作つても構はないと思ひます。けれどもその中で省くべきものはどんどん省き、捨つべきことは大いに捨てなければなりません。多作すると共に大いに省略すると云ふ勉强をしなければならぬと思つて居ります。

それから繪の問題ですが、或る名畫を見てそれを歌にする風潮が多磨には隨分流行つて來ました。私は信州別所溫泉の北向觀音の繪馬を見て、馬の歌を何十首か作つたことがあります。正岡子規にも地獄極樂の繪の寫生があります。多磨に於きましても一番初めにやつたのがA君の襖繪の「柳鷺」、それからあの歌が良かつたものだから同じく金比羅さんへ詰め掛けた人にK君がある。あの時には「富士の牧狩」の歌を五十首ばかり作つて來た、毎日行つて片つ端から繪の武者達を歌に作つて來た。結局あれは中々宜しいけれども、それが良かつたから今までのA君やK君のは成功した方ですが、多磨の多くの人々が繪をばかり見て歌を作ると困つてしまふ。それは餘程の閑人のすることです。切端詰つた生活をして居る人には出來ない。餘裕のある人だけです。

或る人にはそれがいいのですが、全部がさうする譯には許せない。矢張り自分自身のものを我からと創造しなければならない。自分の生活感情に根ざしたもの、自分に最も痛切なもの、歌ひあげずにはゐられないものを歌ふのが第一であります。自分の歌が出來ない場合にも繪などを見て感興を作ることは出來ます。その場合に非常に危いのは、或る畫家が既に一つの畫面として構成して居るのですから、それをそのまま見て行けば色或は線で作つたものを言葉として歌として模寫するのだから容易い。これは餘程考へなければなりません。一つの歌が創作されたにしろ、それは創造といふよりも模寫に近いものになります。唯その繪を見て我々が自然に對して感動したと同じやうな感動を受けたならば、その繪を見た感動そのものを矢張り表はさなければならぬので、繪そのものをその儘に歌にしては不可ないのであります。このことが非常に難しいのですからよく考へて戴きたいと思ひます。この頃M君は東海道五十三次をお江戸日本橋から作つて居りますが、M君の歌はあれは模寫して居るのであります。唯繪の上のイミテエションでは不可ない。それから一時は映畫を歌にすることが非常に流行つた。何とかの物語とか、キリストが厩の中で生れてそれからどうしたとかいふやうなキリストの物語、さういふものに就いて百首も二百首も作つた人があるけれども、それは敍事詩となつて、うつかりすると短歌にならなくなりますから餘程用心しなければならぬと思ひます。

それから敍事詩の問題を一寸話して置きます。短歌で、あの三十一音の短歌で大きな敍事詩を作れるかといふことが考へられます。既にこれは試みて居る人がありますが、實はその短い詩形の短歌で一大敍事詩をなさうといふのには、矢張り連作を以てするより外に道がありません。大正の三年頃に私は「人を喰ふ神様」といふ敍事詩の連作の歌を發表したことがあります。それは四十何首か五十首近い機構で、鬼子母神のことを書いたのでありますが、その後その中で完全な作として殘していいと思つたものは一つもなかつたのであります。さうしてうつかりすると一首一行の連作になつて寧ろ短歌の連作として見るよりは詩の一篇に近いものとなつた。あれをああいふことにしないで新しい詩の形式でやつたならばもつと本當の所に行つたのだと思つて、是は間違つたと思ひ、『雲母集』の中には入れてなかつた。その後多磨では敍事詩を作つた人にH君とM君があつた。兩方とも優れて居たから第一線に推薦したのでありますけれども、此處で又一歩下つて考へてみると、あの「素盞嗚尊」は私は寧ろ詩であつた方がよかつたのぢやないかと思ひます。私は日本の言葉だけで漢語をちつとも入れないで素盞嗚尊の詩を作つたことがあるが、それをH君は歌で表はして居ります。素盞嗚尊には「八雲立」の御歌がありますけれども、あれは果して御歌か後人の作であるかどうかはわかりません。併し若し素盞嗚尊が柿本人麿のやうに歌人として有名であり、名歌を澤山殘した方であるとするならば、H君がどんなに素盞嗚尊の境涯を狙つて思入れした所で、是は擬作といふことになつて、創造的な新しい精彩といふものが消さ

れてしまふのであります。それと同じやうにM君も日本武尊の歌を作つたが中々良いのがあつた。併し私はM君に「うつかりすると危いぞ。」と云つた。日本武尊の歌が三十一音の定型の歌をどれだけお作りになつたか知りませんが、色々の片歌が遺されてあります。そこで日本武尊と同じやうな形式で尊の歌を作つても、それが自分の作として果して後に殘していいものかどうかといふ事を考へなければなりません。さうしてあの歌の中を見ますと日本武尊よりもM君自身の感情を託したものが入つて居ります。M君自身の思想なり感覺なりが入つて居ります。それならば何も日本武尊としないでM君自身を歌つた作として同じ歌を發表した方が、M君自身として正しいのでないかと思ひます。これが短歌でなくて劇詩或は散文詩の形式を以て、或は今まで無かつた詩の形式で以てやれば、柿本人麿とか山邊赤人を書いたものにしても、擬作的短歌でやるよりもすつかり違つたものが出て來ます。けれども矢張り同じ歌の形式で歌つたものは、例へば人麿、赤人をかういふ外部から見たのでなく人麿自身の歌境として作つたならば、畢竟するに無益なものになります。さうすると矢張りかうした敍事詩は短歌には相應しいものぢやないと思ひます。一にも抒情、二にも抒情で、歌と云へば抒情であつて、感情を重んじ、感じを重んずる、本質的に短歌は短い歌であるべきです。でなくとも形式から云つて、短歌は連作を以てしても敍事詩をやるには適しない。だから定型短歌に立脚し本當の短歌の精神、本當の姿態に立返つて貰はなければなりません。新しい形式の歌などは感情が衰へて、感じが閊へてしまつた時に寧ろ派生するの

でないか。之をよく考へて戴きたいと思ひます。是は餘程用心しなければならぬと思ひます。皆さんには多磨綱領を讀み直して、多磨の精神と歌風とはどういふものであるかを見て戴きたい。餘情とか幽玄とか、それから言葉以外の中に匂とか色とかを感ずるのが本當でありまして、現在の日本の詩壇にも歌壇にも本當に正しい言葉の匂、色といふものを本當に味はせるものが殆んどありません。これだけは斷言して憚りません。實際日本の詩壇も歌壇も愈ゝ散文的に索莫となりつつあります。その中に立つて我々は本當の歌の道を歩かなければならぬと思ひます。

孟夏警策

昭和十三年六月十九日、日比谷松本樓に於ける多磨創刊三周年
記念大會席上にて爲したる講演速記錄。

私はかなり疲れて居りますので、案外簡單になるかも知れません。又話しやうに依つては勢ひ時間も長くなるかも知れません。兎に角何か皆さんにお話ししたいと思つたことからこれを述べさして戴きます。

*

多磨の眞實と熱情をもちまして、この第一環狀線を劃成致しましたことは、皆さんと共に同慶に堪へない次第であります。三年前に誰が今日のこの盛大さを豫想でもした人があつたでございませうか。少くとも私自身におきましても、皆さんが是程に眞摯に精進され、是程に潑剌たる進展を示されたといふことに就きまして、全く思ひ掛けなかつた次第でございます。

六月の記念號の多磨に私が書きました通り、多磨を創刊しなければならなかつたことは、全く已むに已まれなかつた故であります。決して私自身の存在を大ならしめようとしてやつたものでは

はないのであります。白秋この名に於て、白秋直系の旗幟を目に於て私の歌風を繼承したかの如くにして、さうしてその精神を承けてゐなかつたことに、この私の精神が犯されがちのことを痛感したが故であります。これは何としても私には忍べなかつた。是正しなければならなかつた。二つには又無二純情であつて、何時の間にか私の周圍に集まつて來て、私は立たなければならなかつたのでございます。然しその當時は未だ斯ういふ風な大きな雜誌を拵へようとか、また短歌會を形成しようといふことは少しも考へて居なかつたのであります。初めは極めて高踏的な雜誌を拵へたい、それは中村君その他の諸君とも相談しましてアルスの弟の處へも行つて、自分はどうしても雜誌を出さなければならん。薄くてもよろしいから本當に自分のものであり自分の周圍のものである精神的な短歌の雜誌を出したいものだといふ風に話したのであります。それでは宜しいと云ふことになつた、まあ考へて見ませうといふことになつたのであります。その時私が思ひましたのは、餘りに多勢集めたのでは却つて純粹を缺くものになるから、成るべく三十人でも四十人でもいいから、その中で、眞劍にお互が見せあつてこの歌風を新に昂揚せしめようと思つたのであります。それで初め募集致しました時には、その集まつた作品を十分に銓衡して一部二部と作り、三部級になつた人は當分誌友になつて戴き、さうして誌友から時日を見て二部に進級して貰はうと思つたのであります。さうして中心たるべき者は一部二部であつた。これは數が少くてもよろしいといふ考であつた。しかし一旦發表して見まするとと、募集に應じた人は多く、餘

りにも多かつた。それに選拔された者のみが會員となり、その他が誌友といふことになると何か會員外の緣遠い待遇を受けなければならない。かういふ事についてかなり落膽した人もあつたやうでございます。これではいけないから、やはり全部を會員として、さうして對社會的にも、一つの大きな團體として行かうではないか、といふことになつたのであります。それで世間では烏合の衆を狩り集めて、大きな旗指物を立てて何か野心でも持つて歌壇に一派を樹てようとするのぢやないかといふ風に考へられたのであります。又猜疑心で色々な風に解釋せられたこともあつたやうに思ひます。それは雜誌が出ない前にもう石を投げた人もある。さうしてあれは白秋の雜誌だ、白秋は移り氣であるから、結局長續きはしまいと云つた向きもあります。しかしそれはこの三年後に於て、果してさうであつたかといふことについて、大いに見直されなければならないのぢやないか、今既に見直しつつある人があるのぢやないかといふことを、私は非常に愉快に思ひます。

*

私は創刊の當時に、「無執着の辯」といふことを書きかけて、餘り長くなつたものだから、そのまま止めました。けれども、あの時に書かうとした趣意は、自分は決して無執着ではない。自分は移り氣であるとは決して思つて居ない、自分のこれまで經て來たことについて決して投げやりでもなかつたし、また詩人肌、藝術家肌の爲に、自分の仕事を氣の移るままに捨てたり起した

りしたのではないといふことを書きたかつたのでありますが、餘り云つても仕方がないと思つてその儘にしたのであります。今の心持も當時の考へも同じなのであります。

私は明治末年に「朱欒（ザムボア）」といふ雜誌を編輯しまして以來、世間の知るごとく、かなり雜誌を廢したり起したりして居ります。しかしながら私は是を、自分の恥だとはちつとも思つて居りません。何故ならば私は或は編輯は拙なかつたかも知れませんが、私の氣品といふものは、私の魂の氣品といふものは衆俗に墮しようとは思はない。さうしてその雜誌が賣れなかつたといふことも私の恥ではないと思ひます。それはまだ時代が早かつたからでもあり、私の思つたこと行つたことが高きに過ぎたからでもありませう。

それから私自身で私の社を結びましたのは、大正二年に「巡禮詩社」を起した、その時が初めてであります。本來私は詩歌の結社をつくつて、さうして宗匠らしく振舞ふことは嫌ひであつた。自分は何處までも一個の詩人であつて、ただ自分は詩の道に自分を捧げようとし、この自身を束縛するやうな羽目に陷りたくなかつたのであります。自分はただ文學者として、詩人としての道をひたむきに進みたかつたのであります。しかし乍らどうしても社を結ばなければならなかつた事情が起きた。それは矢張り私の周圍に、私に親しんでくれ、又私の藝術に共感を持つ人々が自らして集まつたからであります。その人々を私は棄てる譯にはいかなかつた事情があるのであります。それで一旦社を結んだのを大正六年に至つて私は解散してしまつたのであります。尤も巡

禮詩社が紫烟草舍になり、「地上巡禮」といふ雜誌が「ＡＲＳ」になり、又「ＡＲＳ」から「烟草の花」に移つていつた徑路はここで二三云つて置きますが、これは初めから一貫してゐるのだと思ふ。巡禮詩社の「地上巡禮」といふ歌誌から阿蘭陀書房刊行の「ＡＲＳ」に合併いたしました事は、巡禮詩社の名をもつてその作品を「ＡＲＳ」といふ雜誌に載せたのであつて、巡禮詩社なるものは捨て去つたのではなかつたのであります。「地上巡禮」がこのやうな經緯により一緒になり、新しい阿蘭陀書房が私と弟の手に依つて創立されたのであります。その時「地上巡禮」よりも、もつと大きな「ＡＲＳ」といふ雜誌を出したについて、その雜誌の中に發表機關たるものだけを移したのであります。それから「ＡＲＳ」が廢刊いたしましたのは、私の不熱心の罪でなかつた。發行書房が他の出版物の方がうまく行かず、それでどうしても人手に渡さなければならなかつたので、餘儀なく「ＡＲＳ」といふ雜誌も廢刊しなければならなくなつたのであります。「地上巡禮」とその眞實に對しては私は疑はなかつたのであります。無論巡禮詩社の名目は葛飾まで持つて行つた、機關誌は中絶したがここで改めて再び發行しようとして私は考へたのであります。しかしその時に思ひましたのは、地上巡禮といふ言葉のために我々は非常に禍されてゐた、のであります。名稱がどうしても何處となく抹香臭い、抹香臭ければ、私の書く文章も抹香臭くならざるを得ないのであります。それで葛飾の野に移り、引いて田園の香ひを嗅ぎ、新しい雜草の香ひが身について來たのであります。さうして碧い大空や、江戸川の大きな流れ、或は子供や

犬や鴉やに、親しい詩情を歌ひつつ居る間に、自然に巡禮といふ氣持から離れて來たのであります。私自身のさうした氣持から紫烟草舍と單に名目のみを改稱したのであります。精神を喪つたのでは決してないのであります。私の精神は一貫してゐる。「紫烟草舍」さうして雜誌を「烟草の花」とし、自然的なそして又素朴に、もう一度出直したいといふ氣持に動いて行つたのであります。これはやはり決して私の移り氣ではないと思つて居ります。ただ名を變へただけであつて、つまり蠶が繭を作つて蛹となり蛹から蛾となつて飛出したやうに、形こそ變れ精神といふものは矢張り一つのものであつたに違ひないのであります。

私は餘りに一つの事にこだはり過ぎて、それで自分本來の姿或は精神を見失ふといふことを決していいと思つて居りません。生長すべき時は生長するのが本當であります。だから名前を變へたといつてもこれは、さして惡いことではないと思つて居ります。

これは笑ひ話に過ぎませんが、深川八幡前の宮川といふ鰻屋の二階で私達の歌會を開いたことがありました。その表の立看板に巡禮詩社歌會と出して居りますと、杖をついた七十か八十位の白髮のお婆さんが、巡禮の御講中ださうな、わしもひとつその御講中に加へて下されとやつて來た。（笑聲）それから今度は雜誌を「烟草の花」と變へた。すると驚いたことには、今度は滿洲の煙草會社から煙草の註文が來た。それも笑ひ話の一つになつて居ります。しかし「巡禮」から「煙草會社」に移つて行つたのは、中々面白いと思つて居ります。

その後又「烟草の花」を何故私は廢刊しなければならなくなつたか、同じく紫烟草舍を解散しなければならなくなつたかといふことについては「紫烟草舍解散の辭」といふものを、その當時私を顧問としたその雜誌「曼陀羅」に書いて居りますから、改めてそれをお讀み下されば十分御諒解が行くだらうと思つて居ります。これは全集にも收めてあります。それは私が丁度歌集「雀の卵」の編纂當時でありまして、私は愈々自身を擴大させようと思ひました。さうして自分はまだまだ若い、人の上に立つて師として門下を率ゐる自分ではないのだ、といふ事を痛感したのでありまして本當にこれこそ自責の念に打たれたのであります。さうして思ひきつて葛飾の生活を振り捨て、紫烟草舍を讓つて舊門下達を全部解散致しました。さうして私は上京して本鄕動坂の貧しい家に、貧しい生活を始めたのであります。その時、以前のやうに社を持つてゐれば社費も集まつて來ますから、融通して遣ればどうにか生活出來たのでありますが、それをさつぱりと振り捨てて覺悟をした貧苦の生活に入つたのであります。これは私の移り氣でも何でもないと思ふ。私は決然とこれを行つたのであります。そのずつと後に「詩と音樂」・「近代風景」或は同人雜誌としての「藝術自由教育」・「日光」・「短歌民族」といふ風に、幾つも雜誌を作つて居ります。然しこれを廢刊した理由といふものは、私自身の氣紛れでは決してなかつた。やはり已むに已まれぬ事情が周圍にあつたのであります。第一に最初の「朱欒」を廢刊いたしましたのも、私は飽くまで續けようと思つたのでありますが、その發行元たる東雲堂の方で、自分の思ふやうな風にそ

の雜誌を編輯しようとした。つまり私の手から離さうとした。その時私は斯う云つた。この「朱欒」は君の所の雜誌に違ひないが、これは自分の潔癖と自分の藝術心から拵へた雜誌であるから、決して君等の手には渡さない。若し廢めろといふならば雜誌を廢めてしまふ、といふ事になつて私は廢めさしたのであります。若し續ければあの雜誌は十分續け得たのであります。併しこの雜誌は結社の雜誌でなく純文藝的な雜誌である。私一人で處分すれば良かつたのであります。私の周圍が別に私を中心に結成されてゐたといふのでもなく、又私がやめた爲にその人達は決して迷惑する立場ではなかつたのであります。で今の歌壇の常例となつてゐる結社意織から見ようとすると誤つてゐます。それからその次の先刻申しました色々の雜誌は出版元の已むに已まれぬ理由が主であつて、これらも私の結社でない以上私としてはどうしてもそれをつないでゆかねばならぬ理由は無かつたし、又これを表明する事も出來なかつたのでそのままになつたのであります。

*

なほ茲に云はせて貰ひ度いのは、私は尋常小學の頃、その七つ八つの頃から文學に志を樹てました。さうして五十四歳の今にもその初一念は少しも些かも變へてをりません。一度でも私は餘所見をしたことはありません。私は詩と歌の爲に一身を捧げて居ります。抑々から少しも迷はなかつた。文學で身を立てるといふことは終始一貫、如何な苦しい時でも振り返つたことはありません。白秋といふ雅號にしても、中學時代に作つたままを今日まで通して居る。尤も二十歳の頃、

射水とか薄愁とかしてゐた時代もありましたが、それは一回二回きりであつて、元の白秋で今日まで通して來て居ります。ですから私は徹頭徹尾、白秋である。白秋のこの精神は一貫して變つた所はないと思つてゐる。先程申上げたやうに、蠶から蛹になり、それから蛾になり、といふ風に、いろいろ轉身はして來ましたけれども、本質は一寸も變る所はない積りで居ります。それで今日になつて、成程、白秋は不思議に多磨を三年續けて來たといひますが、これは當り前である。寧ろ私の周圍の最も近い人達が、白秋は藝術家肌の人で事務に馴れないから直に飽き易い、あの人は執着がないから駄目だから、自分達で遣らなければ駄目だと云ひましたけれども、寧ろ私は自分の身に近い人からこそ最も大きく誤られて居ります。さういふ人こそ今日改めて見直して戴き度いと思ひます。歌壇も大いに考へ直してくれねばならぬと思ひます。さてこの多磨であるが、今日以後私は第一環狀線を第二環狀線とし、第二環狀線を第三環狀線とするだけの熱情と執着を十分に持つて居ります。

*

この三年間に於て多磨の人々がどういふ風に精進したか、どういふ風に勇猛な心を以て自分を表現しようと苦勞して來たかといふことは、この雜誌多磨の成績に依つて判然り知ることが出來ると思ふ。雜誌多磨を月々に見て貰へたら、今まで白眼視してゐた歌壇の人々も、成程さうだと云ふ事ははつきりとわかる筈だと思つて居ります。

今日つくづくと考へて見まするに、明治以後いろいろな藝術運動が起つて居ります。私は「明星」時代に、新詩社の運動にもその中頃から參加しまして、その時代のこともよくわかつて居ります。それから「明星」以後の歌壇の動きといふものもよく見て來てをります。このいろいろな團體の動きを通じて見た中に、今日のこの多磨の新しい運動の勢といふものが、この短時日のうちにこれ程大きく是程力强く、凛烈な意志と卓拔したところの感情を詠んだことは、滅多に例がなかつたと私は云へると思ひます。あの「明星」の出現に世間は非常に驚いたのであります。天下は「明星」の下に風靡されて了つたのであります。けれども、あの時の中心に立つてゐた人々で本當に輝いた人々といふものは僅かしかなかつた。與謝野鐵幹先生竝びに鳳晶子女史、後に夫人となられました。その外には高村光太郎とか石川啄木とか吉井勇・平野萬里・茅野蕭々あたりが潑剌と輝いてゐたものであります。私は少し後れて入りました。啄木君が北海道に歸つてゐて、まだ二度目の上京をしなかつた頃に入つたのであります。が、私は外來者としてで、子飼の門下ではもともとなかつた。木下杢太郎・長田秀雄兩君も私と同樣でした。「明星」の初めに窪田空穗氏・相馬御風氏なども入つて居られますが、私共が「明星」に活動致しました頃には、詩を作つた人は僅に三人か四人でありました。それから短歌の方でもやはり三人か四人の人で、この僅の人達が中心になつて、さうして活躍してゐたのです。この多磨のやうに、三十人五十人六十人

といふ風に、競つて精進した團體は私は知りません。それから「明星」以外の運動に於きましても、例へば多磨以外の或派、名は申しません、いろいろの派があります。その派の大きな運動も吾々は十年二十年と見て居りますが、その中にこれ程力强い若々しい人々が一時に輩出して來たといふことは少い。僅に四人か五人の人が出て來ただけである。後はずつと低く、距離があつた。「明星」の時もさうであります。しかしこの多磨は四人や五人の人ばかりではない。粒が揃つてゐて、同じ時に同じやうに生れて來て居ります。第一部でもさうである、第二部第三部もさうである。三部の第一詠草に到つては實に元氣で、この中から本當の多磨といふものが生れ出て來るのではないか。これは既に三部から二部に上つた人達の活動を御覽になると、よくお分りになるだらうと思ひます。

しかしながら此處で一言苦言を呈しますが、諸君の勇猛精進は實際私は素晴しいと思ふ。しかし私の現在から見ますと、餘りに諸君はまだ怠けてゐます。私は關ヶ原に於ける大谷刑部が兩眼を白布で覆ひ駕籠の戸を叩いて采配を振つたやうに、この眼の見えない大將の私が陣頭に立つて命を捨てて戰ふといふのに、諸君はまだ息切れがしたり休んだりします。これはもつと考へて戴きたいと思ひます。

＊

それから多磨の傳統と正統といふことについて私の話を進めて見ます。いつもいふ通りに、多

磨は決して萬葉のみに偏執してゐないし、又新古今の理念にも囚はれては居りません。多磨は多磨の歌風にして傳統の本流に乘つてひたむきに動いて行かうとするものであります。私共は傳統を重んじてはゐるが、決して傳統に囚はれようとは思つてゐないのであります。ただ記紀・萬葉以來の日本詩歌の正統に從つて、この正統の流れを後に傳へて、さうして自分もその中に立つて、連鎖の中の一つの環たる役目を果したいと思つて居るのであります。私は私自身として立ちましたけれど、私自身の藝術を私しようとは思つて居りません。本當に日本詩歌の正統を傳へたいと思つて居るだけであります。それで私は今多磨を主宰して居りますが、私がこの社を結んだことは、自分の名を大ならしめようと思つて、自分の後繼者を大勢作つて後世に遺して置かうといふのでは決してなかつた。さういふ考は僭越不屆であると思ふのであります。私は多磨といふ家は作つたが、この家を自分の多磨として遺したくない。家門がある爲に家門の爲に囚はれ、そのために進歩性が阻まれ又失はれることのどれだけ多いかわからない。多磨といふことは多磨の會の名目に過ぎない。私のものであつて、私のものではない。だから私はこの多磨を以て諸君への遺產として遺さうとは思つて居りません。多磨が創刊された當時、或る私の親近の一人がよく來て、いつも、あなたに萬一のことがあつたら多磨をどうなさいます。今のうちしつかり基礎を築いて置かないといけませんと、私の顏さへ見ればさう云つた。何だか死ぬのを待つてゐるやうな嫌な氣がしましたけれど、それよりもですね、自分が死んだら多磨はどうなつてもいいのです。多磨

の名目などはどうなつてもいい、私は徳川三百年の偉業を後々までも傳へて、子孫の爲を慮つた家康の流に倣ひたくはない。太閤流でよろしい。一世でよろしい。ただ私の血脈が自らにして諸君の血脈に永く殘ることを望むのです。これは私の精神は蒼古からの日本文學、日本詩歌正統の精神である。その記紀以來の精神を諸君に中繼すればいいのである。私の藝術は私一人で責任を負ひます。だから諸君の藝術は諸君で責任を負ふべきものではないか。私北原白秋の藝術は北原白秋のものであつて、名のために遺したくもないし、又これを自分の藝術に利用するといふやうな人があれば、私は悲しく思ふ。

*

此處でもう一つ、多磨が外の結社と違つてゐる所を申しておきます。多磨は家代々、後々までもその名目を重んじて、これを續けて行かねばならぬといふことは決してないのであります。だから萬一私に異常のことが起つた場合、諸君は獨立すれば宜しい。又銘々團結して守り立てて行かうと思へば、守り立てて行つても宜しい。又多磨といふ名目がいやならば名目を變へてもよし、銘々十方に分れて十方の放射線をとつて擴充して欲しい。ただ私の血脈だけは傳へて欲しい。是は精神である。これは白秋であつて白秋でない、日本文學の精神であります。日本短歌といふものを傳へて戴けば十分であります。是だけは固く守つて戴き度いと思ひます。

多磨が創刊されました當時に、歌壇の方々から、多磨はまるで白秋一人である。白秋の個性だけが光つてゐて、あとは白秋の模倣ぢやないかといふことを申した人がありますが、これは本當に多磨を親切に見て居ないからであります。私は決して自分の藝術と同じやうな藝術を諸君に強ひようとは思つてゐないのであります。ただこの精神だけは傳へて欲しいと思ふ。無論私は指導者として指導精神は持つて居る。持つてゐないのが私は嘘だと思ひます。指導しないといふ主宰者がありましたら初めからさういふ結社は作らなければよろしい。然しこの結社の人々の一人でも二人でも各本質が個性が多々違つてゐる場合、これ等をここに發見して正しく育て上げてゆく、そしてその個性を磨かせる。之こそ指導者の役目ではないかと思つて居ります。やはりそこまでに指導精神は純一でなくてはならない。或る標準に達する迄には一つの指導精神、道といふものを嚴然と立てなければならないと思ひます。指導精神なぞはどうでもいいといふのは、主宰者が不見識であるか、或は賴るべき中心の精神を失つた團體であるか、或は仲間同士の寄合にしか過ぎないと思つて居ります。多磨はやはり一つの流風であります。ですからその精神に於きましても、又技法に就きましても、私がこれまで永い間の體驗したものから作り上げたのであつて、さうしてこれから後も私は研究して行かうと思ひます。しかし乍ら初めから私は諸君に臨む自分の態度を間違つたとは少しも思つて居りません。だから諸君もこの會員になつた以上は一家の風を成すまでは、この嚴格なる中にあつて切磋琢磨されるのが本當だと思ふのであります。ただ此處

に云つて置きたい事は、決して亞流になつてはいけないといふことであります。これを私はよく言つておきます。先頃『新萬葉集』を審査致しました時につくづく思つたことは、あの明星時代にもその派や他流の間に華々しく見えた人々が相當にあつた。然し乍らああいふ人達も眞物でない以上は、僅か三十年四十年後に見ると、その人の光は師の影にかくれて消えてしまつて、さういふ人の歌は餘り殘らないのであります。さうして勇猛者の間に革新の意氣に燃え自ら爲す底の燦々たる光が生ずるのであります。かういふのが却つて私の視野に入つて來る。だから末技的な亞流の作といふものは決して殘るものではないといふことを諸君は考へて欲しい。常に自分で切り拓いて行かなければならない。さうして白秋の亞流には決してなるなといつておきます。ですが或る時期まではここが問題です。一の風體を自身に樹て得るまでは、寧ろ白秋私の肉體の一部のやうに考へてこの血脈に同化して欲しいのであります。技法の上についてもそれまではこの流風の中に從ひ十分に體得するまで之に倣つたが宜しい。然しここにも又問題があります。

私とてもまだ未熟です。この道を拓いて行くのに私は血みどろになつて居る。僅か一句或は二句の新しい技巧でも、私自身の體驗から私の血と汗から搾り出して來てゐる。又毎日々々私はその爲に苦しんでゐる。歌を見るとわかるが、諸君は私がやつて來たすぐその通りの道を通つて仕舞ふ。是は實に優しいことである。師匠が歩んだ道を直ぐその後からのこのこついてゆくのは何

でもない。自分で丁々と切り拓くことだ。この精神だけをもつて、技巧でも本當に苦しみ、筋道だけを憶えた後は自分自身で寧ろ敢て競つて八方に手分けして荆棘を伐り、その道を自分の道としなければならない。眞似るといふことは易しいことである。本當の正しい筋道から動いて、あとは自分一身で本當に切り拓いて行かなければならない。諸君の中で私よりも技巧ではずつとうまい人がありますよ。然し乍らその中に私の眞似をしてゐる。何らの苦惱なくして取るのであるから、うまいが力がない。だからどんなに拙くても自分自身で工夫して新しく發見して行かなければならない。多磨も是から本當に光る人は、自分自身の體驗から滲み出て來るやうなものでなければ光つて行かないだらうと思つて居ります。どんなに巧妙な歌を作ることよりも、矢張り大事なのはその人の精神・態度です。これを本當に考へて戴きたい。亞流は光らない。私は諸君を私の亞流としたくない。私は成るべく廣範圍に亙つて、諸君の新しさ、諸君の違つた稟質を發見したいと思つて居ります。又自分自身よりも光つたものを發見する事が、一番私は愉快なのです。私自身にそつくりのものが現はれて來たら是は嫌だらうと思ひます。矢張り自分の光は自分のもので光らなければならないと思ひます。だから白秋に餘り似てはなりません。私自身でも恥かしいと思つて居る所を引伸寫眞みたいにして露はに見せてくれる歌もありますが、これは白秋を苦しめるものである。私は自分に似て非なる歌にまでも責任を負はされる事が往々ある、之こそ瀆でなくて何か。私は迷惑だ。又その人にとつても決していいことではないと思ひます。けれども

三部の人々は、まだ自分で新しい趣意を樹てようとか新しい取材を縱横無盡にやらうといふ氣持を止して、先づ歌の形を知ることが大事だと思ふ。多磨ならば多磨の流風を、呑み込む時に呑み込まなければならない。それが大切であります。第一部・第二部の人達はもうそろそろ自分自身の本質を、自分自身の光として表はさなければならない時期に達して居ります。

第一環狀線・第二環狀線・第三環狀線へとすすまなければなりません。創刊後三周年にして第一環狀線に立つてゐるとき、更に三年後に於て第二環狀線に立つ時には見直した人々になつて欲しいのであります。

●

私は昔「地上巡禮」以來の「烟草の花」を出してゐました時代に、餘り自分の周圍が腑甲斐ないので、君等はどうしてそんなに腑甲斐ないか、何故私に謀叛して行かないか、私の屁を踏み越える積りで私を踏み越えて行かないのかと大いに鞭うつたことがあります。どうぞ、諸君の槍を以て私を突いて來い——しかしながら本當に周圍の人達が私の言葉を聽くならば沁々と考へて欲しかつたのでありますけれども、その人達は謀叛しました。謀叛したが然しこれは人間として謀叛したのであつて、藝術に於ては少しも謀叛ではなかつた。藝術をもつてした思ひ切つた謀叛でなく白秋の名と歌風と、讓られた紫烟草舍と雜誌朱欒の旗幟とをもつて謀叛した。かうした悲しいことがあるだらうかと思ひます。私は彼等自身の名と新風をもつて私に向つて來ることを望ん

だ。然るに獨立獨行の氣概あるでもなく、唯白秋の旗指物が自分達のものにしたかつたからだけであります。

惟ふに人間としては飽迄も一門は一門の深い血脈の上に立つてさうして手を結ばねばならぬ。然し藝術の道に於ては師匠も弟子もない、寧ろ師匠を手ひどくやつつけて呉れるやうな人が出ることを、世の中の親父といふものは喜んでいいと思ふ。さういふ人が出て來たら私はどんなに嬉しいか、私はいつでも謙讓な自分を潔しとするでありませう。矢張り子供は親よりも偉くならなければなりません。その爲にすべての親は犧牲となつて行くのであります。この犧牲といふ事はその意味に於て本當に美しいのです。之をよく味つて貰ひ度いのであります。それだけでいいと私は思ふ。もつと誠實に、もつと眞面目に私もみんなも、もつと偉くならなければならないと私は思ふ。さうして諸君は私を踏み越え踏み越えて進まなければならぬ。然し諸君がどんなに勉强しようとも私はもつと勉强して進んでゆくつもりであるから、諸君は餘程臍を固めてくれねば諸君自身の方で距離を大きくするかも知れませんよ。一齊進擊だ。まごまごしてゐる人に私は目もくれないよ。

それから多磨の歌壇に對する態度について何時も思つて居ることを申上げます。歌壇といふのは無論多磨も此處に入ります。然し乍らさういふ小さなことに我々がこだはつていいかといふ問

題です。私は記紀・萬葉以來の精神をもつて日本の詩歌、その正統な價値を價値とあらしめ、さうして未來の人達にまでこれを押しのばして行くことが一番大事であつて、小さな黨派爭ひ等は少しも關心すべきことではないと思ふのであります。今、多くの黨派があります。その中には黨派といふものを持つてゐる故に、本當のことを言へないで苦しむ人が何人あるか分りません。多磨の作品の良さを識らうとしない人は何人あるかわかりません。然しさういふ人達は一旦黨派を離れる時に、眞當に人と人と觸れた時に、初めて親友にもなれますしその藝術を本當に愛敬する事が出來るやうであります。いい作品に對しては、感心したら感心したと云ふがよいと思ひます。私は何時も明朗で謙讓にしてをります。私は感心した時には何時も感心したとはつきり云ひます。しかし世間では中々さういふことを云はないのです。心の中では感心し、或は畏れを抱きながら知らん顏をしてゐる。どういふ態度を持つて行つたならば、自分が偉くなれるかといふことを考へてゐさうな人もをられるやうに思はれます。さういふ人は本當の詩人でも藝術家でもないと思ふ。本當の詩、本當の短歌を高い境地に於て樂しみ得るものであつたならば、決して黨派とか何とかいふものにこだはるものではない。いい作品には頭を下げるが本當であります。皆さんは多磨の會員であるが、他の黨派の歌に對しては大きい心を以て、和やかな親しい空氣の中に、その人々を、他流をひき包んでしまふだけの大きな度量を持つて欲しいのであります。それでこそ私は多磨の行爲が鞏鞏として全歌壇を包んでしまふのだと思ひます。多磨は決して對象といふもの

を作らうともしなければ、求めても居りません。ただ新しい幽玄體といつてもそれは歌壇が寫生とか現實主義とか散文的傾向に偏り過ぎたことに對して樹てた名目であつて、その新幽玄といふ名目のために我々は囚はれようと思つて居りません。又象徵の歌風を個の最高の位置に置くといふことについて自分の眞實を傾け盡さうとしたことも決して一時の權道ではなく、やはり正しいことだと思つて居ります。多磨はやはり茫漠として實體的であります。この實體的である多磨が茫漠たる世界を創りつつある、さうしてその中に記紀・萬葉以來のすべての流れが流れ込んで來るのであります。その中に黨派も何もなくなるのです。私はさう思つてゐる。多磨は早晩さういふ大きいものになることを私は信じてゐます。今は餘りに小さな感情を以て現在の歌壇が動いてゐるのぢやないかと思ひますが、多磨は決してさういふ流儀にかかづらつて行くつもりは持つて居りません。（進行係立ちもうこれ位でと言ふとき、もう少しもう少しと續ける。）

それから話が長くなりますけれども、多磨は三十一音の定形に立つて居ります。短歌は三十一音の定形の上に立つて居ります。これは當然過ぎる程當然であります。短歌を行ふ以上これは當然のことで、これを不自由不自由と云ひますけれども、この不自由さがある爲に、私どもに無上の樂しみがあるのぢやないかと思ひます。又非常な樂しみと非常な苦しみがあるのぢやないかと思ひます。これは簡單な例でございますが、私が眼を惡くいたしましてから、何よりも自分の生

活を樂しまうとする心持になつて、さうして部屋の模様替へを行つたのです。模様替へを行ひましたその時に色々の調度がある。例へばピアノがあり、書棚があり、デスクがあり、ソファがあり、それからラヂオのセットがあり、壺があり、半ば壞れかけた籐の肘掛椅子があるといふ工合に、いろいろの方法を工夫してそれらをどうにか納まりをつけて行く、自分の書齋なら書齋だけを氣持よくする爲に色々の事をする。それが私は非常に樂しみでありました。これが初めから新しい室内に新しい調度を買つてぴつたりとをさめるならば何でもない、寧ろそれは樂しみがないだらうと思ひます。古い調度はその一つ一つに永い間の生活の匂ひを持つて居り、感情を持つて居ります。その古い調度をもつて又違つた生活をしてゆく處に樂しみがある。違つた部屋のものを持つて來て、彼方此方に始末をつけてさうして配置をする。この不自由な生活の中に、色々にものを持つて來て配置してゆく場合の樂しさといふものは非常に愉快なのであります。……だから我々が短歌をやつてゐるのは丁度さういふ風なものではないかと思ふ。で世の中に一つも粗末なものはないのであります。それを如何にして定形の中に活かすかといふことが、一番大事なことではないかと思ふのであります。

＊

それから話が一轉して、今度は多磨と『新萬葉集』について一寸申上げて置きます。私は『新萬葉集』の選者の一人である。しかしながらこれは十人の中の一人であつて、全部を私一人で審

査した譯でありません。であるから『新萬葉集』に載つた歌については十分の一だけの責任を負ひますけれども、その全體について責任を負ひません。多磨の人々も相當にあの『新萬葉集』の中に入つて居ります。その中には歌數の多い人もあり、少い人もあり、かなり番狂はせもあつたやうであります。兎に角『新萬葉集』なるものは現代歌壇の縮圖だと思ふから、その中に澤山入ればやはり嬉しい。自分の會員の中の人が澤山あれば嬉しい、その人に對してはよかつたなと思ふが、これは運がよかつたなといふ事であつて、歌そのものが良い、秀歌である、さういふ言葉ではない。實際又數の少かつた人にとつては、大きい聲では云へぬけれども、他の撰者の中のある向きのは、私の目とは違つて居るのぢやないかと思ふことがあります。さういふ場合、諸君は何を標準として考へたらいいかといふと、多磨の人は私の眼識を信じて欲しい。私は多磨に於て毎月標準を定めて居る。これが一番の賴りであるから、運がよかつた時は喜んでいいが數が少い時にがつかりすることはちつともない。ただ私を信じてさへ貰へばいい。『新萬葉集』と多磨は立場が違ふから、そこをよく考へて、澤山入つたといつてすぐいい氣になつて貰ひ度くないと思ふ。これはちやんと云つて置く。然し三部の人で澤山數が入つた人がありますが、それに對して私は、歌が多く入つたのが偉いとは思つて居ない。之は當り前である。多く入つたのが當り前であり、少く入つたのが間違ひだ。私はさういふ風に思つてゐる。それでいいね。

＊

これで一通りは喋つたやうですが、どうぞこれからも多磨の諸君は、今までよりも更に勇氣を振ひ起して息切れもせず休みもせず、又力作した時だけ發表しようといふ氣持を起さないで、毎月同じ能率で營々と努力してもらひたいと思ふのであります。諸君は休まれてゐても、編輯者たる私は本當に一頁でも休む譯にゆかないのであります。どんなに苦しくても少し位病氣で寢てゐても又眼の見えぬ時でも、何首かの歌は必ず作らなければならぬ。編輯部から作品の頁を二頁だけ取つて置くといふと、二頁分の歌を明日の朝なら明日の朝まで、無理をしても作らねばなりません。さうして無理に無理をしてゐるとどうにかなるものであります。皆さん、どんな忙しい時でもその忙しい時をより活かすといふ事にして、どういふ苦難に逢つてもその苦難を自分の輝きとして、寧ろその苦難に感謝して、自分の道を切り拓いて行かなければならないと思ひます。私はこの事だけは自分の身を以て諸君に示し度いと思つて居ります。（拍手）

附記

病中なので中村君初め皆が私を氣遣つて呉れるのでまだ一時間位は話せば話せさうな私の氣力ではあつたが、それではと茲で私の講演は一旦打切りましたが、まだ言ひたかつたことが心殘りになるので一言だけ附加して置きます。之も口述であるから同じやうな氣合で聽いて戴き度い。

それは正道と奇道といふことであります。多磨はひたむきに正道を以て進んでゆく。奇道は妄りに用ゐるべきものではありません。それは餘程餘力ある大天才でないと奇は只の奇矯に墮ち入るだけのものになる。正は飽くまで正であるからこの方が犯すべからざる力を持つてゐる。張り切つて向へるものであります。いかなる對象に向つても正面から全力を盡して押し進むが本當であります。純粹で全的でもあります。根本精神の力强さを對象が手强ければ手强いだけより確め、より强めてゆくことであります。眞實の自分の作を爲す時に當つて對社會的・對歌壇的・對人的に奇策を廻らし鬼面にしてこれらを脅かさうとする類は決して正道ではありません。一時に世を驚目させることはあつても永久性のあるものではない。之を自ら深く恐れてつつしむ可き向きが他ではありさうに思ひますが、多磨は堂々と又悠々と最も自己の純粹性に忠實にあらねばならぬと思ひます。きはめて功利的に高飛車の逆手を用ゐたところで又心ある者から見ればその功利的態度が見え透くのみである。之は一寸も感心出來ない。

それから私を御覽なさい。私は是迄一首の歌を作るに當つても二三行の短文を書くに當つても又は一句一行を推敲するに當つてもいつも全力を上げて向つてゐます。之だけは私に云へる。例へば今から見て拙かつたなと思つたことでもその當時の實力の總てをもつて之に向つて來ました。この力でこの意氣込みで諸君も全力を上げて總ての歌材に正面切つて貰ひ度い。

私は今、兩眼ともよくは見えない。讀書も執筆も不可能の狀態にある。主治醫は之が腎臟から來たものであれば壽命三年だと云ふが、その腎臟の病氣はあるにはあるにしても些か私のはそれとは違つてゐさうに思ふ。私のこの眼疾はあまりにこの眼を虐使したのが原因であることを私はよく知つてゐる。然し人間は不死身ではない。何時私がどうなることか分らない。私がかうしてゐる間に諸君は今のうちだから思ふさま私を鑕の臺にしてぶつかつて貰ひ度い。思ふさま全力を上げてぶつかつて來ねばならぬと思ひます。同じ現在にかうして生きてかうして歌の道に精進する機緣を、お互に尊重しなければなりません。私の氣がかりをあまり大きくしないやうに元氣な諸君は今の中に本當に私にぶつかつて來ることです。懈怠はゆるしません。

新秋歌話

多磨には多磨の流風といふものがあります。多磨でなければならないものであります。多磨の氣品といひ、香氣といひ、多磨の精神の包含するところのものが、他にたち勝つた輝きが必ずある。我々はここに儼然たるこの信念を守持してゐる。この信念は、微動だもすべきではありませぬ。

多磨の精神とするところは、宣言や綱領も朗讀しましたし、先程もお話ししたとほりですが、今度はこの歌風について、少々具體的に解義してみませう。私のいふ新幽玄或は象徴とは何か、寫生以上のものとは何かといふことに就いて、片鱗だけ四五の例をあげて云つてみます。

この圓覺寺の禪房に於ての三日間の精進は、多磨一同の並々ならぬ結緣をいよいよ深めた。閑かなよい山です。この夏山に聞く茅蜩の聲は全く雨のふるやうです。この朝夕、私共はその聲の中にひたつてゐる。あの茅蜩です。

きのふの朝も今朝も、目が覺めると、朝ひぐらしの聲、あの茅蜩の聲がしてゐた。あの聲で私は、思ひ出したのですが、砧の成城の翼家では、いつも、あの茅蜩の聲を聽いて、目が覺めたも

のでした。砧の茅蜩といふのは、實にもの凄いものがあつて、木俣君が私のところに泊つて、非常に驚いてゐた。まるで、茅蜩が今の多磨の會員の數ほどありまして、それが砧村の御料林に住んで居つて、朝早くからその林でひとしきり合唱致しましてから、今度は戸別訪問に出掛けるのであります。一々別れて、白秋の家とか、その隣りのシェークスピアガーデンの英學者市河三喜さんのお宅や、そのお向ひの杉森此馬さんの杉の木で鳴くとか、方々をまはつて、夕方になると又御料林に歸つて、改めて其處でまた、合唱のやり直しをやります。その茅蜩が、寢んでをりますと、蚊帳の釣手に止まる。時々は蚊帳をまくつて、いつの間にか風と一緒に枕に止つて、夜中にカナカナと鳴く。その聲の凄まじさといふものは、實際遠くで聞いてをりますと、琴線を彈くやうな聲がしてゐるけれども、枕もとで鳴かれると、實に何とも強靱な響きの高い、何といふか、張り切つた人麿の歌のやうな聲調を出します。それですつかり人麿カナカナに驚いて目を覺してしまつた。

そのカナカナの聲を聞いて居りますと、實際雨のやうに降つて來ます。

雨とふる朝ひぐらしの聲きけば常あるに似たり繁き椙山（すぎやま）

この歌は、さして秀れた歌ではありませぬが、この事實を前にして、私はつくづくと思ふのであります。これは「やがて死ぬけしきも見えず蟬の聲」であつて、蟬といふものは朝生れて、僅

かの時を鳴いて夕には死ぬものである。實際、無情といふものを感じさせるのであります。最も命のはかない鳴聲の持主でありますが、雨と降るやうに鳴いてゐるのを聽きますと、如何にもこの世は永劫に變らない、いつまでも熱に滿ちた世界であるやうな氣が致すのであります。「世の中は常にもがもな」といふ願望は、昔の人もよく歌に現はしましたけれども、私の歌は「常あるに似たり」であります。諸相といふものは無常である。しかしながらこの無常は光明である。私はいつもその光明の方面を感じてをります。このはかない蟬の聲につきましても、私はその光明方面をいつも聽いてをります。「常あるに似たり」であります。無常と感ずるのは虚でありまして、常ありと感ずるのは實であります。この虚と實との間の匂ひから、我々の歌心といふものが生れて來るのではないかと思ひます。

それで實のみに終始しては本當の太虚といふものは分らず、虚だけに住んでゐては實が分らない。だから虚と實といふことについて、十分に思を致すべきではないかと思ふのであります。多磨の歌風は決して實にのみ執（ふ）するものではないのであります。本來の虚といふものに對して、我我が思議すべからざる、如何なる言葉にも現はし難い、もつと高い、尊い、新しい匂ひ、その匂ひを匂ひとすべきではないか、その響きを響きとすべきではないかといふことにあるのであります。

それで多磨の歌風は決して寫生の形式をのみ標榜しようとは思つてゐないのであります。寫生

派の弊といふものを私共は十分に知つてゐる。しかしながら寫生派以前の明星派のロマンティシズム運動、あの運動が今日殘つて、無緣の新人に依つて復活されつつあるやうな氣が致しますけれどもあれはやはり間違つて居ります。私は明星派のロマンティシズム運動に參加致しましてその良い所も惡い所も相當に知つてをります。私自身相當に空想兒であつたし、明星の歌風とするところも才氣縱橫で、寧ろ放恣なほど情感を昂揚さした。脚が地を離れてゐた。この弊とするところは十分に今の私は知つてゐる。そこで、もつと現實方面を見直して新にその上に樹つべき新風であらねばならぬ。この現實を濾過したところから新ローマンも生れ出づべきでせう。

そこで寫生の修業も、自然觀賞に對する修業も、十年か二十年、私は一心にやつて來て居ります。しかし、どちらかといふと私としては苦手であり、自分の得手ではない。自分は本來が浪曼精神の持主であつて、この自分本來の面目を出來るだけ抑へて、寧ろ自分を窘めつけて、自分の得手を全然封じて、寫生の一道に精進致したのであります。

それで寫生といふことについても大いに意見を持つて居ります。前に申した通り、ロマンティシズム運動の本來の良さといふものと、それから一旦は現實を本當に十分に見なければならぬといふその二つのものをもちまして、新なる發足點に立つたのでありますから、ここを十分に考へて欲しいと思ふのであります。今の多磨の歌風といふものは、寫生派の人が見れば、本當の所は能く理解することは出來ないだらうと思ひます。その例を一つお話し申上げて見ますと、最近に

ある註釋書を出版した人があります。その或る派の新人の書いた短歌の註釋書を讀んで見ますと偶々白秋の歌について、色々と解說してあつた。その解說が中々面白い。如何にも寫生派の人の言ひさうなことだと思ふのであります。

かういふ歌があるのです。

網の目に閻浮檀金の佛ゐて光りかがやく秋の夕ぐれ

この歌は『雲母集』の中にあります。「二町谷の小景」といふ題になつてゐると思ひます。これをどういふ風に見たかといふに、閻浮檀金の佛といふものは、恐らく死んだ魚だらうといふのです。死んだ魚に夕日の光りがさしてゐることを言つたのであらう。靜かな境地であるけれども、一體死んだ魚を閻浮檀金の佛などといふのは、やはり白秋式のものの觀方で、妙な癖であると書いてある。これは寫生一點張りの觀方である。恐らく多磨の人は斯ういふ考はしないだらうと思ひます。『雲母集』時代は、無常光明の光明方面を强調した時代であります。この歌も光明遍照を歌つたのであります。秋の夕の光明遍照を歌つたのであります。閻浮檀金の佛といふのは、何も死んだ魚に限りませぬ。漁師町の二町谷の海で、漁船があつて、網を揭げてゐるその網の目に、何か一つ强く光り輝いてゐるものがある。それがその風景全體の中心になるやうな光りを放つてゐる。しかし晩景であるから、その光りが强いながらも、秋の哀れをおびて輝いてゐるのであり

ます。それだけを見ればよろしいので、何も死んだ魚だと見なくてもよろしい。それは死んだ魚か生きてゐる魚か分らないが、我々は遠くから見てゐるから分らないが、しかしこれが中心になる強い輝きといふものが、死んだ魚からは中々發しさうにない。やはり魚はピチピチしてゐなければならない。その人に學問がないので、佛だから死んだものと解したのだらうと思ひます。それはさうぢやありませぬ。淺草の觀音様、あの淺草寺の緣起なんかを見ましても、漁師の網から一寸八分ですか六分ですか金無垢の觀音像が出たといふ傳說がある、さうした傳說を秋の日の靜かな輝きの中に、殊に赤味を差した輝きの中に私は觀照したのである。さうして海と空と一帶を包んだ秋の夕の輝きを洵に法悅の境として、殆んど禮拜する心になつてそれを眺め入つたのである。だから、これは普通の寫生ではないのであります。だから唯眼前のものを見た儘に現はす、ただ寫生するといふ人の頭では、かういふ歌は正しく解釋されないと思ふのであります。

かういふことは單なる一例でございますけれども、これが總ての我々の歌に懸つて來るのであります。私共の考へてゐるのは、ただ現實の事情を報告する爲でもなければ、說明するものでもない。ただ言葉の上のみでなく、總てのリズムの上から、匂ひの上から、品位の上から、言葉以上のもの、言葉には現はすことの出來ないもの、めでたいもの、えならぬもの、さういふものを本當に以心傳心に味ふべきものでなければならない。そこを我々は考へてよろしいと思ふのであります。

例へば『雀の卵』の中に螢の歌があります。

晝ながら幽かに光る螢ひとつ孟宗の藪を出でて消えたり

これは皆さん御存知だらうと思ひます。晝の螢を歌つたものであります。晝の螢、無邊際の日の光の中の、小さな、はかない命の輝きを歌つたものであります。その瞬間に捉へたつもりであります。これは理窟として考へて欲しくない。ただ直觀的に、孟宗藪の薄明の中に光つた螢がその藪を出しなに、晝の明るい輝きの中に、その光りが消えた。これを直觀的に嗅いで欲しいと思ふのであります。だからこれは普通の寫生でなくて、これは象徵味を帶びた歌の一つであります。この中には螢を哀れとも寂しいとも何とも言つて居りませぬ。ただ孟宗の藪を出て消えたと云つて居るだけであります。これを感得するには、唯かすかな、ほのかな匂ひをその儘心に傳へて味はつて欲しいのであります。

『溪流唱』の冒頭の歌に、

行く水の目にとどまらぬ青水沫(あをみなわ)鶺鴒の尾は觸れにたりけり

この歌は多磨の爲には最も記念すべき一首であります。丁度多磨結成の心が私に動き出した時に、丁度かういふ淸景に接しまして、直觀的に私の胸に響いて來たものであります。

牡丹花に車ひびかふ春まひる風塵の中にわれも思はむ

この歌は、多磨の創刊號の卷頭に載つて居る。多磨としても記念すべきものでありますけれども、前の『溪流唱』の一首は、多磨今日の發祥をなしたものとして、やはり私自身は大事に致して居ります。「行く水の目にとどまらぬ青水沫」といふのは、やはり無常の相であります。流れるものの常なき哀れさであります。その無常の相にホンの一瞬飛んで來て鶺鴒の尾が觸れたのであります。この無常の中に一つの大事なものと觸れ合ひます。生きた、實にピリピリしたものが、この中に大事な結緣をなして居るのではないかと思ふのであります。だから、これはやはり寫生であるけれども、普通の寫生ではありませぬ。この鶺鴒はやはり取りも直さず我々の姿であり、又我々の魂であります。だからかういふ所にやはり象徵詩のゆき方といふものを追うて欲しいものだと思ふのであります。

昨夜映畫で、上野公園の櫻や、靖國神社の鳥居の上の樹が、原色の儘に映されて、最もリズミカルに輝いてゐたのを皆さんは御存知だらうと思ひます。私の目が悪くなりかけましてから、私はあの映畫を見た記憶を歌にしたことがあります。

映畫には櫻浮び出搖れゐしが影日向ありて眞畫なりにし

この通りであります。映畫には櫻が浮び出て搖れてゐたが、影日向あつて眞畫の光景であつたといふのであります。これには「靖國神社を偲びて」といふ前書きが附いて居ります。この前書きがなければ、この歌ははつきりと理解は出來ないかも知れませぬし、又この持つ深味といふものも等閑にされて、唯普通の櫻を映畫に出したやうなものになつたかも分りませぬ。皆さんは昨夜あの靖國神社の櫻を御覽になりましたけれども、あれをどういふ風に見られたかといふことであります。私は目が悪くなつて、視力が薄くなつた時に、あの輝きを思ひ出したのであります。私は他の寫眞でも見たのでありますが、鳥居の上に櫻の花が滿ち開いて、如何にも春晝のうららかな日和でありました。それが今度は鳥居を離れて、櫻の花だけが一枝二枝大寫しに寫されて、花が立體的な影と日向をつけて、風の強い日でしたが搖れてゐたのであります。その時に「影日向ありて眞晝なりにし」と感じたのであります。これは櫻の花を見たといふよりも、「靖國神社を偲びて」といふ前書きがあることを考へて欲しいのであります。櫻の花は日本の國の花である。朝日に匂ふ山櫻である。靖國神社の鳥居の空の櫻を見ました時に、私はその影と日向を實に強く目に感じた。それは薄明の時に、その輝きを、又その影を、吹く風のそよめきと同じ心のゆらめきを以て思出したのであります。一將功成つて萬骨枯るといふこともあります。靖國神社に祀られました英靈の日向になつたものよりも、その影の哀れさ、影の心の細かさ、床しさといふものが、光明方面と一緒に私には感ぜられたのであります。だから唯英靈を偲ぶといふ以上のものが

茲にあるのであります。普通の銑後作品とは違ひます。だからこの心によく思ひをひそめて、嗅いで欲しいものだと思ふのであります。

それから私の歌の中で、皆さんが餘り氣づかない、問題にならなかつたものの中から、又何かありさうで、むづかしいと思ふやうな歌を一二評釋して見ます。

降る雪に灯向けしめその雪のほたほたと出でて飛ぶに膽冷ゆ

これは砧の居間で、私の視力が衰へてからの作であります。或る雪の降つてゐる時に、私は雪を見ようと、百燭以上の灯りでしたらうか、それを庭の方に向けさせて、眺めたのであります。さうすると牡丹雪がほたほたと——これにはやはりほたほた以上の言葉はない。ほたほたと降つて、まるで生きもののやうに、白く輝いてゐる。厚みを持つた雪が飛んで來て、實際心から膽ッ玉が冷え上るやうな氣が致したのであります。これは私の視力の完全な時は何でもないことでも、視力が衰へてしまつてからのことですから、さう思つて味つて下さい。本當に暗い闇の中から一つ一つが命を持つて、一つ一つが輝きを持ち、厚みを持ち、濕りを持ち、その白さを飽迄極度に白くして、ほたほたと飛び出して來たのであります。これを普通に寫生して唯報告的にすると、ただその事實だけのものになる。それではなりません。可見以上の見、事實以上の律動相に思を致すべきです。「ほたほたと出でて飛ぶに膽冷ゆ」といへば、その雪が如何にも眼前に一つ一つ

飛び出して來て、此方の膽が實際震へ上がる。その内外の狀態をさながらに現はすのが詩であり歌であつて、決して雪が飛んで來たから、自分が驚いたといふ説明だけではないのであります。かういふ場合に「ほたほた」といふ形容は相當に練つて考へなければなりませぬ。「すうと出て」でもいけない。その厚みが現はれませぬ。さうして靜かな所から不意に出て、一つ一つ出て來る形が現はれませぬ。やはり「ほたほた」でなくてはならないと思つて居ります。

それから藤浪の歌を何首か作りました中に、色々問題になつたのでありますけれども、誰にも問題にならなかつた歌が一つあります。

觸りよきは空にしだるる藤浪の下重りつつとどめたる房

觸りよきは、卽ち手觸りよいのは、空間にしだれた藤波の、段々重くなつてる、長い藤浪といふものは、その房全體の重み、力といふものを房の先きに止めてゐる。手を觸れて御覽なさい。房を下から押上げるやうにすると、その房の尖に藤浪の持つた千鈞の重みといふものが懸つてゐるのであります。これは目の良い人はそれ程に感じないかも知れませぬけれども、私はその頃やはりよく見えなかつたのであります。藤浪も手に觸つて見たのであります。藤浪の房が十分に伸びるだけは伸び切つて、重みが加はるだけは加はつて、そこにその命の持つた厚さといふもの、力といふもの、色の集積といふものが、先程申しました千鈞の重みといふものを止めてゐるので

あります。決してだらだらと下つてゐない。ピタッと止めてゐる。一番尖端の重みを歌つたのであります。その重みを藤だと思つてはいけませぬ。一房の藤の花だと思つてはいけませぬ。その千鈞の重さが、何が故にその藤浪の尖端に集まつてゐるかといふと、これはその藤の木を通し、土を通し、その下の鉢を通し、鉢に接觸してゐる疊を通し、床を通し、土を通し、それが宇宙のみちみちしたものに繋つてゐるのであります。そこを我々は感得しなければならない。これは寫生であるけれども、單なる寫生とは思つてをりませぬ。その重みは本當に手で觸れなければ分らない。手で觸れるといふことは、感覺の移動があつて、自分の目が見えなくなると、指先がものを見るやうになる。決して指が觸つて見ただけではない。既にその感覺が目から指の先に移つて行く。この前いつか唐招提寺の千手觀音像を拜んだ時に、あの手の指先の一つ一つに目玉が描いてあつた。つまりあれなんです。指先でものが見えるのであります。この會で影山邦俊君がいつも私の顏を當つてくれますが、私がやつたよりもザラザラしてゐる。手をあててみると今日はもうザラザラしてゐる。「今日も一つやりませう。」と言ふから、「君は下手だよ、どうも專門家に對して下手だよと言ふことは惡いけれども、君が剃つてくれるよりも、僕の方がうまい。」と、影山君弱つてゐたけれども、「それぢやあなたは剃刀とあなたの指が同じ感覺になつてをりますね、同じものになつてをりますね。」と云つてゐた。私は慣れて居るものだから、鏡を見たら駄目です。鏡を見ると反對に寫つて來て、距離も分らない、あべこべになつて來る。とても

剃れませぬ。鏡を見ないで、ピタッとつけて剃る。何回やつても怪我をしない。私がやると實にすべすべする。影山君は、他のものだから、無闇に磨り上げてしまふ。（笑聲）私は自分の體なものだから、指先ですッとやつても、剃刀と指先が一つになつてゐる。剃刀の先は私の指先だから、分る筈である。それと同じやうに、「空にとどめた房」も、房だけぢやない。宇宙の總ての重みといふものが、そこに集中して來るのです。それをピタッと止めることは、餘程藤の花はえらいものなんです。ピタリと止めた、そこに千鈞の重みがある。

それから鹿寄せの歌に、かういふのがあつた。

夏山は聽の遼きかときをりを角高き鹿の伸びあがりつつ

これは第一回の多磨全日本大會の第三日目に、一行が奈良公會堂に於きまして、鹿寄せをして貰つた折、その鹿の群を眺めた時に、かういふ鹿を私は見たのであります。唯これが寫生であるか、それ以上のものであるかといふことは、よく味はつて戴きたい。夏山は聽いてゐて實に深いものであるが、下を向いて何か食つてゐた鹿が、ときをり角を高く上げて、耳を傾けて居るのであります。それだけ云つて置いて、夏山の濃い綠と、夏山にともつた風と光りと、その季節の匂ひを、私は言葉以外のものとして現はしたつもりでございます。だからこれは唯表面的な描寫ではないと思つて居ります。多磨は種々なものを持つて居りますけれども、その中の一つの新しい

幽玄といふ歌の例として、この歌を擧げることが出來るのであります。

立秋の歌に、

物の葉やあそぶ蜆蝶はすずしくてみなあはれなり風に逸れゆく

砧村の家の曩家に私が坐つて眺めて居りますと、前に小池があつて――小池のことは書いてありませぬけれども、前に小さな池があつて、その池の傍に種々な草花が群れてゐた。薄とか桔梗とか紫苑とかがあります。白髪の薄とか唐草とか、それに立秋の涼しい風と光線がそこに來てゐた。そこの所に蜆蝶、うす碧色の（紫の少し薄いので）小さな蜆蝶が群れつつ飛んでゐるのであります。それが飛びつつ如何にも涼しげに遊んでゐる。それらが一つ一つの草の葉に止りさうになると、ほんのすこしのところで風に流され流されしてしまふ。強い風ではありませぬが、風に乘つてひとりでに逸れて行くのであります。卽かず離れずのあはれさであります。これは唯の寫生ではないつもりであります。一々風物を見ては、我々は觀念づけ、或は理趣を思ふものではありませぬけれども、この眼前の立秋の景物の中に、我々は何を感じたか、普通の唯の寫生以上に何を感じたかといふことです。これは一々說明したくありませぬ。「みなあはれなり風に逸れゆく」といふ所から玩味して戴きたいと思ふのであります。この歌は或る場合に或る歌の雜誌に抽き出されたが問題にならずじまひになつた。他の人々の多くの作と共に歌壇の批評下に立たされ

た。葉書で問合せたのに誰もこの歌に目をつけてくれる人はなかつた。やはりかういふ歌は「風に逸れゆく」で、その人の心を逸れて行つたに相違ない。どこが良いのか悪いのか分らない。どこが涼しいのか分らない。本當の涼しさといふもの、ものの哀れさ以外に、哀れとも涼しさともつかない、中間のものですね。それが分つてくれなかつたらうと思ひます。この歌を本當に分つてくれた人は、釋迢空氏だけであります。その時に日本の歌もここまで來たかと云つてくれた。實際私は有難く頭が下つたのであります。

ほの紅く花はけむりし庭の合歡風そよぐなり現し實の莢

「ほの紅く花はけむりし」といふのは、如何にもほのぼのとして居りませう。しかしあのほのぼのとして合歡の花が終つてから、風に本當の實が搖れてゐるのを見たのであります。砧村の庭の一部に合歡の木があります。庭の地面が傾斜して、下の屋敷の境に降りる小徑の端にある合歡の木であつて、季節になると實にほのぼのとした條の細かな、うす紅色を帶びた花を咲かせます。如何にもけむつたやうに花を咲かせて行く。その花の明るさのみでなく、青い莢がそこに下つて、風に搖れてゐる。既に立秋の來たのを感じさせます。これもやはり理窟はありませぬ。唯立秋といふ或る涼しさを玆に籠めたつもりでありますけれども、その涼しさの中にも、決して虛だけではなく、實といふ方面を通して見てゐるのであります。

それから粉雪といふ歌で、

朝の餉の堆朱の膳にちらひくる粉雪は松の揺りにたるらし

堆朱の膳は此寺の朝夕の我々の御膳をもう少し紅くしたやうな色ですね。あれよりももつと鮮かです。その膳にちりかかる粉雪は、松の枝に積つて居つたのを、松が揺り落したのだらう、松が揺り落した粉雪であるといふのであります。これも私の視力が幾分衰へてからの歌であります。堆朱の膳は、離れの疊で、朝夕樂しんでゐた膳で、螺鈿が施してあります。落花の螺鈿か何か知りませぬが、螺鈿が少し施してあります。それで御飯を戴いてをりますと、或る朝、そこに雪のかすかな雪片が散つて來たのであります。私の茶碗の中の白い御飯の上、それから御膳の縁や、さういふ所にかすかな、匂ひともつかぬ匂ひ、色ともつかぬ色を散らしたのであります。私はこれで宜しいのぢやないかと思ふのです。そこに私の視力の衰へに對して、坐つて居る現在の境遇、私の魂の匂ひ、さういふものが説明しなくても出てゐはしないかと、思ふのであります。それに「松の揺りにたるらし」といふ所に、松そのもの、松といふ生物、植物の葉に積つた雪が、その松の風に揺られ、姿と共に散らした。その幽かな雪であるから、普通の空間を流れて來た粉雪とは違つて居ります。その場合に自分も一つの命の持主であるけれども、自分の命以外のもう一つの命が私に傳へてくれる粉雪であります。だから二つの命であります。二つの命の結縁は、その

雪に依つて結ばれて居るのであります。この間の微妙な關係は、啻にらうがはしい聲を出して、觀念的に讃へたくはございませぬ。唯かすかな雪片の中に全宇宙の命のこもつたものとして、すぐにも消えるはかない雪そのものの匂ひを、私の魂にひたひたと掴み取つたのであります。この場合、やはり普通の黑い膳よりも、堆朱の膳といつた所に、思ひを寄せて欲しいと思ひます。これがあの時に、堆朱の膳でなく、黄色い膳とか、もつと違つた潤み色とか何とかでございましたならば、私はこれほど感じなかつたかも知れませぬ。これは一つの繪心であつて、繪を描く人であつたならば、この間の私の色の考へ方、色の捉へ方といふものは、分つて下さるだらうと思ふのであります。私の目が悪くなつてから、紅でも朱でもさうですが、赤といふ色が實になつかしいのであります。この頃百日紅が私の庭にありますけれども、あの百日紅が咲いてくれたならば、くれたならばと樂しみにして居りますが、咲出しても下から見ると青色にしか見えない。傍に行きますと、よく私に分る。幾分誇張した考かも知れないけれども、本當に私は明るく感ずるのである。ここに面白い話を致しますると、私の友人に倉田白羊といふ畫家がある。この畫家は糖尿病になつて、終ひには私以上に目が悪くなつて、一時は氏の失明を傳へられたが、主治醫がそれを癒した。その感激を籠めて、報謝の爲に倉田氏が油繪を持つて行つたといふ記事が新聞に出て居りました。さうすると私の思ひも及ばない未知の人から、その新聞の切抜を送つて來て、かういふ事實があるから、このお醫者に診てお貰ひになつたら如何ですかと言つて來た。何ぞ圖らん、

倉田白羊は私の「パンの會」時代、「屋上庭園」と「方寸」といふ時代があつたが、「方寸」時代の親友であつて、小笠原へ行つた時には、一箇月遅れて白羊が渡つて來たのであります。さういふ閑柄でありますから、白羊ならばよく知つて居る。この白羊といふ人は、隨分暗い繪を描く。どうしてあんな暗い繪を描くのかと思ふ位暗い繪を描く。小笠原の自然といふものは、綠の濃い色に本當の堆朱です。堆朱の土にバナナの綠の濃い葉が垂れてゐる。それが光つてゐるのに、白羊の描いた油畫を見ますと、土の色が黑い。綠が陰鬱な青さを持つてゐる。どうしてかういふ不思議に陰鬱な繪を描くのだらうかと思つてをりました。處が今度或人から聽いて見ますと、白羊の繪は、目が惡くなつてから急に明るくなつたといふ。どういふ譯だらう、どうも赤色を使ふ。全體の調子がやはり赤くなつてゐる。これはやはり視力が衰へたので、赤といふものはかういふ色だらうと、自分でやはり誇張して塗るのぢやないかと思ふのであります。さうなると赤ならば赤といふものがピチッと激しく來るのではないか。目が明いてゐた時は暗く見た赤が、その視力の衰へた頭腦の中には、赤く輝いたのではないかと思つてをります。それで倉田君が目が惡くなつてから描いた油繪といふものは、ちやうど、普通の人の見た自然の本然の明るさになつて來たやうであります。平生赤といふものはさう感じなかつたけれども、視力が衰へてから、赤といふものを一倍感ずるやうになりました。しかしこの赤は、或は普通の人が見る以上に、もつと強い赤を感じて居るかも分りませぬ。いろいろな匂ひがそれに加はつて來て居るかも分りませぬが、

しかしもつと本質的な、誰も忘れて氣がつかなかつた本當の赤を私は見てゐるかも知れませぬ。だから堆朱の膳も、普通の人がぼんやり考へて居る堆朱ではない。私の見たのは本當の堆朱かも知れませぬ。それと雪を取り合せて、考へて欲しいと思ふのであります。

同じ例で、

短日は盲ふる眼先に朱のさびし童女像ありて暮れてゆきにけり

童女像といふのは歌集『夢殿』の扉にありますから、皆さん御存知と思ひます。あの童女像の朱のさびた色調は、普通の眼で見たのと私の感じたのとは違つてをります。「暮れてゆきにけり」も、普通の人の暮れたといふこととは違つてをります。そこを本當に感じて欲しいと思ひます。

夜の池にうごきて纖き月形はかがやく箆のゑぐれるごとし

これもやはり砧村の小池の夜景であります。その小池の水に深沈として月が映つてゐるのであります。池の面は黑い。それに金の月形が——滿月ぢやない、普通の月形、三日月形の月が映つて居る。それは滿月であつたかも知れないが、私には滿月に映らない。三日月形にしか見えない。それは空にある時には下から仰いでも分らないけれども、池の面に映つた時、その月形がはつきりと目に映じて來る。それは黑い面の上に金色の月形が映つて居るのです。よくよく見ると金色

の月形はまるで箆でゑぐつたやうに、黑い面を金の箆で一ゑぐりゑぐつたやうな形をして搖れてゐるのであります。だから普通の寫生とはやはり違ひます。

今までは象徵的なものについて、觀賞を主として話しましたけれども、私は詩歌といふものは、本來やはり文字の上に微妙を極めなければならないものだと思つて居ります。現在の詩は實に亂雜で、散文を橫書きしたやうになつてをります。それと同じやうに三十一音を使つて居ります現在の短歌はどうかといふと、極めて亂雜であつて、唯報告歌が多い。それに本當のリズムといふことを考へてをりませぬ。聲調といふものを正しく考へてゐない。唯三十一字を竝べたに過ぎない。かういふことは、寫生派のその以前の明星派時代には非常に嫌つたもので、いつの閒にかその詩の精神が忘られて、この頃は或る思想を唯三十一文字に疊み込んで書き竝べた作品を盛んにやる人がありますが、ああいふのは歌ぢやないと思つてをります。歌といふのは決してさういふ歌壇大衆の喜ぶやうなものに、こちらから迎合しなければならぬものぢやないと私は思つてをります。それでやはり語韻とかリズムとかいふものを、その感動さながらに現はさなければならないと思つて居ります。

一、二の例を言つてみると、

ニコライ堂との夜搖りかへり鳴る鐘の大きあり小さきあり小さきあり
大きあり

大きな鐘、小さな鐘、その形をその儘に、一緒にガランガランと鳴つてゐる。その動き方、その感動の動き方をやはり味はつて戴きたいと思ひます。

口をつくハロンアルシャンといふ語韻（ひびき）新秋にして我も癒えなむ

新秋のさわやかな氣持を結びつけて、やはり一つのものとして味はつて欲しいものと思ひます。時閒がありませぬからこの位にしまして、また機會があつたら種々申上げたいと思ひます。

本稿は昭和十五年八月十三日朝、「多磨全日本大會」第三日、鎌倉圓覺寺に於ける講演速記の後半である。（文責速記）

作歌の體驗

作歌の實例

一　紀行と短歌

＊

碓氷嶺の南おもてとなりにけりくだりつつ思ふ春のふかきを

この歌は「碓氷の春」の第一首である。この歌はノートが手許に無いので、どういふ推敲の過程を經たかはさだかでない。割合に一氣に歌ひ下ろしたもののやうである。發表すると古泉千樫から直ぐと非常に褒めて來た記憶がある。その時、千樫は第四句を「見つつ驚く」と書き過つて來た。その後でまた、貴詠の第四句「くだりつつ思ふ」を誤記して失禮したといふ鄭重な詫狀を寄越した。千樫はさうした藝術良心の強い人であつた。「くだりつつ思ふ」は一音の字餘りであるが、初二三句が大きくゆつたりと歌ひ下ろしてあるのだから、どうもさうならなくてはならないやうである。四月の末ではあつたが、信州の沓掛あたりは、落葉松がまだ素黑く、草が枯れて、日の光までがわびしい谿谷の眺めであつた。それが、一旦碓氷の南面へ出ると、關東の大平野には既に暮春の煙霞が立ちこめてゐたものだ。わたくしは熊の平から、舊道の山岨を下りつつあつ

た。躑躅や山吹の眞盛りであつた。だから五句の「春のふかきを」となるのである。

＊

深山路は驚きやすし家鳥の白き鷄に我遇ひにけり（北原白秋集）

同じ山中に觀た白鷄の歌である。わたくしはその當時の紀行をも書いてゐる。之等の前後の景情と、また歌と散文との關係を示す爲に、茲に拔萃してみることにした。

（前略）楓ももう幽かに紅い飛行機型の莢をつけそめてゐた。日ざかりの若葉のかげを、しんかんとした青い光線のちらちらをいつくしみながら私は歩いてゆく。瀨の音がする。熊蜂の翔音がする。黃金蟲が唸りながら金色の毫光を放つて飛んでゆく。四十雀が翔りながら啼いて連れる。高いところで電車の軌みらしいのが長く續いてのぼる。遠い別世界の物音のやうなあの軌みが柔らかに響いて、それも消えると、また私はただ一人で歩いてゐるのだなといふ、それも穩かな明るい寂しい心地で、また我が足音に我と耳傾けてゆくのであつた。

と、私は思はず目を瞠つて佇ち留つた。それはあまりに神采奕々としてゐたものであつた。あまりに不思議な、意外なことに遭遇つたのであつた。

白い鷄であつた。

白い鷄が、人ひとり通らぬその山中の閑寂境にヒョツコリと向うから歩いて來たのであつた。岨は高し、下の幽かな谿底の深潭にはただ聖い水の一面が見えるのみであつた。

白い鷄は平安に、極めて靜かに、溫かな柔かな足どりを見せて、求食り、求食り、私の方へと歩いて來るのであつた。白く白く輝いて來た。紅い鷄冠をうち振りながら、ココココと絕えず聲を出して來た。

私は撲たれて了つた。私の目はたしかに禮拜してゐた。

それからまた默々として下つてゆく私の前に、今度は十二三羽の軍鷄や黑い矮鷄があらはれて來た。それらが、岨路いつぱいに家族を成して群がつてゐた。高い崖のふちへ出ては蓬を啄んだり、山吹の花をつつきちらしてゐた。

コケツコツコウ、トウヅルヅウ。

長い緩るい朗らかな雄鷄のこゑが起つた。

見ると、其處は碓氷のとあるトンネルの切れ目であつた。たつた四五間の切れ目であつた。峰と峰とは迫つてゐた。だが若葉が萌え立つてゐた。紅い深山躑躅が照り合つてゐた。

線路があり、棚があり、棚には靑と赤との信號旗が引つ掛けてあつた。トンネル番の小舍があつたのである。（後略）

さて、この白鷄の歌だけは「日光」の「碓氷の春」一聯には出てゐない。題材は摑めたが、完成までには爾後三四年はかかつたやうに思ふ。

ノートには「思はぬを鷄に遇ひぬ」「思はぬを鷄とし見つ」等の句から次のやうに移つてゐる。

○○○○○の人の氣もなき山岨に我おどろきぬ鷄とし見つ
春たけて（日の照りて）いよよさびしき高岨に我おどろきぬ庭つ鳥見つ
春ながら山の氣ふかき高岨を白き鷄の歩みゐるにけり

ここで一旦匙を投げたものと見えて、また第二第三の景情へ觸手は動いて行つた。

蓬伸び鷄群れたり墜道の斷れ目の岨の光の崩れ（日光）
庭鳥の雲井がくりにつぎ啼くはさびしくしよしとこの高山を（抹殺）
思はぬを鷄つどへる高岨に垂りつつ黄なる山吹の花（抹殺）

その後、前者に未練があつてまた凝りはじめた。

雲かよふ山岸高く啼く鷄の……家かあらしも
うすひねの山岸高く
歩み來て驚きにけり……白き鷄をる
驚きぬ人の氣もなき高岨に
……白き鷄の遊べる見れば、
……ひとりあさりをするが……

等々々。書き記せば限りない故、簡單にこれだけに留めるが、やつとの末で「深山路は驚きやすし」の初二句が成つたところで、爾餘は從つて自然に調べられて來た。それから第二景もどう

にか成つた。

山吹の一重が花の咲きしだる春山岸のにはとりのこゑ

＊

物のこゑひびかふきけばおほかたの若葉は和ぎてほど經ちにけり（北原白秋集）

この歌「日光」ではかうなつてゐる。

かへるでの花さきにけりおほかたの若葉は和ぎてほど經ちぬらむ

次で二句を花さく見ればと改め、後に楓を全然除いて了つた。

谿ふかくたぎつ瀬の音もまじるらし嵐は明し一山落葉（日光）

この連作の一首を棄て、二首を一つとして初めて「物のこゑ」の歌となつた。物のこゑの中には瀬の音も風のさやぎも鳥のこゑもとりあつめてある。結局は初めは元のままのぬらむであつたが、にけりに直つた。音調としてはぬらむがよろしいが2 3はやや落着かぬ。にけりもまだ十分ではない。もう一締めだと思ふ。なほ、「かへるで」の歌の最初は

閑かなる楓あかり（楓若葉や）山水のたぎちの音もうちかすみつつ

であつた。

＊

日はかすめ清にこごしき妙義嶺の檜山のなだり夏たちにけり（北原白秋集）

裏妙義のあの檜山のなだりである。汽車が碓氷の隧道を抜ければ、直ぐと目に入るあの重疊とした檜の群である。

檜葉若葉眺めはあかね妙義嶺のうらべのかすみととのひにけり

上つ毛や眺めはひろき（かすむ）妙義嶺のなだりの檜山夏さりにけり

原作はかうであつた。その後の再三の推敲で、如上の「日はかすめ」の歌となつた。なほ、「日光」では、二句が近くこごしきであつた。近くを高く、青くなどとも試みたらしい。遂に清にとなつた。

二　短歌と童謠・民謠・自由詩

*

黄の蝶の林に住むは幽けかり落葉松も芽ぶきそめにし

前章の例歌と同時の作、「日光」所載歌である。信州の追分から淺間山麓へ這入つた落葉松の林、その早春、（四月ではあるが）霧雨が細かに渡つて、土の濕りがよく匂つた。落葉松の新芽の細かさ、その綠も遠くは金粉のやうにぼうつとしてゐる。黄色い蝶がひたひたと薄明りを飛ぶ。わたくしは妻と共に、その林の奥深く探り入つて、その蝶に、心を感覺を、撲たれた。

黄の蝶の來るに遇へば山原や

黄の蝶のうつつなく飛ぶ山ふかし

黄の蝶のかそけき飛びもうつつなし

黄の蝶の翅ぶりかそけく飛ぶ見れば

黄の蝶の奥所（深處）に飛ぶぞうつつなき

黄の蝶の住みつつ飛ぶぞうつつなき

黄の蝶の住みつつ飛ぶぞ幽けかれ

黄の蝶の林に住むはうつつなし

○黄の蝶の林に住むは幽けかり

初二三句はかうした推移を取つてゐる。四五句は

からまつの芽の日ざし透き見ゆ

からまつ原も（は）芽ぶきそめにし

或は

この朝光をひとり飛べるも

その後にまた元へ戻つて、再び訂正、からまつ原もが落葉松もとなつたのである。

わたくしはまた、同じ題材を童謠に作つてみた。

てふてふ

てふてふ、てふてふ、
からまつ山は
まだ日が寒い。
ちらちら飛べよ。

てふてふ、てふてふ、
三月四月、
霧雲はやい。
濡れ濡れ飛べよ。

てふてふ、てふてふ、
からまつ原は
もう芽が萌える。
木ぶかく飛べよ。

てふてふ、てふてふ、
ちんところぐさも
林に赤い。
大きく飛べよ。

童謡の根本となるべきものは、やはり本格の詩歌の持ち味でなければ、單なる幼がりや、俗惡童謡に墮する。で、短歌と云ひ童謡と云ふ、形式の相違こそあれ、それらが同一人の作ならば、香氣も氣稟もひとしく流通する筈だと思へる。

短歌と童謡との流通について、わたくしは嘗てつくづく思ひ知つたことがある。それは童謡も亦詩を作り歌を成すと同じ心で、同じ態度で作していい筈だと。强ひて兒童の心に還らうとする時、却つてわざとらしい稚態と稚語とを演じ過ぎるであらう。「思ふに、自然觀照の正しさは、まことに思無邪の物我一如の境に於て、初めてまことの表現を得るのである。すでにその境涯にあつて、觀、識り、歌ふ時に、そのままの心の狀態に於て、詩にも歌にも童謡にも流通するところはただ一つであるべきである。」

たんぽぽ（短歌二首）

朝花の黄のたんぽぽはいとけなし波搖り來ればざぶり濡れつつ

舟寄すと子ら取つ組みぬ水ぎはにとてもあざやけき大き。（原、黄の花）たんぽぽ

たんぽぽ（童謡）

沼の田べりのたんぽぽは
たんぽぽは
咲けばざぶりと波が來る。
たんぽぽ、たんぽぽ、波が來る。

沼の田べりのたんぽぽよ、
たんぽぽよ、
咲けば、子どもが舟で來る。
たんぽぽ、たんぽぽ、舟で來る。

結局は形式の問題である。更にわたくしはこの水郷潮來（いたこ）の早春を自由詩に作つた。

朝靄の中（自由詩）

靄のふかい朝、子供が

小舟を動かしてゐる、ああ、二人だ。
ここは潮來の出はづれ、
沼から沼へとかよふ水路だ。
ほう、むぐつちよが鳴いてる。
水面が明つて來る。
子供は聽いてゐる、一人は舳（へさき）で、
一人は搔いてゐる、小さな櫂で。
うすら寒うてもよい濕（しめ）りだ、
どこかに日の光もある。
柳のなびきも青うなつた、
低い田圃も犁かれて來た。

ほうつと、どこかで火を燃してる、
誰だか燒いてゐるのだ、葦の根を。

風が來た、いや、土のかをりが通つた。
おお、もう、春が動いてゐるのだ。

彼等はいつしよにのめりかかつた。
とても大きなたんぽぽが咲いてゐる。

靄のふかい朝、むぐつちよが鳴き、
子供は小舟で取つ組んでゐる。

三種三樣の姿態であるが、通ずるところは矢張り一つではないか。更に他の例を擧げてみよう。

*

沼のべのひと萌えなづなあはれなり仔牛出てをりそのさみどりを

民謠にすれば、娘つ子の唄として、

うすら寒さに
出て田を鋤けば、
なにかまつげが
濡れかかる。

沼の田べりの
下萌なづな、
今朝も仔牛に
食べられた。

更に近世の琴歌調として整へてみよう。

ひとむら萌えしなづなを
朝出て食むや仔の牛、
沼の田べりはわづかに
ふりつぐもののにほへり。

何れも春雨こまかなる沼畔の情景にちがひない。かういふ風に、わたくしの詩や歌謠には、いつもその底には短歌の氣稟が流れてゐずにはゐない。謂ふところの東洋藝術の精神である。わた

くしは定型の短歌で多少の苦勞をして來たことを、今更忝く思ふのである。

おもしろいことには、短歌の感興の流れから引いて童謠が生れる時にはその童謠におのづから短歌の香ひが移り、童謠から短歌に移る時には、短歌に童謠の味が反映する。その他、詩、民謠等がそれぞれに交響する。その中閒色のものがまたほのかに何かの新風を匂はすのである。

＊

月夜よし二つ瓢の青瓢あらへうふらへうと見つつおもしろ

この一首の眼目は四句のあらへうふらへうにあらう。かういふ手拍子風の句を短歌に挿入することは、わたくしとしても千首に一首も無かつたことである。極めて稀な例であるが、或る評者はこれを見て、輕い戯咲のごとく云ふ。さうして才情の病弊のごとく、そのまた慣習者のごとくわたくしを誤認する。吉植庄亮君は反對に激賞してくれたが、このあらへうふらへうを梁塵秘鈔あたりの歌調に似通つてるとした。梁塵秘鈔はかうしたものではない。若し何か交流するものを求めたら室町後期乃至德川前期の小歌や小唄を省みればよいかも知れぬ。閑吟集の「早櫓の音がからりころりと」といふ風なものである。しかしわたくしとしては、これは獨創である。尤もこの歌作の場合でなく、實は「瓢簞」といふ童謠を作つた時にふとして心頭にゆらめいたのが、この句であつた。

へうたん、

へうたん、
花さけ、へうたん。
あらへう、ふらへう。

へうたん、
へうたん、
棚からへうたん。
あらへう、ふらへう。

へうたん、
へうたん、
千なれ、へうたん。
あらへう、ふらへう。

へうたん、
へうたん、

ゆれゆれ、へうたん。
あらへう、ふらへう。

へうたん、
へうたん、
月夜にへうたん。
あらへう、ふらへう。

このあらへう、ふらへうはへうたんへうたんの繰り返しから、おのづからに湧いた童心の手拍子である。この童謡は又、童語の歌調ではあるが、ただに單なる幼ぶりや、ユーモアと見てほしくはない。淡々たる中にもつと深い境涯を祕めてある。老荘思想に似たものが、どこかに、へうたんたんと揺れてゐはしまいかと思ふ。この童謡から、同じ瓢簞の歌に移るこの間の色合をまた味つてほしいのである。短歌は童語調ではないが、かの童謡に蕩揺するところの童心は同じく宿つてゐるであらう。この短歌も亦、而も單なるユーモアと取つてほしくない。四十七歳のこの現在の境涯にあるわたくしの月夜の諷詠である。早計にまた、無思想などいふ人があるなら、それもよからう。わたくしは、ただ、あらへう、ふらへうと手を拍つばかりである。

三　擬音について

春さきのころころ蛙について、あのころころと咽喉ぶくろを膨らまして鳴く蛙への愛著は、いつもわたくしの感覺に、土と綠の草の香を彈かせる。

（前略）

ころころ蛙の咽喉ぶくろ
ころころ鳴くたびふくれてる。

この童謡の蛙である。

かはづの啼くはころころ、
田螺の啼くはころろよ。
ころころ、ころころ、ころころ、
萌え來よ、春の下ん田。（水郷の早春）

これは早春の水郷吟である。琴歌調。

今朝の田に雨よぶ蛙をさなけどころころと啼けば春田めかしも

觀音の甍ながめて歸るころ早や夕明る田螺がころころ（二首、大正一一）

蛙と田螺の擬音が、ここでは反對になつてゐるが、ころころところろの使用も句調上前後の關

係からさうなるので、ころころも時としてころころときこえることがある。ただ短歌に於ける擬音は餘程愼重に用ゐなければならない。形式が短いからである。童謠や小曲に於ては歌謠として、却つて音律上に效果を助け、自由にも使へていいのである。わたくしは長歌にも用ゐたが、今、例證してみる。

ころころ蛙の歌

春さきのころころ蛙、一つ鳴き、二つ鳴き、ころころと後つづけ鳴き、ふと鳴き止み、くぐみ鳴き、また急に湧きかへり鳴く。いよいよに聲合せ鳴く。近き田のころころ蛙、よく聽けば聲變り鳴く。聲變り、一つ一つに、あなをかし、鳴けるさま見ゆ。あちら向きこちら向き、飛び飛びて、また水くぐり、うちひそみ、頰をふくらかし、鳴き鳴ける咽喉のさまみゆ。あなをかし、前田の蛙。さみどりの根芹か濕る、塗畦かまだ新らしき。雨もよひ雨よぶ聲の、寒けども寒しともなし、寂しけどなにか笑へり。友よびてまた鳴く蛙、遠田にも遙かとよもす。あなあはれ、遠田の蛙、また聽けば遠く隔てて、夜の闇の瀨の音隔てて、い

や離りうち霞み鳴く。また寄せて近まさり鳴く。遠つ浪邊に寄するごと、遠つ風吹き寄するごと、その聲は夜空つたひて、いよいよに近くひびきて、さて絶えて、またつづけ鳴く。近き田もまた競ひ湧く。初夜過ぎて、また後夜ふけて、なほなほにとよもす聲の、おそらくは、夜の明くるまで。萌黃月、月の圓暈、遠近の薄き飛び雲、濡れ濡れてちらめく星の、糠星のかげ白むまで。ころころと、またころころと、夜もすがら、夜をただ一夜、聲かぎり、また聲かぎり、ここだく鳴くも。

これは長歌である。さて最近のころころ蛙の歌一首。

ここに聽く遠き蛙の幼なごゑころころと聽けばころころときこゆ

この中にはころころが重出するが、これを助けるに初句のここ四句のごゑ、結句のきこゆ、その他きく、とほき、きけ、きこ等のカ行音の連鎖で一貫してゐるのである。のみならず、この重出は、兩々響き合つて、寧ろ內容に於ても單純化するものと思ふ。普通の場合、擬音が過ぎることは危險である。

*

ここに水の音のちよろろがある。音のみならず、その流れの姿も含まれてゐる。

芹青む小田の田べりのちよろ水けさ見に來れば畦を越えつつ（大正一一）

春まさにねぶたの芽ぶきいちじるしちよろながるる水がおもしろ（昭和六）

わたくしは、ここで、嘗て平塚で聞いた昔の小唄を思ひ出す。

花水川はしやれた川、
しやれざらに、
水まで、しやれてながるる。

＊

たんぽぽへざぶりとかかる波しぶきは前に云つた。ここにまたがぼがぼがある。

鯉ひそむ河楊の根の底明りがぼがぼと棹に搔きみだしたれ

民謠ではどうか。

出津の龜次は鯉とり上手、
がぼとおさへりや、早や締めた。

＊

風。

夕風のさわさわ早稻の穗の間に早や咲きまじる白胡麻の花

これは早稻の穗のさわさわである。

この山はたださうさうと音すなり松に松の風椎に椎の風

これは山松風である。

ざざんさ

松風の音はざざんさ、
ざざんさと囃しさふらふ。
さても昔は槍立てて、
とざまかうざまわたりさふらふ。
千鳥しば鳴く夜々は
苫を片敷き、浪まくら、
ちりやちり、ちりやころりと漕いでさふらふ。
ざざんさよ、
今も今とてざざんさよ。

「松風の音はざざんさ」は隆達以來である。わたくしのこの小唄はその近世調に傳統を引く。ただ短歌に入れるには氣品の問題とならう。注意を要する。

松風の流らふ聽けば生れ來しさやけき直き命おもほゆ

この濱の梵音聲のさみしくて遙けきは空のあなたなりけり

入れなくて濟めば、擬音は愼しむがよい。

＊

枯れ枯れの唐黍の秀に雀ゐてひようひようと遠し日の暮の風

このひようひようには必死であつた。五六年は考へつめたものであつた。

へうとして何か夜に呼ぶ聲すなり巷の吹雪闌けまさりつつ

市の吹雪の聲である。

（前略）よく見ればその空高く、かすかにも雪煙立ち、その煙絶え

ずなびけり。いよいよに紅く紅く、ひようひようと立ちのぼる

雪の焰の、天路さしいよよ盡きせね、消えてつづき、消えてつ

づけり。（後略）

これは長歌「黎明の不二」の雪焰である。

＊

こんころことかかるは小笹の霰よ、

うしろの篠藪さらさら、さらりよ。

といふ、わたくしの童謠、「お山の霰」がある。かうした擬音は歌謠には向く。歌では、過ぎ

ると危險であと淡々とやるべきものである。

いまだ起きて火だね守りゐたりさらさらとあたりの沈默に雪のさやる音

ともすると響き過ぎるであらう。

短日の光つめたき小竹の葉に雨さゐさゐと降りて來にけり

雨の音のさゐさゐは衣ずれの古語のさゐさゐの轉化である。

＊

風の今朝八重のさくらはぼたぼたと吹きもぎられて色のさやけさ（昭和六）

このぼたぼたに、八重櫻の花の重みと匂とをつけようとしたわたくしであつた。同じ重みのも

のに

ぼたぼたと搔きて垂らせる朱のうるし榛の雄花は春早き花

＊

百舌の聲はどうか。

翔りけり狹田の青田のひと色にきようきようとしていち早き百舌（昭和六）

立秋の百舌である。

秋高しくゐくゐりりりと鳴く鳥の聲は野山をけふかけめぐる（雲母集）

中秋より晩秋にかけての百舌である。くゐくゐろうにや、くゐろうにやといふのは或る土地の

俚謠の中の百舌であつた。

*

葦むらの中の晩秋の鳥の聲はけつけつであつた。

けつけつと鳴くは何鳥あかあかと葦間の夕日消えてけらずや

むぐつちよ。鳰の鳥。

けけろ鳴く聲は放てど夕照の日の方附くか眩し鳰見えず

その他の冬の鳥。これは口語體長歌「山中消息」にその聲を寒く寒く響かした。

生きとし生ける鵯や百舌、鶫のたぐひ、木々の枯葉に、驚く聲

も、けけつちよう、ちよう、ちよう、きいりきいりと親しまる。

けけつちようは鵯の類、きいりきいりは百舌である。

詩に見よう。

尾長鳥

山住の秋も深むを、

すべもなや、尾長鳥の、

けけつちようよ、けけつちよう、

けけつちようよ、けけつちよう、と

時雨れこえせね、枯枇杷に

額あつむるあでやかさよ、

日がなにがなせはしさよ。

同じくけけつちようで、詩の形態と、擬音挿入の點が違ふゆゑ、又別趣を生ずるであらう。

*

ほろほろ鳥の含み聲の幽けさ、圓い脊の霰小紋の翼、その頰には赤い肉瘤がある。ほろほろ鳥は群集しても寥しい。

珠鷄は頰の瘤あかし群れ群れてみな横向けり聲ほろほろに

ほろほろと啼く珠鷄のこゑきけば夕日ごもりになりにたらしも

わたくしはまた俳句にこの短日をなげいた。

短日やほのりとあかき鳥の瘤

山鳥のほろほろは昔の人も歌つた。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ

民謠體の詩「野茨に鳩」では、ほろほろの上にほろろんが乘つて鳩の含みとなる。

長歌の「鳥の啼くこゑ」

かおかおと啼くは鴉、ぴよぴよと啼くは雛鷄、雀子はちゆちゆ
とさへづり、子を思ふ燒野の雉子、けんけんと夜も高音うつ。
現身の鳥の啼く音の、なぞもかく物あはれなる。天わたる秋の
雁金、春くれば遠き雲井に、かりかりと消えて跡なし。

かうした擬音は、敢て珍しくもないが、鳥の啼く音のなぞもかく物あはれなるである。

*

蟲の聲。

りりとして鳴く蟲の音は夏蕎麥の月の光に闌けにたるらし
毬栗の目につきそめて染むこゑの寒蟬ならしつくつくと啼けり（再出）

*

これも自作の田歌に

山は壞んでも田の水やきれぬ、
しこたんたんと、のう、
今ぢや揃ひの少女笠。

といふのがある。このしこたんたんは田の水の下田へ落つる音である。

たんたん

たんたん、たたんと
竹伐る音は、の、
おいの、
向ふ日南か、野の上か。
たんたん。

たんたん、たたんと
田圃の畦に、よ、
おいの、
水が張ります、胸つまる。
たんたん。

これも民謡であるが、竹伐る音は、前と同じい水の音のたんたんにも通じてゐる。歌でも用ゐやうによつては効果があらう。「たんたん」或は「たのたの」。自身にも用ゐたが、今は一寸思ひ出せぬ。ただ墨を磨る手あたりに最近は使つた。

ほれぼれとおのれ遊ぶとたのたのと磨る墨の味は吾れのたしなみ

＊

この章の最後に云ふ。詩、ことに民謠や童謠に於て、わたくしは雜多の擬音を創り、歌謠の拍子にも囃子にも用ゐた。またそれらの性質からしてどんなにも自由自在に交響させることが出來るのである。

囃せ囃せや、多摩川音頭、
ちりへうと、ちりへうと、ちりへうと、へうつへう。
笠は鮎鷹、
笠は鮎鷹、手はさらり。
月の砧は昔のことよ、
いまは鮎鷹、ちりへうと、へうつへう。

これは多摩川音頭、鮎鷹をどりの本歌である。鮎鷹は千鳥に似て白く、多摩の清流に香魚を狙ふ。このちりへうの擬音は創るに二年は苦しんだであらう。しかし、短詩形にはどうか。

月の夜の千鳥、
見えて啼けとの。

この短唱の無擬音の方が幽かに、更に鋭く、響を隱約してゐるではないか。短歌に於ても、深

く考慮されてあらねばならぬ。而も獨創を重んずべきである。

四　定石のこと、字餘りのこと、押韻のこと

＊

中明る紫の月丘にあり秋草の花の亂れたるかも（昭、五）

この四句の「秋草の花の」は定石である。この字餘りの一音故に重厚が添ふ。「秋草の花亂れたるかも」では音數は適つても、全體を淺くし、ゆとりもつくまい。この歌初二三句で素直に歌ひ下ろし、三句ではつきりと切つてある。圓月が丘の上に、花骨牌の二十坊主のやうに出てゐる。光琳の屏風にもかうした紫の圓月があつた。この圓月の下空は丘の弧線で切られてある。その前景の秋草の花である。この繪模樣はそれだけで獨立して、また月の光と配合されてゐるのである。で、この四五句はさうした獨立的で、餘裕があり、貫祿のあるものでなければならないのである。のがある故ゆつたりとした根生の草になつてゐよう。こののは芭蕉の

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

のと同筆法である。

庭の木々にすさぶ夜風はさりながら咲きつつやあらむそのあるものは（昭、六）

のとやの二つの字餘りである。が、「庭の木々」が「庭木々」に比して、庭そのものの廣みを見

せる點について、このは前の例歌のに於けると同じ効果が考へられる。これは定石である。四句の「咲きつつやあらむ」のやも同じく定石の一つである。ここでやを入れないと伸びない、詰つてしまふ。それから、前に字餘りが一つある時には、後にも字餘りが一つは無いと、歌全體が崩れる。落着かないのである。かうした字餘りの例證は擧げれば他にいくらでもあるであらう。なほ、三句のさりながらは不必要のやうで、實は無くてはならぬのである。これあるが爲に餘裕もつき、夜風に吹きまくられてゐる庭の木々、ひそかに咲きつつあるその木の花に對する愛と嘆息と待望とが、我が氣息とその「時」をうち搖するのである。五句の顚倒法も、感動の形を如實に現はす。結局、短歌には説明的表現を忌む。句々は感動さながらに調べあげねばならぬのである。歌は生き物としての氣息に初めて匂ふものであらう。

＊

羽根そよがせ雀樗の枝に居り涼しくやあらむその花かげは

この四句のやも同じく定石の一つである。この字餘りはまた初句の羽根そよがせ（六音）の字餘りと響き合ふ。

＊

雨は今朝ふりながしけむ若葉樫や眼にきらきらし塵もとどめず

この三句のやもさうである。一音の字餘りであるが、これを普通の五音にし、若葉樫やを若葉

木やとしたらどうなるか、この歌の重點たる第三句は力が拔けて了ふであらう。樫やであるので、四句の眼にきらきらしが生きて光るのである。一音殖やしても強くしなければならぬ。ここに嘆息が響く。殊に二句で切れてゐる。調べが初めから改まるのである。一の字餘りのやに對し、照合する他の字餘りが無くてもよいことは、矢張り第二句ではつきりと切れてゐるからであらうと思ふ。

＊

ここの庭ひろびろと雨の降りにけり朝出でて見る山吹の花

この二句のの。

＊

梅雨あけの葉かげに照らふつぶら玉豐後梅は紅し花のごと見ゆ

この四句のは、これも字餘りの一の定石である。餘計なやうで餘計でない。前の第三句がつぶら玉といふ名詞で押へてあるので、その重壓に對し、この一音の字餘りが無いと、へなへなと崩れて了ふであらう。このはで力を反撥するのである。この原歌はかうであつた。

梅雨あけの葉かげに照らふ梅の實はつぶらに紅し花のごと見ゆ

これだと字餘りの必要はない。三句が梅の實はとなつて後に續くからである。しかし、全體として弱く、花のごとく紅い梅のつぶら實が、立體的に浮んで來ない、つぶら玉豐後梅は紅し、で

なくてはなるまい。

＊

篁に竹を愛でつつ歳久しつくづくと思ふよく住みにけり

この四句のとの字餘り。「つくづく思ふ」と云はないで、何故に「つくづくと」とを一つ餘計に點つか、これも同じ理由によるのである。

＊

毬栗の目につきそめて染む聲の寒蟬ならしつくつくと鳴けり

結句、との字餘り。これは斷じて、「つくつく鳴けり」ではいけないのである。この寒蟬はつくつくほふしである。そのままつくつくの擬音を用ゐた。

＊

夕野良の小藪が下の合歡の花きり雨かかかる雛燕のこゑ（葛飾閑吟集）

この四句の「きり雨かかかる」のかは、よく植字の際に落されて困つた。このかの一音の餘裕が無ければこの四五句は生きないのである。重要な楔點のかである。

＊

草食むと赤馬はなれゐる土手越しに一面にあかるあれが印旛沼

四句に渉るが、あか、あかる、あれが。

＊

印旛沼の眞夜のあやしき小つぶ雨鯉鮒どもか光りつつあらむ

結句の字餘り。

＊

わが宿は雀のたむろ多來れば日にけに寒し雀のみ群れて

結句、字餘り、ここはどうしてもさうならなくては据わらぬのである。結句の字餘りは、それのみで他に禍せぬことがある。であるから、前に字餘りが無くとも、この歌の姿勢は定まつてゐる。

＊

うら寒き池の水の面やつれづれと家鴨およげり鴛鴦を前に

結句の字餘りのに、普通ならば「鴛鴦の後」となるところであるが、さうすると、ちらちらとした紅い水搔の動きが前の水に見えないのである。

＊

河土手に螢の臭ずずろなれど朝閒はさびし月見草の花（葛飾閑吟集）

結句の字餘りに對して、三句の字餘りである。

＊

足の泥すすぎるにけり蓮の花は涼風の早稻の穂にあづけつつ（同上）

三句のはの字餘りは四句ののの字餘りに對照する。さうして四つののが響き合ふ。

＊

飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たたきて見居りその搖るる枝を（同上）

はらはらと雀飛び來る木槿垣ふと見れば涼し白き花ふたつ（同上）

月今宵背戸の畑の秋蕎麥に夜露ふりこぼれ晝のごと明し（同上）

四句、結句、字餘り。

＊

田末わたる時雨の雨は幽かながら初夜過ぎて出づる月のさやけさ（同上）

初句、三句、四句の字餘り。

＊

外に出して晝は果敢なき鉢ながら瓢簞の花の夜は咲きにけり

この四句のはも定石の一つである。二句に「晝は」であるから、四句に「夜は」である。

普通ならば「瓢簞の花は夜に咲きにけり」といふところであるが、「花は」では「晝は」と對照しない。「夜に咲きにけり」とすればにが附き過ぎて調べが流れる。初句の「外に」のにとも附いて、附くだけの効果はない。

＊

野砲隊とほりしがとどろきやまずいつべの霜に闌けにつつあらむ

四句の「闌けにつつ」のにの字餘りは、二句五音三句七音の「とほりしが・とどろきやまず」の錯綜に對して、一石を點つたのである。

五　同音、同行音の諧調、竝びに踏韻

＊

霜の置しづけくしよし朝まだき近き野にゐる家禽のこゑ

二句のしの字餘り。これも定石。

しも、しづけくしよし、あさ。サ行音。

＊

しみしみと澄みて來にけりまさしくもしづかにし霜にきくべかるらし

四句にしの字餘りが一つ。一つでいいのは、この歌も二句も矢張り二句で切れてゐる。しの字餘りはわたくしは度々使ふ。

この場合また、しの音が全體の調べを一貫してゐる。これに關して同じサ行音も用ゐられた。

しみしみとすみて來にけりまさしくもしづかにしもにきくべかるらし

四句の「しづかにし」のしで、霜を聽く心と氣息と態度とに、「時」と、眞實と、あはれとが籠る。聽き入る耳が出て來る。「しづかに霜に」では性急になる。

＊

冬の蠅そこら遊びし小夜ふけて居るものは無し凍みて來らしも

この歌の三つのしも定石の三つであるが、之等は字餘りではない。四句の「無し」結句の「來らしも」の二つのしは通例のしであるが、二句の「遊びし」のしは、わたくしだけの遣り方である。後の二つのしに對して、どうしても「遊びし」でなければならぬのである。

冬の蠅　小夜ふけて居るものは無し
　　凍みて來らしも

となるのである。

なほ、この歌の結句の凍みてのしも三つの定石のしに照應し、また三句「さよふけて」のさはしと同じサ行音である。

＊

濃き霜の澄みてさやけき冬菜畑に朝の響の來つつしづけさ

字餘りのに、しも、ずみ、さやけき、あさ、しづけさのサ行音、サ行音は爽かに、鮮新の氣を

響かす。

しの諧調の例。

黑駒はゆゆしかしこし北佐久や野分しき吹けさゆるぎもせず
まさびしく嘶る馬はたがらしの花にか觸れし首はうづめぬ
しの（篠）の爆ぜたしかにふかし向つ山鳴りしづみつつ火の渦卷きぬ
帆網張りゆゆし安けし太しきて嚴のほばしら根生ひずわれり
眞上そら飛ぶ雲迅しまさしくは巨きマストの搖りかしぐらし
蜩の啼き出るきけば眉引の月の光しらみたるらし
秋づきて土にしたしき木の立は見つつしずしず寢ねつつし見む
おのづから細み來ぬらし日向べの物のはしにも影の引きつつ
雨の夜はいと冷えやすし早寢して鳴くほどの蟲の音を愛しむ吾れは

＊

なほ、

蕗の葉に薄翅の蜻蛉匍ひ出でて日の照らし深し夏は來らしも

この四句の字餘り「日の照らし深し」を、「日の照り深し」では何故いけないかと云つた人があつた。意は同一であるが、短歌は說明以外に調ふべきものといふことを考へなければならぬ。と

れは日の照らし。深し。、來らし。、の諧調であることを知つてもらはねばならぬのである。

*

茲で考ふべきことは、日本の詩歌は、西詩や漢詩のごとく句毎に韻を踏むといふことは、日本語の性質上さして適しないことである。稀には成功する例はあるが、あまりにこの一事にかかづらふと、細工に過ぎ、本來の美質を害する。無理なのである。强ひてこれを行はうとすると無益の、さうして不快な遊戯となるであらう。かうした粉飾は日本語の香氣や氣品を穢して了ふ。それで前に、幾度もわたくしが例證したやうに同行上の諧調を取り、句々の中に、音と音と、言葉と言葉とを織り交ぜ、綯ひ交ぜ、もつと動く、もつと搖れる漣を立て、リズムをリズムとし、拍節を拍節とすべきではなからうか。

*

ただ、極めて稀なる例證に、俚謠の「阪は照る照る」がある。

阪は照る。照る。、鈴鹿は曇る。、
間(あひ)の土山、雨がふる。

わたくし自身の小唄にもバンの會の唄「空に眞赤な」がある。

空に眞赤な雲のいろ。、
玻璃に眞赤な酒のいろ。、

なんでこの身が悲しかろ。
空に眞赤な雲のいろ。

更に他の小唄には、ばんばんがある。「ばんばん」とは乳母の柳河なまりである。

ばんばん

ばんばん。
よかたん、
ぼたんの花たん、
あんたのごんしやん。(お嬢さん)
盛りの花たん、
歸つてんよかたん、
あんしんせんのん、
むぞかろばつてん、
歸つて寢んのん、
お寺もあろだん、
ばんばんよかたん、

あんたのごんしやん、
ぼたんの花たん。

右譯 お乳母さん、お乳母さん、いいさね、牡丹の花だよ、おまへの孃さんは、もう花ざかりだよ、歸つてもいい、その方がいい、安心おしよ、可愛いからうが、歸つておやすみ、お寺もあるだろ、お乳母さん、いいさね、おまへの孃さんは、牡丹の花だよ。

之等のんの踏韻は、相當に自然に行つてるつもりである。柳河の方言はわたくしの生れの言葉であり、その方言そもそもがんの音が大概の場合語尾に附くのであるから、他の地方とも違ふのである。漢土の影響が古往からあると思はれる。かうしたことは實に特殊の場合である。

それから、やはり自身の童謠の中から、「赤い鳥小鳥」を取り出してみよう。微細な點が見易いやうにわざと羅馬字綴りにしてみる。

Akai-tori, Kotori.
Akai-tori, Kotori,
Naze-naze akai,
Akai-mi o tabeta.

Shiroi—tori, Kotori,
Naze—naze shiroi,
Shiroi-mi o tabeta.

Aoi-tori, Kotori,
Naze-naze aoi,
Aoi-mi o tabeta.

之等の踏韻は脚韻ばかりでなく、頭韻も踏み、各句の母音や子音の細部に於ても一々に各聯各行と照應して行つてるのである。この場合、無理をせず、自然に自然にと行つたつもりである。踏韻の爲の踏韻であつてはなるまい。一々の語韻をよく嚙んで、含んで、照應もし交響もしなければならない。之等のアルハベットの一々のコンビネエションについて、細かに鑑賞していただきたい。元より歌謠であるから韻律は整ふべきであるが、作曲者の手に渡す以前に於て、之等を言葉の音樂として創造し、作者自ら無言の作曲を成してかかる要があるのである。

更にまた、自作の民謠「日かず」について點檢しよう。

日かず

さんさ、
さざんさ、
佐嶋の松の
音も
さざんさ、
あと七日。

さんさ、
さざんさ、
相模の灘の
音も
さざんさ、
あと二日。

さんさ、
さざんさ、

さらばよ、様よ、
様よ、
さざんさ、
すぐ明日。

さんささざんさである。さの音の諧調である。更に第一、第二聯の各三行目はさの頭韻にのがの二つ「佐嶋の松の」「相模の灘の」のであり、第三聯の三四行はさが三によが三、「さらばよ、様よ、様よ。」第一第二聯の四五行は何れも同じく「音もさざんさ」であり、同じく第一聯第二聯の六行は「あと七日」「あと二日」のあが二、とが二、かが二で、同形である。それに第三聯の六行「すぐ明日」もこれに照應し、サ行音すとしがある。

であるから、詩歌を味讀するには、その語の持つ色、香ひ、光澤、手觸り、味ひ、響に全感覺を凝らし、意味以外の、より以上の微妙な内律に耳を傾くべきである。その創作に當つても、單に内容を説明し、事實を敍述するのみでは、決して詩歌の表現として完うされるものではあるまいと思ふ。

言葉の音樂である。畢竟するに音樂である。

＊

短歌に於ける踏韻には左のごときものがある。きの脚韻である。

おほらけき崇きたふとき大御業つがせたまひき短かかりにき

大正天皇を悼み奉るの一首である。之等のきの踏韻は、無論意識して行つたのである。きの韻で疊みかけ疊みかけて行くところに哀悼の情が重なり深まつてゆかう。

ただ、短歌にはかうした場合は稀有であるといつていい。短詩形であるから、愼重の用意を要する。過ぎたるは及ばざるごとしといふことがある。

よき人のよしとよく見てよしと云ひし吉野よく見よよき人よく見

この天武天皇の押韻歌が極めて稀なる例のごとくに。

六　言葉の音樂について

*

しばしばも息吹きやすむ風息のこのけぶかさは冴えかへるなり

「風の夜」（昭和六年）の一首である。この歌では吹いてはやすむ夜風の息づきを、音律の上からも細かに形として現はすべく幾度か推敲したのであつた。この場合、句と句の移り、語勢といふものばかりでなく、一音一音の持つ色、香ひ、ふくらみ、細み、手觸り等は勿論、極めて微かなその連鎖、渾融の點までを心頭で感覺し、調樂しなければならぬのである。で、初句の「しばしば」も意味だけのものでなく、矢張り風息の刻みがかかるのである。いきふき、かざいきの間にやす

むを置いたのは、これも風息の刻みを刻みとして調べようとした。「このけぶかさは」のかと「冴えかへる」のかも「かざいき」のかと關係がある。言葉の音樂で、內容を一の感覺體として打ち出さうとしたのである。これによつて思ふに言葉は內容を說明し粉飾するものでなく、內容の本質そのものの形であり、香氣であり、動きであるべきである。

この歌は初めは左の如きものであつた。

しばしばも荒びて絕ゆる風息のこのけぶかさは身にとほるなり

これではまだ說明的な歌であつて、風息の刻みが、感覺としては刻まれてをらぬ。

しばしばも息吹きて絕ゆる風息のこのけぶかさの冴えかへるなり

幾分づつ考へられて來た、續いてまた、二句が「息吹きてやすむ」となり、四句ののがはになつた。「いぶきてやすむかざいき」が、また何故に「いきふきやすむかざいき」と訂正されたか、てを挿んでは溫みもつき、風の勢ひが出ない。いきふきと息を刻んで吹つかけなければ、その風息が形に現はれないのである。

*

うち向ふ春なりながら美篤吹き夜をしきり吹く風のするどさ

これも同じく「風の夜」の中の歌である。この二句三句の「美篤吹き夜をしきり吹く」も前の歌と同じく、しきり吹く風の刻み、動き、姿、聲といふものを、意味の說明でなく、さながらの

音樂として、表現しようとしたのであつた。

＊

風の音すさぶこの夜の篠藪をほそくとほりて眞澄むこゑ何

この原作は

風の音すごきこの夜を澄むこゑのひとりとほれり何のこゑならむ

であつた。風の音だけであつて、篠藪が出てゐない。そこで、初二三句は

風の音すさぶこの夜の篠藪を

となつた。さて四五句であるが、これが左の通り幾度か考へられた。

何のこゑかもひとつしづけさ
かなしきこゑのひとつ久しき
よくとほるなり何のこゑならむ
さやけきこゑのよくとほるなり

最後に

ほそくとほりて眞澄むこゑ何

＊

外の闇の木々吹きひらく夜風には強きすばらしき燈を向けてあらむ

この歌の表現としての眼目は四句の「強きすばらしき」である。これを「強くすばらしき」と初めはやつた。このく一字で、この歌全體は死ぬのである。きで生きる。さうして「すばらしき」のきと生きて、電燈の煌々たる光の吐息を瞬かすのである。この歌を生む前、わたくしは何と淺く流したであらうか。

さやかに燈をつけてあらむこの夜さり椿のしべは粉としみ光る
玻璃の戸をとどといたぶる夜の風に明き燈向けて……
風あててとどといたぶる玻璃の戸にすくなくも強き燈を向けてあらむ
玻璃の戸をとどといたぶる夜風には強くすばらしき燈を向けてあらむ

こんな程度の觀照であつた。內容から云つても比較にならぬ。大概はこの程度で納まる。ここを一息も二息も押さねばならないのだ。

木々のきぎ、吹き、之等が下の二つのきと響き合ふ。四五句は何れも字餘りである。「木々吹きひらく」は吹き咲くであつて、この夜風は木々の花を吹いて咲かせる風である。連作の前の歌、

庭の木々にすさぶ夜風はさりながら咲きつつやあらむそのあるものは（再出）

を承けるものである。それに強きすばらしき燭光を向けるのである。その光にまた、吾が眼を、心を向けてあらむである。愛と意志力である。この溫かさと強さを出さうと思つたのである。

＊

夜に發ちてはげしけれども物の芽に息つめて吹く風のみじかさ

これは一氣に成つた。ただ三句は初め、「木々の芽」であつた。「ものの芽」は、「はげしけれども」のもを同音で承ける。ここに生命あるものの溫みがこもる。「はげしけれども」といふ意味のみでなく、語音の感覺でも一脈の親しみを當てるのである。その上で「息つめて吹く風のみじかさ」である。

それから、次の歌が來る。

息つめてかへてまくらき夜の風間繼ぎ吹く風はいまだ起らず

風息が休む。その間の沈默である。待望である。

いきつめてかへてまくらき夜のかざまつぎふくかぜはいまだおこらず

カ行音、タ行音、二つのま。かうした語音が連關し、交響する。

*

風の吼えききつつくだつこの夜さり玻璃戸にうつり吾が顏は見ゆ

夜闇の吼えと自己觀照が來る。

夜さり、うつりの照合。ききつつくだつ。うつり、の同音重複。

*

滿ちにけりきらきらに星は滿ちにけり松の葉も見ゆ燈を消せば見ゆ

室內の百燭光を消した。硝子戸に近く淡い黑い松の葉が見えた。その空の星月夜になつてゐた。これは初句で切れ、三句で切れ、四句で切れ、五句で切れる。構成派風である。立體的外景と同時に、觀照の吾が態度の推移を四つに切らうとした。初二三四句と驚きから靜かに移り、結句でしみじみと眼を更に凝らした。ここにまた二つの小音樂を作曲しようとした。この歌、初めは

滿ちにけり夜天の星は滿ちにけり風のおらびを燈を消せば見ゆ

松の葉が出てゐない。その他、意は同じであるが、三句で切る楔點に氣がつかず、おらびを、燈をといふ風にをを重ねて、靜に處する道を取らなかつた。ここで切つて、沈靜ならしむべきであつた。

*

風は夜はしづもりにけりうつ雨のはらはらと來てそれも止みたる

風は沈靜した。夜も定まつた。その中をはらはらと音して來た雨があつたが、すぐと止んで、またひつそりとしたのである。この夜の聽覺は肉耳のみならず、心耳を以てするのである。この心耳の鼓膜、深い魂の氣息、その移りの形を、この歌の形として出さうとした。

初句の「風は夜は」のよるは心あつて一音の字餘りとした。「よは」では沈靜しないのである。「かぜは」(3)「よるは」(3)。形に示せば

風は、
夜は、
しづもりにけり。
うつ雨の
はらはらと來て、
それも、
止みたる。

となる。又四句の擬音の字餘りも、雨の音の急速と、そのまばらとを考へてのことである。「それも」で、また聽き入る、休止を置いた。そして「止みたる」である。このるは初めの「よる」と應ずる。この原作は

風は夜はしづもりにけりはらはらとうつ雨のありて繼がず止みたる

であつた。三四句が騷々しかつた。はらはらも生きなかつた。

*

「風の夜」の歌はこれくらゐにして、他の例證に移らう。

落ちてけりあはれよと見しその棚の通草とどとして積む雪とともに

世田谷での吟詠である。離家の庭の通草の棚は、食堂の硝子窓に迫つてゐた。雪がつもつた。

幾日か降りつづいて、その棚がしなつて來た。危いなと見てゐて、遂に、ある朝、どどどどどつと音がして、積つた雪の重みで、その雪といつしよに、棚が斜めに落ちた。積つた雪といつしよに落ちた。これが現はすに困難した。それからその音と落つるタイムと、立體的なものを如何にして如實に出さすかであつた。それと、それを觀る自分の嘆息をも、內律をも形に示さねばならなかつた。事實だけの表現なら容易であるが、歌は報告ではないのだから、ここに創造の必要があるのである。歌は歌そのものの音と色と響でなければならぬのであるから、わたくしなぞはしみじみと苦勞するのである。

「落ちてけり」と、冒頭に、わたくしは歎息をうち出した。さうしてタイムの短かさも。四句に一音、結句に一音の字餘りとし、とどとしての急廻した擬音を響かして、一氣に通草と積む雪を落した。さうしてにの据りで、地上にじつくりと留めた。まあ、そのつもりである。

*

ゐろり火に蛇經を讀めばおもしろく身うちゆるがして走るリズムあり

ゐろり火のちろちろに、蛇經を讀んでゐる。蛇經のリズムは、さながら蛇の奔り流るるがごとき表現である。

疾く奔り流るる濁愛を、涸らし盡して、餘す所なき此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を捨つるがごとし。

走ること疾きに過ぎず、又、遲るることなく、總て此の妄心を伏したる此の比丘の、此岸彼岸を捨つること蛇の朽ち古りたる蛻を捨つるが如し。

走ること疾きに過ぎず、又遲るることなく、一切は虛妄なりと、愛慾を離れたる此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を捨つるが如し。（後略）

かかる蛇經である。だから、「身うちゆるがして走るリズムあり」である。一氣に身うち全體をあげて讀み、ゐろり火のゆらぎと共にこの身そのままうちゆるがして走る吾が心のリズムを、その感覺と共に又、奔らし流れさすのである。

＊

日方吹き篠吹く風の朝東風は目もすまにして音のさやけさ

「風の夜」の歌の刻みと似てゐる。ただ、この歌には細くしてさやけきものがあらう。朝東風の音樂が。

＊

とり食めば核は多けど齒にあててすがすがしかもむべの實のつゆ

語韻と語韻の連關、音の幽かな、そしてすがすがしいつながりを、何の音もないところに、もつと、そのつゆのしたたりを、齒に、心に味ひたいわたくしである。

言葉の音樂については、もつと解義したいことがあるが、紙數の制限があるので、先きをいそいで章を改める。

七　靜と動との寫生

寫生は爲すべきである。寫生は根本である。寫生の修業は素描の修業である。觀照の精確、細緻、俊雋、慧敏、その直感的六官は、叡智を感覺體に放電させ、これを表現するに、等しく精を盡し、明暗を正しくし、繪畫的に、又彫刻的に、又、動的に發射し、搖曳させ、顫動させ、飛行させ、轉換させねばならぬ。而も寫生に畢らしてはならぬのである。徹して寫生を超ゆべきである。東洋藝術の精神は茲にある。象徵、しかも近代の新幽玄體を創造せよ。

＊

山川のみ冬の澄に影ひたし椿は厚し花ごもりつつ

これは寫生である。沈靜した一の實相、奥深く、紅い椿の色と香ひとを籠らした、動きなき濃藍の水面、青く黝い鏡葉。早春のひえびえした空氣。この中に或は寫生以上のものが知覺してもらへないであらうか。

この歌は昭和六年に完成したが、初めて筆を下ろしたのは大正十年であつた。この間十年以上

は經過してゐる。眼目たる「椿は厚し」の句がどうしても生み得なかつたのである。この句を得た時には全く興奮した。

＊

曼珠沙華莖立しろくなりにけりこの花むらも久しかりにし

この初・二・三句は寫生である。殊に「莖立しろく」は確かに肉眼で觀た形と色とにちがひないのである。

ただ、この四、結句は表現に色々と惱んだ。

久しかりにし花と思ふを
久しかりにし花もむなしき
ここの日蔭も久しかりにし
○この花むらも久しかりにし

＊

さるすべりぬめりあかるき春さきは眼も溫むなりその枝この枝

「ぬめりあかるき」は寫生である。春さきのさるすべりの枝である。

＊

この庭の日の照る方に咲き群れて紫苑はうれし秋づきにけり

「日の照る方に咲き群れて」は寫生である。

＊

石庭に冬の日のさしあらはなりまだ凍みきらぬ青苔のいろ

寫生である。さうして何か、その外にあらう。

＊

春の蚊の立ちそめにけり芽楓の下照りあかりしづけき土に

寫生である。但し、この原作は

春の蚊の立ちそめにけり芽楓の下さしあかる日かげの中に

であつて、未だ徹しなかつた。

＊

うち沈み石の面蒼しかへるでの若葉明りに蚊のちらひをる

同じ庭の、もつと沈靜した蒼い若葉明りである。蚊が隱見する。靜中の動である。

＊

木槲のしづけき立をちりかけて櫻は白し光る花びら
日の闌けを土移りする花びらの光りつつとまり春はしづけさ

動の寫生である。一は散りつつしづかな木槲の上で光る花びら、一は春晝のしづかな土に、あ

るかなき風に吹かれて、つつうと、移り、光つて、また停り、また、つつうと移る櫻の花びらである。

＊　＊

觀つつあれば櫨の紅葉の一ひらちりまた二葉ちりぬ日の照る石に

繪畫風であるが、この寫生には動がある。

＊

目にたちて菊は白けど置く霜の紫の凍み光りこもれり

「紫の凍み光りこもれり」は寫生である。靜。

＊

中垣をこなたへ明る山吹の八重咲きの花は雨ふかき花

「こなたへ明る山吹」「雨ふかき花」何れも寫生である。この結句には相當に苦しんだ。

＊

み冬づく丘の家居に立つけぶり湯氣おほけれやあたたかく見ゆ

動くものの、ものあたたかいものの寫生である。

＊

ほろほろと行くにくづるる崖の土こごりきびしき霜ぞ立ちたる

これにも動きがあらう。

＊

七面鳥けけろ歎けば斑碧の朱肉搖れ伸ぶくちばしのうへ

眞青に頭すくめて張り來たる七面鳥の强面の歩み

莎草の紅いまだするどし七面鳥もそろあゆみぬ蹴爪をちぢめて

七面鳥ひた迫りつつまじろがず肉嘴燃え伸ぶ眞向の垂り

一氣に押しゆるぎ來る大きなる七面鳥のひたぶるのすわり

さうさうと行きめぐりつつ安からず皺ばみ碧き七面鳥の面

寫生である。繪畫的であつて、また動である。

＊

薄吹く風にいななく青駒は力の張りや外に急燥るらし

前搔き搔きはやり堪へゐる赤駒の尻尾の垂りに力こもれり

跳ね立ちて今飛ばむずる雄の馬の後脚のすわりゆゆしかるかも

をどり立ち猛りおどろく赤駒のたてがみの振りに野分來れり

駈け駒は四つの膝瘤力こもりひづめの裏し空向けつ皆

駈け駒は勢ひ空飛べ閑かなり駈けのとまりはひたと停れり

之等の群馬も寫生である。力と跳躍とをわたくしは描かうとした。

＊

かたむくと見つつ待つまをとどろかず巨き濤凄し騰りきりたる
まなかひに落ち來る濤の後濤の立ちきほひたる峯のゆゆしさ
躍り立ち羽搏ち卷き立つ波の穂の間に徹り青空のいろ
勢ひ立ちただち碎くる波の穂のしぶきが飛ばす潮の珍珠
金華山沖の怒濤である。跳躍、奔騰、壞亂、飛沫。

＊

韃靼の海、波のうねりに搖られゐて遊べる鴨か大きうねりを

この原作の三・四句は「現れて鴨搖られをり」であつた。寫生ではあるが、それだけのものである。「搖られゐて遊べる鴨か」で、感動律が出るのである。一は靜觀し一は主觀を宿す。この二つの場合は考ふべきである。

＊

靜かに、また雀の動作に移らう。

飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たたきて見居りその搖るる枝を
飛ぶとしてしきり羽ばたく雀の子聲立てて還る若葉の搖れに

之等の動作を再現すべく、わたくしは推敲に腐心した。やつとどうにかなつたやうである。

八　短歌とスピードの問題

眼下の深田に映る日の在處かがやきしるし月のごと見ゆ
空行けば目も戀しかも山ふかく人家居して衣干す見ゆ
我が飛翔しきりにかなし女子の小峽の水浴夏は見にけり
深山木の黑檜の木群秀に濡れてふりしばかりの雲斷るるなり
四方の雲ひたにしづけくなりにけり山峽ふかく瀨のたぎち見ゆ

之等の短歌は、昭和三年七月、大阪朝日新聞社の委囑を受け、日本に初めての藝術飛翔を、旅客機ドリニエ・メルクールによつて、わたくしが敢行した、その所產である。コースは太刀洗から大阪間であつた。

おぎろなき夏の微塵の澄むところみ空は青し飛ぶ涯に見ゆ
三笠山さ青の尾上に立つ鹿のかぼそき姿天にして見つ
いにしへの奈良の都の藤若葉目も新なり我は高行く
高行くはひたすら悒鬱しまかがやき横たふ雲の眼を塞ぎつつ
鈴鹿山空木花咲きしづかなり飛びつつし思ふ夏ふかみけり

眼下に横たふ谿は鈴鹿とぞ死の衝激をからうじて堪ふ
移りつつ雲はあるらし山襞の赭きなだりに影のしづけさ

之等の作は、越えて昭和五年、郷里柳河よりの歸途、太刀洗より一氣に立川まで翔破した時の所産である。

之等は無論自由律短歌なるものではない。傳統ある短歌の道に立ち、その三十一音型を十分に尊重して、その表現を表現としたものである。現今のこのスピード時代に、而も飛行機搭乘の歌としては、果して之等が現代の短歌であるかと或る向きの人々から疑問とされた。よろしい。これについてわたくしは言はう。

短歌は短歌である。わたくしはこの三十一音型の中に、この形式に許されたる範圍に於て、十分に、わたくしの内律を整調し、觀照の深度を思ひ、心法の完きを期した。誰しも新奇の事件なり、題材に對しては、その初め兎角仰天し輕燥する。しかしながら如何なるスピード時代に於ても、天地自然は儼然としてゐるのである。無限にして恒久なる時劫の中に於て、高が飛行機のスピード位は瞬の瞬きにも當らないのである。人間生活の諸相も、地球上の轉變も、否、地球そのものの生滅すらが一微塵の一瞬の事實に過ぎないのである。眼前に幽遠を思ひ詩を思ふ心は、寧ろ時空を越えて不易の大精神に滲透すべきである。また詩人の感覺は叡智は一瞬にして永遠の生を掴むべきである。如何に飛行機の飛翔が疾くとも、この一瞬にして把握する直覺力よりも急速

である譯はないのである。たとへばまた閑寂に處し、心眼澄み、心耳冴えわたる際に於ても、事象の把握は一瞬に決する。身を雲際に託し、快翔又快翔するスピード風景に於ても亦同一である。

又、わたくしの體驗に據つて言ふ。飛行機上から地上の或る都會乃至は或る山河の一局部を觀る時には、如何にも急速を感じ、送迎の慌しさを感ずる。しかしながら、上空の展望は廣濶であつて、これに比すると飛行機の速度のごときは如何にも悠々たるものに感じられるのである。三千メートル以上の上空にあつて、大觀し、雲海を飄々として越え、しかも悠揚として、詩心を遊ばす時に、自分は、少しも焦燥を感じなかつた。一々の雲の去來、幽かにまた山襞を移り行くその雲の閑かさも、閑かに眼に心に印することができたのである。この心である。この上空の大觀は、かの急行列車或は市井をドライブするタクシーよりの左顧右眄よりも、却つて餘裕があり、閑寂でもあるのである。一瞬の動にも千年の靜を直感すべきではないか。

又、自由律短歌の作者を除き、殆んど總ての歌人が、日常急行列車に乘じタクシーを驅りながら、その急速なるテムポを形式としないのは何が故か。飛翔の場合も同樣であらう。短歌形式に參ずる者は、この形式を眞に知り、この形式をこの形式として完全ならしむる表現道に精進しなくてはならぬ筈である。眼前のスピード以上のもの、以上の永遠相について、不易の人間感情を、愈々に深度の光輝たらしめねばならぬのである。

わたくしの飛行に遲れて一年、昭和五年に、歌壇の四家（善麿、茂吉、夕暮、庄亮）が朝日機

に乘じて、帝都の上空から、その附近の短時間の飛翔をし、卽吟し、又、その後に作歌した。

いきなり窓へ太陽が飛び込む銀翼の左から下から右から

たちまち正面より近づき近づく富士の雪の光の全體

連山の斜面と斜面の急角度の旋回雲のにじのきれめに（土岐善麿）

自然がずん〳〵體のなかを通つてゆく。山、山、山。

二千メートルの空で頭がしんとなる、直下を飛び去る山、山、山。（前田夕暮）

大地の誘惑、二千メートルを心ましぐらに墜落す（吉植庄亮）

電信隊淨水池女子大學刑務所射擊場塹壕赤羽の鐵橋隅田川品川灣（齋藤茂吉）

かうした所謂近代感覺によるといふ形式、スピード的自由律的短歌である。なほこの外に庄亮、茂吉兩君は在來の短歌調と、幾分の破調を作つてゐるが、

久方の空より見ればたたなはるわが國土はかくも美しき

うつし世のたのしみここにきはまりて酒のみわれは酒のみにけり（庄亮）

飛行機にはじめて乘れば空わたる太陽の心理をすこし解せり

われよりも幾代かの後の子孫ども今日のわが得意をけだし笑はむ

山なみの起伏しきたるありさまを一瞬に見ておどろきにけり

この身なまなまとなりて慘死せむおそれは遂に識閾の上にのぼらず（茂吉）

之等の觀照の深度に對し、わたくしは遺憾ながら卽吟淺薄と表面的觀照と說明以上のものを受取れない。わたくしの飛行上の觀照は、この程度であつてはならぬと思つてゐる。

さて、以上の諸家の自由律短歌に對して、わたくしは、その一年前に大朝紙上に連載した散文「天を翔る」の諸節を拔萃してみたいと思ふ。

○流動、流動、流動し始めた輝く芝生、捲き起すプロペラの嵐、嵐。

○窓硝子をあけて、差し出す顏と手とを横薙にたたきつける風、風、風だ。

○なんとすばらしい大斜面の山岳、丘陵、村落、樹林、格納庫、飛行場——

○眞夏の空中は玻璃質である。玻璃質立體風景の、なんと透明で鮮麗な模型的鳥瞰。——

○あ、街だ、街だ、豆の市民が一齊に走り出した、無數の９９９９９。

○煙、煙、煙、煙、煙、ほう、石炭、煙突、電線、電線、電線、電線、海港、海港。

○丘陵、丘陵、丘陵、ああ、日に燒けた羊齒、蕨の葉のやうな村落、赤い鳳仙花、子供——

○ああ、煙草畠、なんと涼しい花、花、花。あ、あの丘の小徑を、雨だ、雨だ、雨に濡れつつのぼつた私だ。

○あ、書院松、大津山、龜山、鷲の巢山、丘、丘、丘、地上一面の葉綠素、萬歳。

○あ、何と青い美しい池、裸婦と裸童と雜草、健康であれ、素朴であれ、よく培はれた野菜的感情——

○見ろ、白い白い霧のごとき雲の連濤を。雲は、連雲は機と竝行して、その逆に西漸する。

○見ろ、見ろ、見ろ、翼枝は都市の熱鬧體を、また煤まみれの大肺臟を截斷する。

○反響、反響、反響こそは機翼にある。ああ、地上への熱愛と信實、——ああ、現代の活社會、ああ、民衆、民衆、民衆、——人間が戀しい。

○鑛土の氣韻を、綠葉の薫蒸を、また河川の水煙を感覺して、かくもまざまざと人生の縮圖を、——人間の活力を、智識を、感情を、傳統を、風習を、また近代の科學を、思想を眼下に觀て、ああ、天を飛翔する者こそは、その心理こそは切迫する、この自然人生への直面は、絶えず絶えず脚下に見つつ離れず飛翔する官感こそ却つて地核に貫通する、眞に眞に直覺する。眞に地上を憂惧する。

○天を翔れと私は言ふ。ああ、この大地を大地を理解するために。

○飛ぶ飛ぶ飛ぶ、メルクールの右翼左翼、支柱は斜に截斷する、雲を、雲を、雲を。

○秀麗な海峽！　私の眼は眼の下を西航する一隻の白い大汽船に凝集した。

○大都市、大都市、ああ、大阪、

煙、煙、

煙、

煙、煙、

煙、煙、煙、

煙突、あ、大煙突、大煙突、

川、川、川、川。鐵橋、鐵橋。

あ、炬火。天滿の前祭、赤と綠の灯の道頓堀、中の嶋、鮮黃のイルミネエーション、騷音、騷音、騷音。

○驚く驚く驚く驚く、大斜面の、無際限の、空から空へ急傾斜し、落下し落下せむとする大都市、ああ、大大阪。

例證すれば限りがないゆゑこれで止めるが、之等はわたくしの散文の一節一行二行である。之等の一節から、或る前後の行を截斷し、又は一行の中から、詩としての或る二三の贅語を削除すればどうか。或る行はそのままでも、謂ふところの自由律短歌なるものではないか。又、前掲の諸家の新短歌と、觀照に於て表現に於て如何なる相違があるか。わたくしは再び云ふ。わたくしの散文の一行と何の相違があるか。かうした表現はわたくしの既に散文に於て通り越したところである。この文體は、また後になつて飛行文章界の一流行となつたものである。

要するに形式の問題である。短歌に於ては短歌の形式に順應せねばならぬ。その內律により取材により、定型の短歌とし、自由詩とし、又歌謠とすべく、自由自在であつてよい。强ひて短歌の定型を破壞せずとも、適切な表現形式は他にいくらでもあるのである。短歌作者が短歌の中でのみ取材によつて改革しようとするゆゑ過誤が起るであらう。で、折角の自由律短歌も、自由詩の見地からすれば寧ろ時代遲れなのである。然るにさうした新短歌の作者達が、わたくしの短歌に對して、時代の短歌で無いごとく云ふのは、見地の小を自ら語るものではなからうか。本來、わたくしは自由詩人である。平生に自由なるが故、短歌創作に當つては却つてその定型を嚴守し、その美德を損ずることを畏れるのである。寧ろ自由律短歌なるものは、わたくしの散文級なのである。

はつきりと云ふ。

あ、雲だ、また、田の水面に映つた銀覆輪の暗灰色。ああ、その中に
深沈と輝く白金の全圓、月輪にもまして白く光る日輪の圓。

これは、わたくしの散文の二三行である。

眼下の深田に映る日の在處かがやきしるし月のごと見ゆ

これは、わたしの短歌である。同景同材のものが、散文より歌に洗煉される時、かく單純化し、かく壓搾され、かく深度を深められるのである。

飛べよ、飛べよ、
銀灰の巨鳥、メルクール、
ああ、J——BADA、
ああ、正しく、謙讓に、
ああ、然も均整し、安全なる翼の王、
ああ、B・M・W・六百馬力、
ああ、單葉のドルニエー・メルクール。
音、音、音、音、爆音、音。（第一節）

飛べよ、飛べよ、

日光は機體にある、
純なる、ああ、純なる一つの感情は、
天を横斷する。
また、斜斷する。截斷する。
飛べよ、生物、メルクール。
音、音、音、音、爆音、音。（第三節）

これは、わたくしの自由詩、「飛べよ、メルクール」の第一節と第三節である。

天上の旅客、旅客
我等は身輕るし、鳥のごとし、
峨々たる山岳、原始の雪谿、
なつかし、俯瞰し、樂し、樂し。
航路は輝く、空は涯無し、
飛べ、飛べ、飛行機、遮る物無し。
らら、りら、りらら、
りら、りら、樂し、樂し。

これは、わたくしの歌謠「空中行進曲」の一節である。作曲すべく、歌唱すべく、初めから用

意されて、この形式が新に創られたのである。

ツエツペリン伯號に寄す

しんしんとして近づきつつある、
さうさうとして近づきつつある、
爆々として、囂々として、悠容として、颯爽として近づきつつある
ああ、ツエツペリン、銀白の尾白鷲。
君こそは叡智と幻想との女王、時と空との短縮者、地球を週る急速力の調革、氣流の釦。空界の心音。
君こそ精緻なる近代の頭腦、不壞力の母體、はた昂騰する童心の醱酵母體、飽滿の肉、薫香の氣嚢。
はた、飄々たる、茫漠たる宇宙の眉、大勇の搏力。
ああ、君こそは高空の放雷塔、飛び來るホテル、鮮麗なる連星のゴンドラ。
虚虚にしてまた無上の眞實、輝く一つの耳、綠色の複眼、雲の上の餽。
おお、踴躍する、超越する、また蕩搖する、流動する、一氣の飛翔者、

發見者。精確なる一線のコース。

飛翔する、飛翔する。地上を、綠素を、人類を、山嶽を、海洋を、虹と月とを熱愛する情熱の嵐、天上の感覺體、快適なる旅船、ッェッペリン。

來れ、最新にして至純なる科學の處女、壯麗なる花嫁、
ああ、朝は呼ぶ、世界の黎明に呼ぶ、日本は、東方の太陽は呼ぶ。
來れ、汝の太陽は呼ぶ。

これは、わたくしの自由詩である。

ここで、わたくしは又云ふ。詩には、歌謠には、短歌には、それぞれの道があると。短歌については、わたくしは短歌としての整調を思ふ。相應の推敲をする。

三笠山さ青の尾の上に立つ鹿のかぼそき影も天にして見ゆ

この歌の四・結句の表現には、その推敲上に實に左の徑路があつたのである。

影つばらなり空ゆ見にけり
かなしきかげも空ゆ見にけり
かぼそき影も見て飛びにけり
かぼそき影も見て越ゆるなり

かぼそき姿見つつ飛ぶなり
目にもかぼそく見え來るなり
繼しく細き影も見にけり
影つばらなり空ゆ見にけり
目にはつばらに見えて夏なり
つばらに小さき影も見にけり
目には留れどかかはりも無し
目には入りつつかかはりも無し
たまゆら小さし目にも入りつつ
たまゆら小さし目に留まるなり
目には入りつつ飛ぶ航路なり
目には入りつつ飛ぶ眞夏なり
目には入りつつ我が天路なり
○かぼそき影も天にして見ゆ

九　觀照と境涯

短歌には短歌の道がある。この道にひたすらに繫るとき、わたくしはまことに心の法樂を感する。閑かに心身を自然の中に處し、閑かに吾が境涯を樂しむことは、わたくしのこよなき悅びである。わたくしは獨りで閑かに、又幽かにあらうと思ふ。眼前に徹して、幽玄を思ひ、肉身を通じて永劫を感覺し、定型の不自由に却つて大自在を蘊蓄しようと思ふ。隱約の氣韻、語音の味觸、句々の精練、香氣の創造、微妙の整調、しかも觀照に正しく、淸新に、鋭く、また深く、吾が歌は吾が獨自のものであるべく、愈ゝ精進したいと思ふ。

短歌の創作に吾が身命をうちこむ時、世の喧騷音は、わたくしの周圍に搔き消えて了ふ。わたくしはほれぼれと遊ぶ。定型は心法の座であり、推敲の苦は洗煉の樂しみである。

少くとも、わたくしは藝術の士である。詩歌以外の諸事は、詩歌の創作以外に於て、思慮し、行爲する。わたくしは縱に詩歌の氣品を亂さうとは思はぬのである。詩歌はわたくしの持つものの最高の道であるからである。

わたくしとても人身であり、現代の生活者である以上、社會意識もあり、世界の諸相にも關心する。しかしながら喫飯にも詩を思ふことはわるいであらうか。しかもまた、大自然の永劫相に對して謙虔なる美の道士として精進することは、わたくしにとつては唯一の道であるのを知つてゐる。わたくしはこの道に立ち、この道を樂しみ、この道を行き盡すまでは歩まねばならぬ。

詩歌は詩歌の香氣と美德とを思ふ人にのみ匂ふものであらう。妄りに喧囂し、輕燥し、絕叫す

る向きは、詩歌以外の道に立つて、そのイデオロギーを實行化したがいいのである。

わたくしは、この頃旅に出ることも少く、仕事も相當に山積してゐる。この爲に短歌の創作に思ふ十が一も耽る餘裕を持たぬ。その爲に、わたくしの取材は、多くこの家の環境の季節と風物とに限られてゐるやうな現在である。しかしながら、この狹小な、環境のみに於てすら、わたくしの歌ふべきものは、常に豐かに滿ち過ぎてゐるくらゐである。閑かに自然の中に順つて、幽かに心眼を開き、實相を觀じて、太虛に參ずることは所謂、封建的イデオロギーの士であり、ブルジョア藝術の末徒であらうか。

わたくしは云ふことを止めよう。ただ、わたくしは最近の所作の一端を最後に錄してこの「作歌の實例」を結ばうと思ふ。淸鑒を得ば幸である。

月と雲の歌より

この月を小竹の葉叢に影さして飛びちらふ見れば雪はおもしろ
晝閒見し麥の立穗と思ふいろ月の光に見えそめにけり
蛙鳴くくらき水田の夕澱み電柱に添ひて月のぼる見ゆ
雨夜雲移ろふ月のつぎつぎと先あかりつつすでに露けさ
一方に蛙鳴く夜の涼しくて月わたるところ雲堤引く

月すでにのぼりて淡き黄のしめり茅蜩のこゑぞ森にとほれる
紫は茄子の月夜の陰ながら傍ゆく水のよく光るなり
猪の子雲噴き出る雲の傍雲の氣に引く見れば茜細雲
月の出てしきりさわめく田面風螢は迅し砂のごと消ゆ
秋はいまさなかとぞ思ふ向つ岡月明うしてこの夜十六夜
白の魚移ろふ雲のひとながれ初秋の雲の空にすずしさ

さうして、

風隱のぬくき垣内の高野槇これの一木の春のしづけさ
日ざかりの田中の黝きひとつ松夏はひそかに闌けにつつあり
よき影よ向ひの松の木ぶりにも秋分の陽はしづかにし燃ゆ

かうした閑かさにわたくしは境涯の自分をも感ずる。さうしてわたくしの行く道は遠い。

草堤夕かげ長し誰ならず我が歩むなりかく思ひ歩む

一〇 補遺

一字一音の違ひで、全くその意味や價値が異つて了ふ場合がある。或はまたその歌一首が生きるか死ぬるかといふ重大の楔點に、その一音二音が置かれる場合がある。洗煉をし推敲をして、

やつと生かしてきた時の悦びは、まことにこの上もなくうれしく思はれるが、反對に取りかへしのつかぬ誤植をされた時の辛さはまたと無く感じられる。

例を擧げてみよう。

＊

日は暑し林泉のたをりにつく鴨の（誤植と）ゆきあひの鴨のくわうと啼きたる

この三句ののとの一音の相違である。

この歌は筑後柳河の舊藩侯邸の林泉の鴨を寫生したもので、さうした歌の中の一首であるが、この林泉は廣くて石が多く、水が入り込んでゐて、なだらかなあちこちの芝生には小松がほどよく摘みそろへてある。さうした橈りの渚につく鴨の一二羽が兩方から斜めに、ゆつたりと水を搔いて來る。さうして行きあふのである。そこでくわうと啼く。夏の暑い日中の閑けさと光である。そこで「つく鴨のゆきあひの鴨の」でなければならぬ。さうして、その動作の暢びやかさを調べとして表はす爲に、「林泉の」「つく鴨の」「ゆきあひの鴨の」とのを四つ緩く重ねて、延びさしたのである。

「つく鴨と」すればどうか。

渚につく鴨と、またその汀から離れて水に浮いて來る鴨と行きあふこととなる。すると趣が全く變つて了ふ。それにこのと一音で全體の調べが堅くなり、緩い動きが、抑へられて了ふ。それ

に、またこの三句のとの五句の大事な「くわうと啼きたる」のとの音と卽いて、その感覺音の効果をもうち消す。この「くわうと啼きたる」は日の暑さを深めまたこの林泉の閑寂相を更に生かす眼目の句であるから、この效果を殺したのでは、この一首も死んで了ふのである。

それから初句を「日は暑し」と切つたのも、ここで一先づ全體の地をつくつて置くのである。たとへば林泉の鴨をゑがく前に屏風一面に銀箔を置いたのと同一である。「暑し」のしに「林泉」のしを續けたのは、しの音の連關の自然さを計つたのである。

＊

晝の林泉石のあひさにゐる鴨の一羽は黝しつれづれの鴨

この歌も同じ林泉の鴨を歌つてある。石の間のやや細めの水面につれづれと水を搔いてゐる一羽の鴨、それも青首鴨なのである。初め、この三句は「一羽はよろし」とか「一羽はうれし」とか「さびし」とか主觀を交へたものであつた。それをうち消して、ただ「一羽は黝し」として、寫生に徹することにしたのである。夏の激しい光線の中に、濃い青が黝く、それに陰影を帶びてゐるのである。さうしてその鴨はつれづれの鴨である。ここに普通の言葉でいふ寂しさ以上のものが黝く、姿と心とを深めてゐるのである。わたくしは寫生をしてゐる。しかしこの寫生は、わたくしの念とする象徵風の謂ふところの新幽玄體である。で、かういふ場合、「一羽は〇〇し」の二音が活殺の鍵となるのである。

＊

お池（誤植宮）にはいづくにも見る影ながら龜の子が搖る水際さざなみ

この歌の池は明治神宮寶物殿の前の池である。初夏の日中のことであつた。小さな龜の子が水際近くを首を伸して泳いでゐる。小さな漣が立つ。かうしたお宮のどこのお池にも見る影ではあるが、それでもその搖れる水際のさざなみと龜の子とにほのかな哀れさとをかしみとを感じたのである。

この初句、「お池には」が「お宮には」と誤植された。池と宮とではちがふ。かうしたお宮の池にはちがひないが、ただお宮では池が出ないのである。漠としてゐる。ひつたりしない。池といふ直接性が無ければならない。それにお池のおで、お宮らしく既にきこえるであらう。

（昭和六年十月稿）

季節の歌の作り方

一　序

季節の歌といへば、四季の風光や景物、それらに關する情感を調べあげた歌といふことにならう。つまりは花鳥風月の諷詠であります。ただここに豫め申上げて置きたいことは、私共の自然觀照の歌が、ともすると季節歌だとか新花鳥風月歌だとか一概に解義され易い。ここに少々問題があります。自然の觀照を本にしたとはいつても、それらを直ちに季節の歌と看ることは如何なものか。私共の歌は勿論四季の題詠でも無く、狹義の花鳥風月に耽つてゐる譯でもない。もつと廣く、もつと複雜で、もつと甚深なものに心の眼を向けてゐる。ただに季節のみを感ずるものではないのであります。

命なりありのままなる觀のながめ祕密莊嚴の相しぞ思ふ

この私の歌の祕密莊嚴といふことですが、これは眞言の教義にある。大自然の實相といふものは、ありのままにそれらの祕密が公開されてゐる、その公開された祕密に參ずることに矢張り私たち歌人の光榮を思ふものでありますが、これに就いては、眼で見、耳で聽き、鼻で嗅ぎ、或は

皮膚に觸れる、さうした表面的な感覺によつて知るのみでなく、深い大きな人間愛や叡智や、直觀やを通じて知るべく歌ふべきものであります。色に現はれ形に現はれてゐるものの、その奥のもの、すべては一つに通ずる大自然の生命といふものをこそ把握すべきものであります。さうして自然と自分とが一枚になる、さうした物我一如の境地になりきれれば忝いかぎりではありますが、これがちつとやそつとの修業ではなかなかだと思はれます。ありのままの實相を觀るといつたところでまた、觀る人の稟質にも經驗にも視野の角度にもよるのであつて、何れは個性の如何にある。私のやうな性情の者には、どういふものか、人間的葛藤や戀愛などといふものよりも、この大自然の中にうちひたるといふさうした歡びの方がずつと身について深くなつてゐる。寧ろ宗教的にまで虔ましい歡びを感じてゐる。この中にどれほどの生甲斐を感じてゐることか。無常光明といふか、萬物は流轉する。これを無常とも觀る、光明とも觀る、無であるから有であり、有であつて無である。或る人は無常を強く觀、私のごときは光明を深く感ずる。季節もさうした移りゆく自然の姿の現はれであります。

自然の風光の中に、この季節を最も感じ、最も幸された者の「詩」(廣義にいふ)は、寧ろ短歌より俳句の方に多い。これは短歌は本來人間抒情が主であり、俳句は季感による象徴的表現を重んずる。短歌には季題の制約はさして無いが、俳句はこの季題と離れえない。それだけに季節に對する感情感覺も複雜に體驗され研究も積まれてゐる。極めて短い詩形の中に、約束もされ、包

藏もされてゐる。この點からいへば芭蕉とか蕪村とかいふ俳諧の先哲の方が、古來の歌人たちより一層に深く、また廣く遊んでゐる。それでこの向きの歌を作らうとする人は、一應俳句の方も讀み、歳時記をも坐右に置くべきである。ただ歌人は俳句に於けるやうに歳時記に囚(とら)へられないで濟むことは詩形が幾分長いので、さうした緊密な制約に束縛されない自由さがある。季節の花といつても、北方と南方とでは大いに趣も時日もちがふからであります。しかし、何れにしても己れの感覺を開いて直接實相實物に卽いて寫生するといふことが第一であつて、それならば誤りやうが無い。觀照の透徹如何、歌品の價値は兎も角として、初學者は眼前の風光を直寫するといふことを、先づ心がくべきだと思ひます。

季節を感じ易く、歌としても作り易いのは、その季節の移りかはる時、たとへば晩冬から早春、暮春から孟夏、晩夏から立秋、晩秋から初冬といつたそのかはり目の頃にあります。何故かといへば、倦み疲れた心、何か新に來るものをいち早く豫感する歡びが、一味の爽かさを我々に伴つて來るからであります。萬葉の持統天皇御製、

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天(あめ)の香具山(かぐやま)

を拜しても、この鮮かな白の點出はどうか。或は古今集の敏行朝臣の歌、

秋來ぬと目には清(さや)かに見えねども風の音(おと)にぞ驚かれぬる

などは季節に對する敏感さで有名であります。

ここで一寸おもしろいことをお話しよう。或る畫家がこの歌を評して、「目には清かに見えねども」ではない。「目には清かに見えつつも」が本當だ。そんな鈍感でよいものかと私に云つた。私もこれには贊成で、眼の修錬を積んだ畫家にとつて、立秋の風の音に驚く前に既にその風の姿が觀えてゐる筈なのだからであります。さだかには見えないやうでも、それはよく觀える。觀えてゐなければならぬ筈だからであります。この歌が觀念的なのは、實物に卽いたやうでも、どこかに机上の題詠といふ風が見えます。一葉落ちて天下の秋を知るといふ古句と共通のものがある。

それではどういふ風に季節の歌を作つたらいいか。私共の常に云ふ幽玄とか餘情とか、さうした深いところでなく、初學の方の取りつき易いところから解說してゆきたい。さしづめ私自身の作品から例をあげることが、誤りが無くてよいかと思ひます。

東京郊外砧村大藏の西山野に於ける私の「砧村雜唱」(歌集白南風第四部)生活は昭和六年の初夏から同八年の冬まで續き、謂ふところの「日月ともに明らかにして、季節の推移亦おのづからなる玄理にかなふ。自然隨順の三年」であつた。かうした田園の風光に興(あつか)つて、私がどんなに季節

の色と香とを感じ、どんなにまた私の朝夕を朝夕としたか。少しづつ選抄して、この稿を進めてゆきたいと思ひます。取りたてて色々の歌集から拔かないで、その三年の推移を推移とした方が却つて親しみもあり、より自然であることを思ふ時に、皆さんも先づ私と同じやうに生活し、同じやうにその季節に順應する心もちになつて戴きたい。就いては歌集『白南風』の後記「砧村」の下半を豫め念頭に入れて置いてほしいと思ひます。

「この家は簡素で風致があり、和にして洋、何か處ましくて、まことに田園の住居と思へる。庭は狹いが、ささやかでも芝生があり、掌ほどでも苺の畝があり、花壇もある。古木の梅、樗の若木、藤の棚、檜葉垣の向うに植木屋の植込があり、坐ながらにして南の空に雲の去來が仰がれ、野の涯、夜の星座までが廣々と眼界にはひつて來る。門傍の薄、萩、茶の木垣の横の電柱、白木槿、或は左の書齋の前の山茶花、躑躅、沈丁、月桂樹、小さな祠、門前の道路、畠、田川、狹い田の竝び、萱原、色とりどりの畑の向うには竹山に高槻。東南には本村の火の見、ラヂオ研究所の對の無線塔。このあたりの景情は、四時、わたくしをいかばかり樂しましてくれることか。」

ただ、おもしろいことは、毎年々々同じ風景を觀、同じ季節を感じてゐる。それで次第に目に馴れても來、同じ歌材に對して感覺の新鮮性も失はれても來ます。ちやうどスキートピーが一年咲き盛ると、同じ土には翌年は咲かない、それで地を代へねばならぬ、そのやうに三年もゐるとその眺めに不感性になつて來る。表現の類型化は自身を腐らせる。で、私は居を移す。私はこれ

を家庭旅行と云つてゐるのですが、今は同村ながら成城南の方にこの二月から移つて來てゐる。隨分引越し好きだと笑はれるけれども、あまり旅へも出かけない私には、さうした家庭旅行がせめては必要なのです。

いつも新しい風を、光を、色を、香ひを。

二　夏

それではその第一年の初夏から始め、これに次々の年の同季節のものを入れ交ぜにして、選抄してみます。

夏向ふ霞にあかる若葉木の木群のみどり盛り層むなり

新居の前景です。季節は初夏、なやましい五月半ばの霞、その霞に照り明つて、日にましにもくもくもくもくと層をなして盛りあがる若葉の綠、田の畦や野路のそば、近くにも遠くにもさうした木立や森やが、門前からも二階からも見えてゐました。私はよく初夏に引越す、さう極めてゐる譯ではないが、その季節が最も鮮かに私を誘惑するのではないかと思ふ。その若葉に對つてゐると、じつに腦髓までが綠に染つて來る、さうしてこの綠の感情が一層にその新居の生活を我と祝福する。私はまた郊外電車に乘つて、よく明治神宮へ詣で、代々木の原を散策したものでし

た。綠、綠、綠でした。

若葉樫しきりかがよひ午ちかし明治神宮の春蟬のこゑ

代々木練兵場朗らけく明し若葉どき上下八方にとどろく物音

代々木の空若葉盛りあがる色見れば青あり綠あり時闌くるあり

かうなると、もう若葉の祭でした。色も複雜して來ました。森嚴な神宮の森の蟬のこゑ、練兵場を疾驅する砲車隊、飛行機、トラック、タンク、機關銃の音、上下八方に響き合ふ、その明るさ、朗らかさはどうだ。かうした歌はただ觀たままを寫したといふのでなく、その感動を生々と韻律としてうち出す。

田の遠は若葉かがやく日ざかりを往還の埃吹きつけはしれり

この往還は、多摩川の調布から澁谷へのぼる街道で、自動車やトラックやバスが通る度に埃が白くあがる。その埃が田の向うの幾群か盛りあがつて照りかがやいてゐる若葉木立へ吹きつけ、吹きつけては、はしつてゆく。今は鋪裝されたが、その頃は埃がひどかつた。門の前へ出ると、それがよく南の遠くに見えた。かうした日ざかりの埃をも私の感情は追つて行つた。

桐の花ふふむこなたの日おもては蛙が鳴きて水田さざなみ

そこらの農家の脊戸や家垣の藪や木立にはよく桐の木が植ゑてあつた。その薄紫の桐の花が蕾みそめる頃には、こちらの田には水が張られ、その田の水が微風に漣を立てて、日に輝き輝きする。さうして蛙が鳴く。いよいよ桐の花の季節になつたなと思ふ。明るい明るい田園の眺めでした。これはずつと近い見わたしであつて、石井なにがしの家。

白南風の光葉の野薔薇過ぎにけりかはづのこゑも田にしめりつつ

季は空梅雨に入つた。空も雲もむしむしと白つぽい。白南風は多く梅雨あけに吹く風であるが、その年の氣候次第でその半ばにも吹く。空梅雨のをりは大概白南風です。光葉の野薔薇は野薔薇の一種で、私の造語ではない。その野薔薇もおほかたは散り方になつて、葉がいよいよ細かに層んで照りかがやいて來る。さうして時々に小降りの雨が催して來る、蛙の聲が田にしめつてぎいぐうぐうである。この野薔薇は私の狹い庭にも一本あつたが、田川のへりにもあちこちにあつた。

まだ鋤かず狹田の田岸の鴨萱の根を泳ぎつつ蛙らはゐる

夏の田やいまだ鋤かねどぬめり田のむらさきの泥光りまされり

草ごみに荒く切りゆく田の土は犁の刄型の紫の塊

いつたいに、この土地は玄土なので、耕田も遲れる。印旛沼地方を了へてから、馬を借りて來るとのことでした。武藏野は畑が多くて田は少い。門前の畑を隔てて狹い田が横長に續き、緣には細い田川が流れてゐる。その田岸の鴨萱は綠に萌えたつてもまだ田は鋤きにかからない。ただ蛙がちよぼんちよぼんとその根の水を泳いでゐる。第一首はさうした情景であります。しかし、既に田の紫の泥はぬめつて、夏らしい光澤を日に日に增して來てゐる。これが第二首目。第三首は、いよいよ田犁で鋤きにかかる。芹や紫雲英や鷺草や、草ごみに荒く切つてゆく、その田の土は犁の双の型をして紫色の塊だといふのです。これはつやつやしくて夏らしい香ひのする土でした。しみじみと美しいと思へた。その土を勢よく荒く切つてゆくのでした。

大葉栗夏はとすゐの房花のさやかにあかり田毎代搔く

どの田でもいよいよ代搔きをはじめます。その頃から淡黃な栗の花の季節が搖れ出して來ます。

大葉栗しろくなだるる花群は深大寺出でて布田へ行く道

鳥居には一木栗の木花さはに穗に咲き垂れて代搔きの馬

かうした景情は南畫風にも見え、何か日本的な版畫の趣にも着色されて來ます。

熟れ麥の大麥の穗を照りつくる六月の日射暗きがごとし

麥の秋目も病ましかもとどろ來る戰車かぎろひ砲つづく見ゆ

麥の秋です。世田谷砲兵隊の郊外調練が、殆んど毎日のやうに行はれるのもその頃でした。

風おもていとどかぎろふここの野は麥ほこりたちていふばかりなし

畑の色は黃に黃褐に、明るくてさびしい麥の秋、その麥の埃の香はしい風。

わせ竹の若葉に霧らふ夏がすみ何か日中の音闌くるなり

向ふ東には孟宗の竹若葉が新綠に萌えて見える頃には、何か日ざかりに音がしてゐました。藪の農家では麥扱きをはじめたやうでした。さうして夏もいよいよ深くなつてゆくのでした。

夏霞おほに蒸し立つ野平をふきあがる雲ぞ低くかがやく

南方の觀望です。座敷に坐つてゐても、さうしたむしむしした野平の空の霞にふきあがる低い雲の輝きが見えた。

畦竝木遲き若葉もふきたちて靑葉がくれのまた明るなり

二番出の若葉です。青葉になり、すでに黝みかけた梢から、また鮮やかにふきあがる若葉のみどりです。

植ゑ竝めてみどりすずしき下の田を畷も畦も見のあをみつつ

田の水に茅萱うつりゐしづかなりこのすがしさの眞晝經ちたる

ちやうど、畑を隔てた前の水田はすでに植ゑつけをすまし、眼に入るかぎりが田も畦も綠にすずしく見える、その田に水の畦の茅萱が映つてゐるのがまた閑かでした。梅雨もあがつたのでした。

代搔きて水も足らふや夜は蛙ころろ樂しめり玉ふくむこゑ

樂しみて蛙聽く夜の水口は水も遊ぶか音ちよろろゆく

かうした代搔きの頃から、蛙のこゑは水にひびき空に響いて來ます。さうして炎天がつづき、墓のこゑも老いて來ます。夜は夜で、その勢は繁く、またその水に泳ぐ影までが黑く、ちよぼんちよぼんと音を立てます。

たぼたぼと蛙混み合ふ日のさかり田岸はしろき虎の尾のはな

人ゆかぬ荒玉水道草ふかし音に老けにけり隣田の墓

田に滿ちてしげき蛙はよく聽けば子らが小床に呼び鳴くごとし

水張田の遲き月夜の時あかり泳ぐ蛙のくろくしづけさ

向うの荒玉水道は水田に隣つて、家の前の道路と平行してゐます。水道の地上は草が深くおのづからに堤をなしてはゐますが、殆んど行く人の影もなく、ただ非常時の軍用道路として一直線に通じてあるだけなのでした。

蛙鳴くくらき水田の夕澱み電柱に添ひて月のぼる見ゆ

月の道いつか南へ下りぬらし光は涼し田にひたりつつ

短夜の月の光です。宵の口は圓く赤く、風塵の中を、庭隅の電柱に添うてあがり、初夜過ぎには涼しく南寄りを進んで、その光は田へひたひたと觸れて來ました。

日ざかりの田中の黝きひとつ松夏はけはひに闌けにつつあり

白小雲かがよふ野良の末にして鐵塔のよき閒隔は見ゆ

そのひとつ松は小さな祠のしげみの空に聳えてゐます。門前から南を見た晩夏の靄と松との風

情です。その向うにラヂオ研究所の對の鐵塔がよい間隔を保ち、さうして秋口に近い白い小さな雲の團々が浮んで光つてゐました。大藏の野はこの鐵塔の近代風景で、また地方の田園とは別の趣を呈してゐます。その爲に私の眼の遣り場もどんなに樂しかつたか。

前の田川の螢、黃金蟲、門畑の陸穗のそよぎ、唐黍の花、唐辛子の花、桑の實、忍冬、或は雷雲、鐵鉆雲、驟雨、それらの歌はここに抄しないが、歌集を見てほしいとおもひます。

蟬のこゑしづもる山の晝闌けて光る黑檜の土用芽は見ゆ

その土用芽も黝くなると、いよいよ茅蜩の金線の季節となるのでした。

東山野この夕はじめてきく聲の茅蜩のこゑは竹にとほれり

月すでにのぼりて淡き黃のしめり茅蜩のこゑぞ森にとほれる

私の居たとこが西山野、その東が東山野、竹藪があり、淨水場へのぼる新道路があり、槻の家垣があり、丘があり、その丘にはゴルフリンクの芝生があり、白い淨水場はまた、アンリールッソオの畫趣が淸爽な姿をして見えました。

三　秋

うち向ふ竹の林の夕じめりひぐらしのこゑをひとり聽きゐる

茅蜩のこゑは秋につづく。さうしてさうした竹の端山には、時とすると薄い紫の夕霧が、紫そのもの、匂そのもののやうに引きはへてゐることがあります。秋なのです。

氣色には匂のみなる夕霧の竹の端山にありてしづけさ

幽玄と餘情です。

風前に朝居るしろき積雲の下空あをみ早やもすずしさ

油熬る蟬の鋭聲は繁ながら立秋を今日を涼しくおもほゆ

互生葉の樗の瑞枝風立ちてそのすずしさはかぎりなく見ゆ

葉鷄頭の火立にそよぐなるこびえ日は透りつつ色の涼しさ

蝗麿網戸にとまり涼しさよ灯さしむけて我ら夕餉食す

いよいよ秋です。何もかもが涼しくなる。さうして對の無線塔の空には、白魚のやうに群をなした鱗雲が風に吹かれて流れます。

白魚の移ろふ群のひとながれ初秋の雲の空にすずしさ

流れけり鱗だちつつ正眼にもすずしくしろくみなぎらふ雲
月あかり水脈引く雲の波だちて夜空はすずし水のごと見ゆ

砧村の秋は雲と月とに高く、さうして明らかに、露つぽくなるのでした。その月の歌を拾つてみよう。

雨夜雲移ろふ月のつぎつぎと先あかりつつすでに露けさ
猪子雲照り出る月の傍雲の氣に引く見れば茜細雲
一方に蛙啼く田のはるけくて月わたる下び雲堤引く
房ながらまろき葡萄は仰向きて月の光にうちかざし食む
月夜よし二つ瓢の青瓢あらへうと見つつおもしろ
照りいづる月は魚眼のごとくなり吹きながす雲よしろき水脈立
照り強し月の面を撲つ雲の眼には裏べを立ちのぼりつつ
秋はいまさなかとぞ思ふ向つ岡月明うしてこの夜十六夜
月夜風しろくかがよふ穂すすきの旗手は長しなびかひにけり
ここの谷地冷はなはだし夜は起きて月夜すがらに雲の行見ゆ
月の前おのれ消えつつ飛ぶ雲の後來る間の空のすずしさ

雲迅し月に逆らふしばしばも後夜はあはれに裏あかりして

夕方は庭から、夜になつて門前や東山野への土手、或は荒玉水道から、夜が闌けてからは二階の寢室から眺め入ることが私の樂しみでした。かうした一つ一つの月と雲との象を一つ一つの歌によつて審さに心讀してほしいと思ひます。私の歌は實相に卽いて觀照してゐます。想像でほしいままに詠んではゐない。深いところを味つてもらへば何よりではあるが、さうでなくとも之等は實相の觀照であるから、ただその事象だけに就いて見て下すつても大體は理解されることと思ふ。この中に理趣を探してはならない。ただありのままに受取つてほしいと思ひます。本來、短歌作品を觀賞するにはその色を、香ひを、光を、動きを直接に觸れて味ふことが大切であり、くどくどと持ち廻つて却つて重點を逸してはなるまい。で、かうした月の象にしても、若し會得がいかなかつたら、その月そのものを私の之等の場合と同じ角度で實際に觀察してみることです。正身でぶつかることです。

砧村の秋は、秋分の日射を帶びた赤松、野分の頃の渡り鳥や啜を行く樽みこし、白い木槿、演習の小旗、門竝の黃菊、その他いろいろと私は感興を得て作してゐますが、頁に限りがあるのでここには例證を差控へます。

四　冬

野にあれば季のうつりのしづかなり霜は明らかに人はすなほさ

自然に隨順して、きびしい霜にも素直に心をまかせてゐる姿です。季節のうつりといふものも、さうした人にはしづかに明るく、無理がなく移つて來る。

霜は今はいたりつくしてしづかなり畦つたひ來る庭鳥のこゑ

霜は置くだけは置いた。そのしづかな畦を鷄のこゑがして歩いて來るのです。これもつい下の田圃の朝景色でした。

うち沈む飯粒見れば冬の田の後ゆく水も冷えとほりけり

これは前の田川、冷えとほつたその冬の水底に飯粒が沈んでゐる。その白い幾つかの飯粒の色と光澤とを思つて下さい。ここにも人間の生活がある。

常無きはいよよ清明しさらさらに冬の淡水もながれ來にけり

冬はことに水が冷えとほつてゐる。その淡水がさらさらと小さな田川を流れて來る、水は流れてとどまるところがない、流れるゆゑにまた新しく流れて來る、無常であつていよいよ清明なの

であります。

冬の水いさら小川の日に透きて影うごくみれば流れつつあり

その小流れの淺い水底に日が照り透いて何か動くものの影が映つて行く、その幽かな波の影が、その影を見ると、まことに冬の水は流れつつあるのだといふのです。これもよく見うける圖です。

冬の田の足跡見れば入り亂り氷雨たまれり深き泥の田

冬の泥田に深い足跡の凹みが入り亂れてゐる。その凹みには氷雨がたまつて半ば白く凍つて見える。田を刈つた人の足跡なのでせうが、その後の冬のきびしさを、私はこの傍の土手をあるきながら、或る朝この眼にとめたのでした。さうした冬の田に鱗のやうに美しい氷が張り、また月の光に見える刈株もわびしいものでした。かういふ歌があります。

冬の田は稻ぐき黑き列並に鱗だちたり美き氷張り

冬の田に月の光の來るとき稻莖は見ゆさざら薄氷

冬の田の深田の氷鰥びわれて月の夜頃はよく光るなり

五　春

田の水にぬるむ薄氷のちらら照り春は日ざしに見えそめにける

田の水がちらちら、ちらちら光つてゐる。それは解けかかつて薄くなつた氷に日が當つてゐるのです。その日ざしにも春が來たのを私は感じた。その光が私にはうれしかつた。

春すでに刈田に黑き泥の面のふくらみ柔しうちにほひつつ
うちはずみにほふ青みや兵ふたり歩のそろひをり田に映る影

刈田の黑い泥も盛りあがるやうに柔かにふくらんで來り、どことなく草のにほひなども含んで來る。それにいくらか水のぬるんだ田の面には歩調をそろへてゆく二人の兵士の影が映つて行く、その田も畷も、すでにうちはずむ青いものが香つて來た。さうした早春の田圃なのです。

吾が門よ夜ふけにきけば春早やもかはづのこゑの立ちてゐにける
初蛙鳴くやいづこと窓あけて耳とめてをり月のおそきに

或る早春の夜、その初蛙を聽いた。心をとめ、そのこゑに聽きほれてゐる私であつたのです。

春じめり馬頭觀音の小夜ふけて立ちそめにけり田蛙のこゑ

馬頭觀音は、私の門前からほんの少し先、二つに岐れた角のところに、ただ一基の石が立つてゐた。

日のあたりなにとなけれど春もやや立枯草の叢根かがよふ

かうした何となく春の氣分を、私は私の庭の立枯れになつた草の根にも感じたものです。

さうして、田川にはお玉杓子が生れ、田には草が青み紫雲英が咲き、あたりの木の芽立がいよいよ春らしく萌えて來ました。一括して例證して見ませう。

椿山芽ぐむ春日を水田にはまだひえびえと風のさざなみ
猫やなぎ花はぜそめて田川には蛙子生れぬ繁みかへる子
雨づつみ薄き田の面の上清みにおたまじやくしはよく泳ぐなり
かへる子はしじに濁せど道つけて薄ら水のる春の田の泥
雨づつみにほへるみれば紫雲英田や春の日永はよくふりにけり
春の田にうつら啼き出る蟇のこゑえごの木の芽もひらきたるらし
萌えいでて柔き木の芽の或る梢は白うかがやけり花かともあはれ

鶏まじりあそぶ野鴨の埒なさよ水には入らず紫雲英田にゐる

春の田にしじに闌けゆく芹の花しろき鷺鳥の頸根伏せたる

田の圦に映る楛の叢嫩芽この閑けさをいまだ塞きたる

さうして春日遲々として、煙霞もなごやかに、日月ともに大きく西と東にかかります。

このゆふべたとしへもなくしづかなり日は明らかに月を照らしぬ

まつたく大藏の野はさうした大景の中に、春の夕日を、滿月を照り合していよいよ色も香ひも闌けつつあつたのでした。

以上、冬と春とは、取りいそぎ、簡潔に切り上げることにしました。たださうした砧村の自然を季節を私は寧ろ天惠として私の生活の中に採り入れて來ました。初めにも述べました通り、それらの歌を季節の歌といふ範疇へ入れて、それのみでいい筈はありません。もつと深いところに心は据ゑて、直觀もし、餘情も思つてゐるつもりであります。ただの敍景ではなく抒情であり、籠るところも流動し節奏するところもあるべく思つてゐる譯で、自らは一々にこれを解義することとは避け度く差し控へることにします。

どういふ風に季節を感ずべきか、また歌として表現すべきかといふことは、これでほぼおわかりだらうと思ひますが、兎もあれ、感覺を常に磨き、一木一草の微にも心を留めて、つぶさに之に直接に觸れていくことが大切だらうと思ひます。つまりは同じ事物を觀照するにも、その透徹如何は平生の修錬と態度の問題だらうと思はれます。

（昭和十一年五月稿）

朱筆の跡

添削實例

朱筆の跡と云ふ、私の之等の添削實例は、私と私の周圍の間の備忘錄である。で、簡潔を旨としてゐる。一門の中では、ただ一言二言で濟む場合が多い。理會の度が平生に深いからである。

さうした中から選抄するに當つて、なるべく解りのよい實例を輯め內輪のことは省略した。之等の作者の中には作歌閱歷のまだ淺い人もあれば、十年以上の修業の向きもあり、一樣ではないが、兎も角短歌作法の定石といふやうなものの、何か手がかりになる朱點が、初學の人々にも感じてもらへるであらうと思ふ。短歌の技法を會得するには、一にも修錬二にも修錬である。理論をいくら自分で樹てて見たり、複雜な作法書をいくら讀んでみたところで、手技の上には實際の經驗を積まない以上どうにも致し方のないものである。かうした實例も何かの參考にはなるであらうが、ほんたうは自身の實作に就いて、自分の信ずる師から一々に見てもらふことが、その日常をそれ以上に正しくすることであると思はれる。自然生といふものはどこかに我流の瘤が出過ぎる。しまひには、手がつけられなくなる。これはよほど警戒を要する。短歌のやうに特殊の定型は、學ぶに律があり、修むるに法があり、天分の才華にまかせて何をやつてもいいといふのとちがふ。

これだけはよく考へて置いて平生を善處していただきたい。

なほ、之等の作品をそれぞれ自己の作品である場合の例證として、一應は取りあげ、さうして私の朱筆の跡をよく吟味してもらひたいと思ふ。

なほ、傍線が引いてあるところは、抹消した個處であり、括弧の内は添削の個處である。

溝川に蛙棲みゐて（ゐるらし）雨夜など（には）鳴く音が家の中まできこゆ

棲みゐてとすると、溝川に蛙がゐることを斷定してゐる。これは推測にした方がゆかしい。雨夜など、ここではにはとハッキリいつたがよい。模糊とした雨靄の中から蛙の聲を聽覺でとらへるのだ。原作では理智が先になる。

雨の日の鹽濱に人はあらずけり釜屋にありて（か居らし）鹽は（を）焚きつつ

この四・結句も、理念で解決して了つてゐる。かう底を割つては色も香もないことになる。人影の見えぬ鹽濱の景情は初・二・三句で分明してゐるのであるから餘は推測にして氣色に籠らすべきである。釜屋にかをらしとなる。かの一音の字あまりをも心して味つてほしい。鹽はは前の人はとはが二重になる。をとする。

木の芽立ちし（つ）雑木の山の薄日照り山櫻こそ仄かなりけれ

木の芽立の狀態が、現在にまで續いてゐるのであるから、過去の立ちしであつてはならぬ。立つとすべきである。

汚れ雪がたまり殘れる春彼岸裏（の）竹山に吹きあれ（る）る風

裏竹山、かうした未熟な造語は避けるがよい。字餘りになつても、當り前にのの一音を挿入するがよい。でなければ外に一工夫することである。荒れるは俗。

水はりて稻はいろづく（植田すずしき）一と平土藏の白さをみなうつしたり

色づくでは黄金の秋になる。水が張つて植ゑたばかりのさ綠の稻とは見えぬ。植田すずしきとすべきところである。さがせば植田といふ風な適當の熟語はある。

閑かなり朝土のうへにわが捨てし煉はみがきの白色の殼

「春日和」と題する連作中の一首である。連作として全體から見れば、これは春朝の歌だと肯ける。而し一首とりのけるとこの歌自身には季感が無く、閑かなりだけでは春だか夏だかわからぬ。かといつて十分に觀照したものを隱約されたともおぼえぬ。たとひ隱約されてはあつても、何年の何月の何日の何時頃に觀照したものか、訊かれたらハッキリと答へられるだけの事實は摑

んでゐなければならぬ。題や前後の歌の援助を借りるやうでは獨立した一個の歌とはならぬ。連作の弊がここにある。二句の朝土を假りに春泥とすれば季感は出る。が、實際がただしつとりと濕つてゐただけかもしれぬとなると、かう添削していいかわるいかといふことになる。で、手をつけぬことにした。また朝土をそのままにして置くとすれば、初句にもつと季節の感覺をうち出すべきである。閑かなりとのみではこれが現はれぬ。

讀む歌のまことよろしきは讀みつつしおのづからなる息ぞ洩らしぬ（の洩れいづ）（一）

つたなかる己れとは思へ思ひ凝り苦しみし歌ぞ人に示しぬ（よよく見よ）（二）

二者とも手功者である。ただ何れも四句で挫折してゐる。（一）の息ぞ洩らしぬでは楔のぞが少しも利いてゐない。それにこの句が歌全體を嘆息の説明にして了つた。息の洩れいづとすれば、溜息そのものとなつて響いて來る。語句は、それ自身が感覺體であり律動體であらねばならぬ。（二）の人に示しぬも折角の四句のぞを弱々しく假死させ、これも亦一首を説明歌にして了つた。二・三句で凝つた曲折を見せ、而も初句からのうねりを、りゆうりゆうと通して來ながら、結句がとれでは惜しまれる。添削は人よよく見よと氣を負うたものになつたが、四句までの律動が、かうした五句を生み出さすことが最も自然の行き方であらう。

朝空のくもりがとぼす玉霰沍土の上にはねて（つつ）ころがる（げぬ）

跳ねてころがる。兎か何かのやうである。はねつつころげぬ。霰らしく、しやしやしやとはねる。つつを考へよ、一音の字餘りは却つてこの四句を躍動せしめる。

あなしづか宙の吊り火の下照りに獅子むれてをり動きやまぬも（獅子）

結句のも、全體をすぼめる。ざわざわと動きやまぬ獅子の群像が姿としてもその幅としても現はれて來ぬ。これは結句に改作のとほり、獅子の語を重複さして重くうち据ゑたがよろしい。一音の字餘りの例。

夕かげにひかりつつ舞ふ鳶一羽時計の塔に見えずなり（に）けり

この場合の結句のなりけりは流れる。腰がすわらぬ。必ずなりにけりとすべきである。字あまりで差支へない。その方が却つて落ちつく。

孟宗の秀はきほひ立つ五月空眼に痛きまで青く澄み（に）けり

これも同斷。

兒と來たる宮居の裏の徑のべに下向き(て)咲ける木苺の花

下向き咲けるでは枝にぢかに花がついて下向いてゐるやうである。ぎこちない、下向きてので一字の挿入で蕚と枝との間に花梗が見え、そよぎが見える。生きるも凝るも、ほんのちよつとのことである。

大潮のうねり盛りあがる氷海は風も底(ひ)より吹き荒るるらし

風も底よりはそこの二音が手薄である。大潮のうねり盛りあがるといふ、一音の字あまりをもことめた、力と流動相に對して、弱く、平べつたい感じがする。上に字あまりがある時は大概は下にも字あまりがなくては、腰が据らぬのである。これはよく記憶してゐてほしい。二個處の字あまりの場合である。上に字あまりがある時は下にも字あまりを。また、この四句風も底ひよりと一音を加へて、すなはち風と力とを揺り起すのである。

野の村に灯は早や(も)見えて居り海の向うは陽のあたる山

二句、灯はともしびと訓ませたらしい。これをあかりとして、早やの下にも一音を入れた。これでよし、この方がおとなしい。もに感情もこもる。

夜の靄のおも(し)て流るる街なかに聽きてありけり田蛙のこゑ

二句、おもては面である。おしては押してである。意味はちがふが、音からすればもとしの一音の差し換へである。一音で景情が變化する。靜が動になる。

ひそかなる我れの歩みに(や)啼きたちて山の小鳥は遠く移りぬ

二句、歩みに、にとすれば、我れの歩みと小鳥の關係とが緊密に過ぎ、因縁が卽き過ぎる。また、このにの一音で、この歌一首全體を散文に近いものとし、事象の説明のみにして了ふ。歩みやで一首が韻律的になり、歩みながらの幽かな心の歎きが出る。この一音に表現の機微がこもる。ただ慾を云へば初句のひそかなるを再考することだ。選者の私としては、そこまではわざと手入れずに置く。當人の修業にならぬ。

大海はいま流氷のしきりなり春風のなかを船さへ(ひとつ)出でず

結句、二字さへを三字ひとつに差し換へた。字あまりになるが船ひとつ出でずで、大海の流氷を望見する感動が強く餘韻を引く。景情も春風の中に廣くなる。

沖の海に點々とある流氷のしづかに(まつぶさに)見ればみな動きたり(つつ)

四句、しづかにでは固定する。觀照時の態度の説明に過ぎず、眞の觀照そのものに徹してをらぬ。まつぶさにとすると、流氷の點々がさながらに一つ一つ明瞭に生きて來る。結句動きたり、靜から動に移り、或は、動からまた靜に据る。一時の動きしか見えない。流氷を審さに見ると、その點々はいづれも動きつつあるのである。動きつつでないと、その流動相は、如實に顯れぬ。なほ、つぶさにでよい筈なのを、まを冠して、何故に字あまりにしたのかといふ疑問が起るであらう。云はう。このまの一音が全體の楔であつて、一に眞實感を點つ。この音の味解は舌頭の直感で得よ。なほ、まの字あまりではあつても、さして耳障りにもならぬ譯はま、みれば、みな、このま行音の重疊にある。

栗の花ほのか(むらがり)匂へる(ふ)木がくりに金魚桶置く晝ひそかなり

この歌にはほのかとひそかがある。栗の花に金魚桶を配して、白晝の幽けさを點じようとしたにちがひない。しかし幽寂相を二つ重ねれば、彌が上に効果は增す筈なのだが、事實は寧ろ相殺して了ふ。一を据ゑて一は消すべきである。で栗の花をほのか匂へるなど云はないで、むらがり匂ふと却つてその反對にその花叢を、その空に明るく匂はすべきである。晝ひそかなりと据ゑて又、却つて、その金魚桶の水中に生きた鮮紅色がちらちらする。この實と虛の關りをよく考察することである。

鷺鳥一羽うごく波紋のひろがりのみにして(ひろがりてゐてしづけき)この池はひそけし

三句から四句にかけて、ひろがりのひろがりてゐてと重ねてみた。のみにしてとか、ひそけしといふよりも、かう重ねて、却つて靜謐な波紋のひろがりが、さながらにひろがつてゆくのではないか。虛から實へどこまでもうち出すのである。原作では實から虛へとすぼまつてゆく。ひそかなやうで、ひそかな中の動きは止つて了ふ。

退く波のいちめんに孕む水泡のなか漁師の族(ざわと)立ちあがる見ゆ

「アラン」を見てといふのである。結句立ちあがる見ゆでは、のそのそとしてスピードが出ない。映畫なのだから、それでは緩慢に過ぎよう。で、ざわと立ちあがると改めた。大勢の漁師が一面の水泡の中からざざざと立ちあがる。

(との)曇り日の遠き櫻の梢越しに波の穗がしらややに白けし(つつ)

のが二つ重なる。訂正作にものが重なつてゐる。ところでその位置がちがふ。

くもりびのとほきさくらの。

とのぐもりとほきさくらの

原作二つののの間には六音が介在し、訂正作では九音の距離となる。近ければ卽き過ぎる。の音は弱いので句折れがする。でこの重なりは餘程注意を要する。遠ければ何れも救はれる。それに訂正ではとのぐもりとほきとの重い音がほどよく重なるので冒頭がよく落ちついて來る。波の穗がしらは、やや白けながら動いてやまないので、過去の白けしであつてはならぬ。未了のつつにする。

鳥(の)聲のいつか靜もり背戸畑は早や夕靄のむらさき深し

のが聲の後にあるのと前にあるのとでは、かうもちがつて來る。

濱に來て枇杷の實食めばうま(し)うまし沖は白帆のあまた竝べる

うましうましで、舌鼓が鳴つて來る。かういふ場合、一音の字あまりを恐れてならぬ。これがほんたうの感情さながらの動律なのだから。

からしの花目にさやかなるこの空地日昏れも童等のつどふ賑はしさ(ひるにけり)

つどふ賑はしさと云つて了へばそれまでである。この煩はしさは、二句のさやかなるを消して了ふ。餘情も無い。過ぎたるは及ばざるがごとし。だから、ここは、單につどひるにけりと淡々として置く。としても決して寂しくなりはしない。童子嬉遊の情景が却つてまざまざと浮いて出る。籠めて句はすのである。

川(の)岩に腰かけてわが見はるかす(あなたの)里は綠樹に(の山)櫻花咲く

初心の人らしい。四五句、里は綠樹に櫻花咲くは生硬で、若葉まじりの櫻花を歌ふつもりであらうが、これでは混雜する。櫻だけにして、素直に里のあなたの山櫻花とした方がよくとほる。

白藤を風吹き通る常ながらかかる哀れを(我は)よろこび(ぶ)にけり

ところで、この結句、よろこびにけりは流れるのである。初句から四句までを可なり細かに彫琢してある故、この結句もそれに相應して抑揚をつけぬと、原句のやうではだらりと閒が延びて了ふ。帽子から腰までを精巧に著飾つて、股から下は裸の長臑といふ風態になる。

いきほひて(ふや)搏ちはじきあひ海贏の獨樂二つながらに蓙を落ち(に)けり

結句、落ちけりは弱い。落ちにけりとすべきである。幽かでも音を立てて落ちたのである。に

の音が無ければならぬ。初句もいきほふやと彈みと力をつける。

ととのはぬ聲のをさなさ（よ）間をおきて蛙の啼くが夜はきこゆる（え來）

二句目をさで切る時、たとへば、この聲のをさなさ、或は山のしづけさ、花のすがしさといふ類の二句切れであるが、ともすると輕く、そのさの音で浮く。これは餘程注意すべきところである。よくやる手なのだ。が成功することは少い。この歌ではよを加へることにした。かうした字餘りは許さるべきであらう。結句のきこゆるであるが、これもよくやる。聲ぞきこゆる等である。しかし、それも物により時によるのである。兎角大仰になる。かけろの雛の聲ぞきこゆる、などしたらをかしなものになるであらう。この場合も幼な蛙の聲に耳傾けてゐるのだから、それにやや隔ててもゐるだらうし、時間の上にも間をおいての上のことだから、きこえ來ぐらゐでよろしい。

大寺の甍に鳴れ（あた）る風の音遠（く）ききをれば心はしづむ

甍に鳴れる風の音。鳴れると響かす要もない。あたるがよからう。大寺の屋根一面に風があたる。音もおのづからに心に響く。遠ききをれば、遠くとくを一音挿む。距離が寂しみをこめて音を傳へる。聽く人の姿勢も時間も暗示されてよい。

うち群れてわらさ揉みぬく朝の海の生簀は暗し音なかりけり（濃き潮の色）

わらさ揉みぬくに對して、音なかりけりといふよりも濃き潮の色と、いつそ視覺に徹した方が、却つて心頭にその無音を感じられるのでないかと思ふ。さうしてここはどうしても體言止めでぴつたりと据ゑねばならぬところだ。三句に一音の字餘りもある故である。

いかづちを鎭守の神と齋きつつ（まつり）この村人は崇敬あつし

この三句も齋きまつりとうやうやしく詠んだがよい。字餘りも難にはならぬ。むしろ簡朴に感じられよう。

ここで警戒したいことは、三句のかうしたつつである。どうにも落ちつかぬやうに思ふ。

月の夜は山際の線も見えにけり谷川に添ひて歩み（つつ）來ぬれば（し）

結句、歩み來ぬれば、では、その歩む動きが續いて見えない。「歩いて來たので月あかりに山際の線も見えた」といふことになると、何か引つかかりがついて來る。さうでなく、「月明の夜は山際の線もよく見える、谷川に添うて歩いて來たことだ」となると、嘆息までが、ありのままに形になつて現はれもすれば、その歩いて來た時間も、その人の足の動きもこもる。この改作は

純然たる二段構成になつてゐるが、それが却つて効果をもたらすやうに思はれる。

夕河岸(空)の明り親しみたもとほる土手の薄も穂にいでにけり

夕河岸は土手と二重になる。で、夕空とする。

この林泉にうつす(る)つつじの花明り宮居すがしき(今ぞ)初夏の朝

うつすはうつるの方、素直である。原作結句初夏の朝は弛緩して生色が明らぬ。今ぞ初夏と感動をこめる。躑躅咲く五月の悦びが、我が眉にも輝くであらう。

えにしだの花にふりける細雨(しづく)は涼しう見えて花(色)冴えにける

初心の人の歌であるらしい。花が二つ重なるゆゑ、後のは色とする。三句、細雨はと強調しないで雨しづくとする。もつと慾をいへば、涼しう見えて、色冴えにける、この何れかを目立たなくすることである。が、ここでは止めて置く。

つゆばれの空のなごみ(きらら)にさやさやしぷらたなすの葉はひるがへりつつ

梅雨晴の空はなごみといふ感じではない。きらきらしいものである。ことにぷらたなすの葉の飜る上の空のことであればなほさらである。よく寫生することである。

泰山木は朝のひかりに華々(すがすが)し花瓣みだれあひてただよふ香り

泰山木の花は華々しいか、すがすがしいか、その色と匂とに就きて觀るべきは觀、その感覺を現はすには、常に正しく的確でなければなるまい。

名匠の腕の冴えかやこの怒濤キャンバス破り(にあふれ)狂ふかに見ゆ

前田寛治の「海」と題してある。これも畫家の腕の冴えを強調しようとして、その海の畫の怒濤の凄まじさをキャンバスを破りと歌つてゐる。しかしこの破りが一向利かないのは却つて破られるキャンバスの薄い背面までが見えさうだからである。寧ろキャンバスに溢れとすると畫面に盛りあがつてその怒濤は氾濫する。この怒濤といふ強い句が前にあり、結句が狂ふかに見ゆとある。で、その中間はおとなしくして置くことである。腕の冴えかやといふ二句もも一層考へてみるか。

青嵐つつぬけに吹く部屋ぬ(のう)ちに吾子の積木の船は出來たり

つつぬけに吹くといふ現代のいなせと部屋ぬちとか吾子（あこ）なぞといふ古風とが調和するかどうか。これでは青嵐が腹がけの印半纏で、大時代の姫御前のお部屋に飛び込むやうなものである。ことにうちでいいのを續いてぬちなどとしないでもと思ふが、この弊は歌壇にもなかなか燻ぶつてゐる。

「男子らのにほひ充ち滿つ兵舍ぬち」といふのも他に見えた。これも兵舍のうちとあるべきである。

盛（岡）中（學）の二階の窓ゆ（に）眺めたる大岩鷲の雄姿なつかし

盛岡中學を盛中といふやうなことは歌にはさしひかへたい。帝展とか小田急とかの略稱は聽きいいものではない。

ビル（ヂング）街や靄の底ひをわが歩み仰ぐ側壁のただにか黝き

これも同斷。ビル街などとせず、ビルヂング街とすべし。

（うち）滴りて水の上浮くモビル油のひろごり迅し紫の綾

滴りて、事象の說明以上に出てゐない。うち滴りといへば、事象そのものを感覺的にも動律的

にもうち出す。ここが大切なところである。短歌道の表現技巧が、意味だけとなればよいといふのならば兎に角、さうではない筈であるゆゑ考へてもらはねばならぬ。うち滴りであるから、一滴一滴の動きも見え、時の閒隔も感じられよう。なほ、結句、紫の滴には少々難點がある。綾といふのがさうである。輕くあしらつただけで、感覺に生彩がない。音韻上浮いてもゐる。○○○紫といふ風にしたいところである。

うち（ひと）なびき羽蟲かがよふ墓窪や晝闌けて此處に通ふ風あり

これは原作の初句、うちなびきをひとなびきと改めた。前の歌にはうちを添へて、今度はなぜ消したか。前のは油の雫が一滴一滴としたたつてゐる、强くうち出してよい。こちらはあの柔かな羽蟲の一群が空中に靡いてゐるのである。うちなびきでは强きに過ぎるであらう。時の閒隔もあらはさなくともよい。かの輕く縺れに縺れた肉色の煙のやうな象を出せばよい。ひとなびきぐらゐでその一群をなびかすところだ。

うちあがり羽蟻かがよふ落葉木の暮合の空をいつくしみゐる

この「白南風」の中の私の歌は、うちあがりとしてあるが、これは羽蟻の昇騰であるからである。羽蟻の一群は地上から高く高く昇つて、空中生殖をする。さうして地上に降りると、凡てが

その羽を落してしまふ。戀愛闘爭も激烈である。そこらにもやもやと渦を卷く羽蟲とはちがふ。時間よりも寧ろ距離が考へられてあらねばならぬ。ふり仰ぐことの遙かなさうした一團の白光ゆゑに、うちあがりとしたのである。尤もこの初句も些か私には懸念されてゐる。後の作者はそれぞれに、時と場合と素材とに就いて、それぞれの表現を工夫すべきである。

月の夜(よ)の(よし)白き路面をたまゆらに鼬鼠(いたち)い行き(走り)て隱ろひにけり

月夜よしと、初句で切つたがよい。原作のやうだと、棒流しで一本調子である。それでは1から2、3、4と順序よく續く散文律である。月夜の白い路面を鼬鼠がちよちよつと出て隱れた、この寫生だけでよいか、その事象が事象だけのものでよければ、歌を思ふ要もなくなるのであらう。抒情の香氣といふものは、短歌を短歌表現の律動に移すことによつて匂ふ。この歌は初句の句切れで些か救はれて來た。四句のい行きては走りてが妥當であらう。そこに鼬鼠(いたち)の姿がちよちよと出て隱れる。

おもむろに待ちし辭令を捧げ持ち流石(さすが)にさびし金魚賣る(の)ころ

原作、結句、金魚賣るころ、輕く浮いて、前を承けきれない、一音(おん)の字餘りにして金魚賣りのころとする。これも私の字餘りの手法である。ここでもひとつ考へてみよう。金魚々々とふれて

來るのである。それを金魚賣るころとすると、少しも聲に動きがない。擔いで來る姿も見えない荷を下して呼んでゐるやうである。金魚賣のころとすると、金魚賣その他の姿も動きもその聲も現はれて來る。

(昭和十一年六月稿)

照準抄

一　照準抄

小序

昭和十三年末より隔月に、讀賣新聞の歌壇の選歌を、佐佐木信綱・齋藤茂吉兩氏と分擔することとなつた。尤も齋藤氏は當分支障があつて休まれる由であるから、佐佐木氏との交替である。右は一と月に廿四、五回の掲載になる。既に私の第一回の分は濟み、總評も終へた。

課題は、支那事變（現地と銃後）及び雜詠（新春・仲冬）である。この中、事變歌が多數を占め、現地將兵の投稿も山積した。これは極めて意義あることである。これに就いては、その總評の冒頭に左の通り愚見を披瀝したが一寸抄記して置く。

＊

今次の支那事變は我が短歌の上にも反省の熱情を新にした。とかく類型に墮ちようとする短歌に一大衝擊を與へたことは事實である。皇國の士魂、人

間性の眞實、死への直接感等を通じて、その發想にも素樸、大膽、率直或は近代の感覺等を縱横に發揮しつつある。又短歌の未來性をも暗示して多大である。私が入手した應募歌によつて見るに、事變に關する戰地或は銃後のそれらは自然諷詠のものに比して遙かに活力に充ち衝動的であつた。只銃後の人が經驗しない實戰の歌を作るのはどうか。ニュース映畫を見て作るのもいい加減にしないと不可ない。銃後には銃後として詠ふべき感情、取材がいくらもある。今後の讀賣歌壇は（少くとも私の選歌欄は）この事變歌に向つて輝かしく行動することが壯快でないかと思ふ。

＊

さて、私は私としての、歌の規準を高めることに、その初めを正しくしようと努力した。何分懸賞募集のことであるから、歌にならない投稿が多く、その中から、佳作と物になりさうな作とを選り分けたのであるが、戰地篇は成るべく多少の手は入れても、採ることにした。戰地の作歌熱は相當のものと見えた。何しろ、材料は素晴らしいのであるから、どうにかすれば良い歌になる。で、少しづつ手を入れるだけは入れて見た。

尤も、作歌の上手下手は表現の如何にあることは無論であるから、掲載された歌そのものが、直ちにその人の技倆とは云へない。ここに私はその原作

と、添削とを抄して置かうと思ふ。これは後日の爲の記錄ともなり、また、初學者の參考ともなるであらう。一々多磨の「鑛」のやうな解説はしないが、これ等の添削の後を、心讀して欲しいと思ふ。

1
（原）大別を越えてゆく日の秋晴れて道べに野菊咲き亂れ居り
（訂）大別山越えてわがゆく秋晴れて道べは野菊咲き亂れつつ

2
（原）十月間に道らしき道を歩みしは二十五里とぞ涙ぐまれつ（鎮土部隊報告會）
（訂）この十月に道らしき道を歩みしは二十五里とぞ涙ぐまれつ

3
（原）銃をとのなほも激しや彈丸運ぶ吾等なりせばなきて愛馬打つ
（訂）銃の音いよいよ激しも彈丸運ぶ吾等なるからなきて愛馬打つ

4
（原）我が友は諸食ひ土這ひ泥を嚙み一山占りぬ漢口陷落の日（友の文來りて）
（訂）我が友は諸食ひ土這ひ泥を嚙み山一つ占りぬ漢口陷落の日

5
（原）戰友の遺骨又銃にかけてあり飯も供へて花も供へて
（訂）戰友の遺骨又銃にかけてあり飯盒の飯も花と供へぬ

6
（原）國境をいましめまもる兵の眼に白かりけむもシベリヤの冬
（訂）國境をいましめまもる兵の眼に白くきびしきかシベリヤの冬は

7
（原）みいくさに命ささげしわが夫にかはりて今日も馬を曳く
（訂）みいくさに命ささげし背にかはり妹なる我や今日も馬曳く

8
（原）幾度か死線をこえて吾子はなほ進むなる俤を見る
（訂）幾度か死線を越えて吾が子なほ進みつつあらむ俤に見ゆ

9
（原）月かげに手足凍えん歩哨をばおもひてわれは砧打つなり
（訂）月かげに手足凍えん夜の歩哨おもひつつわれは砧打つなり

10

（原）兵の母老いたる身を厭はずて働きをる見れば泪こぼるる
（訂）兵の母老いの手業も厭はずて働かず見れば瞼熱し

11

（原）わがいへの軍事扶助法にかかはるを恥ぢらうて夜更けまでも繩なふ
（訂）わが家の軍事扶助法にかかはるをただに切なくて夜更け繩なふ

12

（原）還り來てすまぬとのらす傷兵の腕なき袖の風に搖るるも
（訂）還り來し我は恥づとふ傷兵の腕なき袖の風に搖るるも

13

（原）戰線の兄の便りをあけたれば硝煙のかをりほのかに匂ふ
（訂）戰線の兄の便りをわがあけて硝煙のかをり胸撲ちにけり

14

（原）貯め柿の軟らかにあまくなりたるを炬燵にて食らふ冬さりにけり
（訂）貯め柿の軟らにあまくなりたるを炬燵にて食らふ冬來りつつ

15

（原）かへりきてひたすらひもじ爐のはたに着物をとけば砂こぼれけり

（訂）かへりきてひたすらひもじ爐のはたに着物ぬぎつつ砂こぼれけり

16

（原）樹々の梢こゆるぎもせずしつとりと師走の今朝の雨にぬるる見ゆ
（訂）樹々の梢いまそよぐなしくろぐろと師走の朝の雨にぬるる見ゆ

17

（原）山茶花の咲き散る庭の霜じめりみ冬さぶ日となりにけるかも
（訂）山茶花の咲き散る庭の霜じめりみ冬さぶ日となりにたるらし

18

（原）赤とんぼ眞白く霜に凍えつつ狩田の土に一つ死にをり
（訂）赤蜻蛉濃き朝霜に凍えつつ刈田の畔に一つ死にをり

19

（原）あれすぎに月のおし照る山峽の家竝は低く雪をかむれる
（訂）あれはてて月夜押し照る山峽の家竝は低く雪をかむれる

20

（原）限りなきゆとりのうちに大聖戰ひた押し進むる力見よ
（訂）限りなきゆとりにあるか大聖戰ひた押し進む底力見よ

21 (原) 大淺間噴煙見つつ拜賀式ゆくわが靴は降灰踏みぬ
(訂) 大淺間の噴煙見つつ拜賀式にゆくわが靴は降灰踏みぬ

22 (原) 幾山河越え征きませしわが夫はいづこの初日おろがみいます
(訂) 幾山河越え征きませしわが夫はいづこの初日をろがみいまさむ

33 (原) 切餅の小口焦げつつふくらむが心にめぐし新年の春
(訂) 切餅の小口焦げつつふくらむがこよなくめぐし新春立ちぬ

24 (原) 銀翼も連ねて翔る荒鷲の行手さへぎる何物もなし
(訂) 銀の翼連並み翔る荒鷲の行手さへぎる何物もなし

25 (原) 郷土部隊感狀きこゆそのあした白き柩は四百來ませり
(訂) 郷土部隊感狀きこえそのあした四百の柩還り來ませり

26

(原) 盲となりし兵はいひにきわれもはや二つの人生を味ふを得と
(訂) 盲となりし兵はいひにきわれもはや二つの人生を味はひなんと

27 (原) 補充馬の訓練に乘る人等皆な忙しく見ゐ髭生し來る
(訂) 補充馬の訓練に乘る人等皆な忙しくぞ見ゆ頬髭伸びつつ

28 (原) いよよ儼し統制のことあげつらひこごるざら雪踏み踏み歸る
(訂) いよよ儼しき統制のことあげつらひこごるざら雪踏み踏み歸る

29 (原) 歸還兵の語りを聞くに眼光はいよいよすはり激戰しのばゆ
(訂) 歸還兵の語るを聞けば眼の光いよいよすわり激戰しのばゆ

30 (原) 絡繹と鏡にうつる初春の往き來見て居り髮刈らせつつ
(訂) 人の波鏡にうつる初春の往き來見て居り髮刈らせつつ

31 (原) 山峽に積りし雪は幾すぢの瀨の如く見ゆ遠山なれば